めぐみ…俺がきっと…。

たけぎつね

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

めぐみのことが大好きな誠司くんが闇堕ちして世界の滅亡を望み、プリキュアと戦うお話。

本編でちょっと気になったところを妄想で補う感じになってます。捏造しまくってますご了承ください。

祝！完結！

永遠ルート→たけぎつねの妄想が爆発したルート。

深淵ルート→レッド過去編後から分岐した誠司くんのかなり深刻な闇堕ちルート。

トムー氏のリクエストルート。

目次

永遠ルート
決意。 1
絶望。 8
結晶。 17
削除。 25
戦場。 34
アカイロ。 41
ウラギリ。 51
サヨナラ。 61
それぞれの想い。 73
それぞれの意味。 85
君が望むなら。 95
俺が望んでしまった。 105
思い出を無駄にしたくない。 119
助けられてよ、みなさん。 133
消したくない。 146
明日も、一緒に。 159
深淵ルート
絶望さんを、ご招待 184
炎の組織、活動開始。 190
刻まれた、叫び。 198
見え始めた、希望。 212
取り戻した、はずなのに。 226
きっと、誠司が笑える世界へ。 237

永遠ルート
決意。

めぐみが、泣いた。
もうどうしたらいいのか分からない、と。
プリキュアを恋愛禁止としたブルーという輩。
彼が元クイーンミラージュと恋人になっていることは俺も知っている。
そして。
めぐみがブルーに好意を寄せていることも知っている。
めぐみ。
またお前は自分を押さえるのか…？
お前らしいけど。
《本当にそれでいいのか？》
確かにお前は優しい。そんなとこも大好きだ。
だが、やっぱり俺はめぐみに幸せになってほしい。
もう。うんざりなんだ。お前の悲しむ顔を見るのは。

めぐみはいつも俺を、俺達を、皆を笑顔にしてくれた。励ましてくれた。応援してくれた。相談にのってくれた。

お前にたくさん貰った。どれだけ今まで助けられたことか。今度は俺が助ける番だ。だが、どうすればいい？

目の前にいるめぐみを見つめる。

するとめぐみは、ふぅ、と息をついて。

「なんか愚痴っちゃったね…。ごめん。でも、ありがとうね。本当、いつも助けてもらっちゃって…エへへ」

「違う。それは俺の台詞だ！いつもめぐみに、めぐみの笑顔に勇気を貰ってるんだ。俺もめぐみの役に――」

「――ううん、いいの誠司。今話せただけで充分助けてもらったから。――あー、すっきりしたー！」

「――そうだ、じゃあ俺何か飲み物買って来ようか？」

「あ、うん！誠司様セレクトでよろしくお願い致しまする」

「お、おう！楽しみにしているのだぞ」

めぐみはうん、と笑った。

この笑顔を守りたい。

――どうやって？

守りたいと思って入った道場で習得した技はサイヤークには効かなかった。それどころか俺はサイヤークにされ、めぐみに救われた。なんて無様なんだ。

俺は。俺は――

『ドガァァァァン』

「!?」

突如、大きな音が耳に響いた。

衝撃音…めぐみのほうからだ。もしかして…。

「サイヤーク!?」

☆☆

「大丈夫か!?」

「うん！心配かけてごめんねっ」

「心配くらいかけさせてくれよ…」

俺は小声で呟いた。

「え？」

「いや、何でもない…」

ひ「ま、ちゃんと私達も途中で駆けつけられたし、良かったよ～。ね、だから安心しなよ、誠司！」
お前はよくやってるんだから。
「はぁ～。そんなボロボロで言われてもなぁ。
たまにはちゃんと休めよ？」
め「大丈夫！毎日寝てるしね！」
「そうか……は」

「ははははははっ！」「ふふはははははっ！」
顔を見合わせて大声で笑った。何がツボになったかは分からないけれど。
すんだ青い空色が俺達を見下ろしていた。
ひめ（二人ともお熱いですなぁ。ゆうゆうもいおなも分かってるみたいだしやっぱここは立ち去るかねぇ）
「あー、そうだー！いおな、ゆうこ、この前言ってたやつがね…！あーー、ごめんーーー、ちょーーーっと私達用事あるから先に帰るねーーーー!?」
ひめが目線を上に向けて言う。そしていおなとゆうこ
も見合わせて、

ゆ「そうだったねー」
い「じゃ、じゃあお先にー」
と言ってスタスタと帰っていった。
「俺達はどうする？」
「んー、どうしようかな。あ、そういえば、渡したいものがあるんだけど」
「？」
はい、と言ってめぐみが差し出したのはマフラーだった。可愛らしいが着飾りすぎないおとなしめのマフラー。そして、下には小鳥とクローバーのバッチがついていた。
「下手だけど…私なりに頑張ってつくってみたんだ。バッチは、最近誠司、ずっとつらそうで思い詰めた感じだから、幸せがきますように、って。幸せハッピネス！ってね！」
「めぐみらしいな。すっごい嬉しい。ありがとうな」
「どーいたしましてっ」
「実は俺からも…」
俺はめぐみにネックレスをかけた。
大きな丸の中心に小さな宝石が吊られている。マゼンダ色の宝石だ。
「うわぁ～、キレイ！すっごい！ありがと、誠司！」

「こちらこそ」
この笑顔だ。
この笑顔を、見ていたいのだ。

《ずっと》
そう、ずっと。
《この笑顔を長い間奪っていたのは誰だ?》
ブルーだ。プリキュアの力を与え、めぐみを失恋させてそんな気持ちも知らずに平然としているあいつだ。
まぁ確かにめぐみをプリキュアにしたのはひめでもあるが、ひめは自分の弱さを受け止めているし、皆を勇気づけてくれるし、一緒に戦ってくれているのだ。
だから、傍観者のブルーに腹がたつ。
《腹が立って、終わりか?》
終わらない。今度こそ。今度こそ。今度こそ。今度こそ。今度こそ。今度こそ。今度こそ。今度こそ。
めぐみを助ける。
「どうしたの?誠司、だまっちゃって」

ブルーを倒す。
めぐみを傷付けるこの世の全て愛を消す。
《この世界が、憎いか?》
当たり前だ。
めぐみをこんなふうにさせた世界が憎い。
めぐみを裏切り自分中心に動く、否、動きもしないブルーが憎い。
戻ってきてそうそう自分の恋人を手に入れたミラージュが憎い。
こんな世界。
こんな不幸な世界。壊してやりたい。
《お前にはその力がある》
だが俺は無力だ。
《本当の力を引き出してやる。俺のところへこい》
すべては。めぐみのために。
たとえどんな手段を使ってでも。

「大丈夫だ、めぐみ。――――俺が守ってやるからな」

絶望。

青空が広がる草むら。
そこに俺は寝転がっていた。
風が頬に当たり僅かに髪を揺らす。
そして隣にはめぐみが瞳を閉じて幸せそうに眠っている。
あぁ、穏やかな時間だ。
何にも邪魔されない時間。
めぐみが泣かずにすむ。絶望もせず。『誰か』を考えることもない。
こんな時間がずっと続けばいいのに。
冬とは思えない暖かな日の下で。
ただ風に揺れるだけ。
「せーいーじーー・めーぐーみーー・」
ひめが来た。その後にゆうこといおなも続く。
いつものメンバー。うん、この時間も悪くない。
始まりこそ決して穏やかではなかった関係だが、今はもうすっかりそんな隔たりは消

えている。
　三人が来たことに気付き、めぐみはゆっくりと起きる。
「みんな！」
「ピクニックって聞いたから、私、気合い入れて作ってきたよ～。パンじゃないけどねー」
　そう言ってゆうこが大きなお弁当箱を出し、オープン♪と言いながら蓋を開ける。
「私はサラダを…」
　といおながちいさな容器を取り出す。
　めぐ「いおな、料理とかするんだねー！」
　いお「まっ、まーーねっ！」
　ひめ「チッチッチッ…騙されちゃいけませんぜ奥さん！いおなが来るときコンビニでこっそりサラダ買ってましたぜい！この前だって――」
　いお「あっはははははははは…？ひめ…？」
　いおなの顔が暗くなり、恐ろしい笑みを浮かべてひめを見つめる。
　ひめ「あっあー。そんなに怒らなくても…」
　いお「ふふふ」
　すみませんでしたぁぁぁーと言いながら、いおなから逃げ回るひめ。

めぐゆうせい「ふふふふあははっ！」
そんないつもの愉快な光景に、おもわず三人は笑い出した。
楽しい。そう感じる。最近あまり感じてなかった感情だ。
そして幸せな時間はあっという間に崩れ去った。
「やぁ、みんな。楽しそうだね」
「こんにちは」
二人来た。俺にとっては招かれざる客だ。
めぐみはその一人であるブルーを見つめ
「……ブルー！き、来たんだね！」
と明るく振る舞った。
顔は曇ったままだ。
ブルーはそれに気付いていないのか、普通に俺達の輪の中に入ってきた。
見せつけてるのか？
自分の幸せを。
こいつは他人を気遣うことを知らないのか？
俺は気付かれない程度に睨み付けた。
腹がたつ。

煮えくり返りそうだ。
すると突然、豊かな緑色の草むらが一気に枯れた。
空も暗くなり、木々も朽ち、周りの景色から動きが無くなる。あんなに吹いていた風も全く吹いてこない。
そして、めぐみたちも全く動かず固まっている。
なんだ、これは？
まさか、敵か？
俺は身構え周りを見回す。
ひとつ、赤い何かが動いている。
その赤いやつ以外は特に動いているものはない。
ならばあいつが敵か？
赤い何か――――いや、赤い光？
ぼんやりと、だが力強い光。
「誰だ！」
俺は叫んだ。唾を飲み込む。微量の汗が滴っていく。
《そう身構える必要はないぞ》
「……」

油断など出来ない。そのままの体制で実体の掴めない赤い光の方を見据える。
低く響く声だ。最近も何処かできいたような…？
《はぁ…。まあいい。俺はお前に協力するためにやって来た》
「どういうことだ？」
《俺の願いは愛を、ブルーを、世界を消すことだ》
「……それが何故俺に協力ということになる？それにまだ質問の答えを聞いていない」
《―俺はレッドだ。愛など信用できん裏切られるだけだ。矛盾した感情だ。怒り憎しみ悲しみ妬み嫉み恨み…愛があるから傷つくのだ。貴様の想い人のように》
《相楽誠司。わたしと一緒に来い。力を目覚めさせてやる》
「愛やブルーや世界を消す？そんなこと俺はしない。悪にだけは染まることはない！めぐみが悲しむ！プリキュアと戦わなきゃいけなくなる！そして俺には力がない。全く歯が立たない。あいつらが目の前で必死で戦って、ボロボロになってもまだ諦めない、って何度も立ち上がっているのを！……俺はいつも見ていることしか出来ない」
《いいや。お前には力がある。人並みならぬ力が。まだ隠れているだけだ。躊躇いなど必要ない。全てをさらけ出せばいい》
「そんなこと――」
《貴様には大切なものがあるんだろう？そして本当は答えは出ている筈だ》

「……」

《当初はプリキュアの周りの人間を強制的に洗脳しようかとも思っていたが…。お前は洗脳する必要もなし。そして強い。気に入ったのかもな、はは。》

《あと、これをやろう》

赤い光の方から何かが飛んできた。慌ててキャッチ。

透明な結晶？何色にも染まっていない透き通った結晶。

「なんだ…？」

《そのうちわかるさ。――ないとは思うが、誰にも情報は漏らすなよ。決心がついたら○×川のこの前の場所に来い》

この前の場所――恐らく先日めぐみに失恋を打ち明けられた時の場所だろう。そうだ、そのときに声を聞いたのだ。

《本当にそれでいいのか？》と。

《この笑顔を奪っていたのは誰だ？》と。

そうだ。俺はどんな手段を使ってでも守る。

その途中でたとえめぐみと戦うことになったとしても。

結果、めぐみが笑顔になれるのなら。幸せになれるのなら。ブルーを消す。世界を壊

す。そして、全ての災厄の根源、愛を、消す。滅茶苦茶にしてやる。今までめぐみがそうされてきたように。
ミラージュも。ブルーも。幻影帝国も。光も。希望も。愛も。

あぁ。

めぐみ。

俺が守ってやるからな。

☆☆☆

「……はっ！はぁっはぁっはぁっ…はは」
夢オチか。だが現実味のある夢だ。
そして、只の夢では無かったらしい。

手には先程貰った結晶が強く握られていた。
レッドとかいうやつと話したことは本当らしい。
夢だと思われないように結晶を持たせたのだろう。
時刻は午前二時。
冬の夜中は闇が深い。たしか、丑三つ時だったか。
――確かに世界を壊すのはいいかもしれない。
たとえ俺が死んだとしても。
めぐみが幸せになれるならそれでいい。
だが、あいつを信用できるのか？
――いや、信用する必要はないか。
そしてあいつの目や話し声には確かに禍々しい感情が渦巻いていたのも分かった。
「……」
俺は静かに着替え、足音を潜めて外に出る。
ごめん、と家に別れを告げる。
そういえば、明日はクリスマスイブだったな。
町にはいつも以上に灯りが灯っている。
めぐみの辛さなど知らずに。

みんな自分が幸せならいいのだ。
誰でも普通そうだけれど。だが、秘密にしているとはいえ、プリキュアだ。
あいつはお前らのために、何も見返りなんて求めずに何度も何度も救ってきたのに。
誰も気付かない。
救うのは当然だとでも思っているのか？
ふざけるな。

ぼんやりと光る月の下、俺は拳を強く握りしめた。

結晶。

川沿いの道。
そこには、綺麗に手入れされたベンチが設置されている。
声を聞いた場所。そして、めぐみが泣いた場所だ。
「待たせたな」
「いや、もう少し悩むかと思ったが…。早かったな」
「…まぁな」
「確認だが、決心は本当についたんだな?」
「ああ」
「結晶をだせ」
パーカーのポケットに入れていた、手首から指先までくらいの大きさの結晶を差し出す。
その瞬間、レッドが、突如作り出したと思われる短刀で俺の腕を切りつけた。
「……何だ?」
「うめき声ひとつ上げないとは…想像以上だ。――安心しろ。すぐ治る。結晶を傷口

にあてろ」
鮮血が滴るそこそこ深い傷口に結晶を当てる。
すると透明だった結晶が赤色に染まっていった。
「もう離していいぞ」
結晶を腕から離す。
もう傷口は塞がっていた。
「お前の力について説明はいるか？」
「頼む」
「お前がめぐみに向けていた想いは、他人の恋心よりも圧倒的に大きい。そしてめぐみがブルーに恋心を向け始めたとき、一部が嫉妬に変わった。ミラージュが戻ってきたときからお前の心はブルーとミラージュへの憎しみに変わった。昨日の一件でその闇はかなり深くなった」
「――この前お前がサイアークになったときのことは覚えているか？」
「ああ」
「サイアークになっているときの鏡のことは？」
「……？」
「サイアークが浄化されたから記憶もないということか…。まあいい。見せてやる。瞼

を閉じろ」

☆☆☆

あれはミラージュが戻ってきて間もないころのこと。

近所のスーパーに夕飯の買い出しに行く途中で、誠司はホッシーワにサイアーク化された。

「鏡に映る未来を最悪にしちゃって〜！いらっしゃいサイアーク！」

ああ、またサイアークにされるのか。

くそ、あいつらの役に立つどころか何度も足を引っ張ってるだけじゃないか。

つい先日もだったのに…。

鏡型の棺が現れ、俺を閉じこめる。

一体何回目だろうか…心底自分が嫌になる。

「サイアーク!!」

「街を破壊しちゃって〜！」

暗い。

暗い闇が広がっている。

果てしない闇の空間に相楽誠司は倒れていた。
「ここは…？確か、俺はサイアークにされて…」
状況を考えながら立ち上がる。
目の前の全身を映せるほどの大きさの鏡に誠司は映る。
――否、誠司ではない誠司が映る。
何かが違う。見た目は同じだが、雰囲気だろうか、妙な違和感を感じた。
『鏡の誠司』に誠司は問う。
「お前は…誰だ？」
〈はっ。相楽誠司だ。分かってるんだろ？お前は俺。俺はお前だ。元からあったお前の強い想いが、度重なるサイアーク化によって俺という形を生み出した。常にお前の中に俺はいる。お前の負の感情の集合体だ。憎しみ、悲しみ、嫉妬とかも混じってる。想い

の力、とはよく言ったものだ。これから先、もっと負の感情が集まったらお前に変わって復讐してやろうと思っていたが…。まさかこんなところで会うとはな。―いつまでたってもあいつの役に立てない〉

「……そう、だな」

〈サイアークのまま世界を壊せばいい〉

「それは駄――」

〈本当は壊したいんだろ?〉

「そんなことない!めぐみが…学校のみんなも…罪のない人が傷つく!復讐なんて…」

〈まだ早かったか…。まあいい。断言する。お前はいつか世界を壊すだろう。俺の人格が出ずとも、な〉

〈感情はお前の中に留まり、さらに膨張を続けるだろう。そしていつか、俺が出ていく。どうせお前はめぐみの幸せしかみていないのだから、他はそんなに気にしてないだろ〉

「そう…かもしれない…な」

〈ならば壊せ!どんな手を使ってでもめぐみを幸せにするんだろう?昔から、ずっと小さい時から、想い続けてただろう?めぐみのためなら―〉

「他は消す」
〈たとえ俺が〉
「死ぬとしても」
誠司は目を閉じる。鏡に触れる。
冷たい感触が指に伝わっていく。
やっぱり俺はいいやつなんかじゃないな。
ヒーローには、なれない。
溜息をこぼしながら心の中で呟いた。
――――――
「大丈夫!?誠司！ごめんね、いつも辛い思いさせちゃって…」
「何言ってんだよ。お前のせいじゃない。いつも助けられてばかりで、こっちこそごめんな。いつも戦わせちまって」
誠司は拳を握りしめた。
☆☆☆
「という訳だ」
「だいたいは分かった。やっぱり俺はずっと昔からめぐみのためなら他はどうでもいいと思ってたんだな…。改めて知れたよ、自分を」

「それはよかったな。――よし、説明も終わったし、次のステップだ」

「結晶を腕に刺せ」

俺は左手で結晶を握りしめ、右腕に思いきり突き刺す。

血が指へと流れ出て指先からポタポタと落ちる。

すると、結晶が怪しげに光輝いた。

紫色や赤色や黒色が混じったような何とも言えない色に変化した。

「……」

そして俺の周りに結晶から出る闇がまとわりつく。

やがてそれは服のようになる。黒を基調として赤のラインがが入っているコートのようなもの。結晶は胸元に。サイアーク化時の鏡の棺の姿が元になっているのだろう。

「よくやった。これでお前もプリキュア以上の力を手に入れたんだ！――変身を解除するには右腕のリボンを抜くだけだ」

俺はリボンを抜き取る。すると、蒸発するように服が消え、結晶が右手に握られていた。

「感謝する。これでやっと…あいつを…」

俺は、山の上の公園の草むらで寝転がり、星を見上げて朝を待った。
ダイニングの机に書き置きもしたことだし、そのまま行こう。
☆☆☆
『ピーンポーン』
ブルー「どうぞ。誠司くん一人かい？どうしたんだい、こんな朝早くに」
誠司「ちょっと相談したいことがあって…」
「僕にかい？ミラージュだったらまだ寝ているけど…」
「はい。二人だけで話したいんですけど…」
誠司は少し笑みを浮かべた。
――――さぁ、終わりの始まりだ。

削除。

「はい。二人だけで話したいんですけど…」
誠司は笑みを堪えるついにこのときがきた。
首筋に汗が滴る。
出来れば外に連れ出してやりたいが、怪しまれるくらいならば避けた方が良いだろう。
ミラージュが起きてこなければいいが…早めに済ませるか。
「で、相談というのは？」
ブルーが促す。水色の澄んだ瞳だ。壊してやりたくなるほどに。早く、早く、と結晶もせかしているような気がする。
「あぁ――――何であいつらなんだ」
せっかくだから何の変哲もない世間話などではなく、ちゃんとした質問をする。これはずっと思ってきたことだし、丁度良い機会だろう。ま、結末に変わりはないが。
「何で…めぐみやゆうこやいおなが…ひめも…戦わなくちゃいけないんだ」
「確かに、ひめはアクシアを開けた張本人だし、いおながお姉さんの敵をとろうとしたの

も分かる。けど、いおなは復讐を終わらせた。もう戦う必要なんてないはずだ。めぐみもゆうこも。誰かがやらなきゃいけないってわかってるけど…やっぱりあいつらに危険な目にあってほしくない」

「まだ中学生なんだよ…なんでみんなのためにあんなにぼろぼろにならなきゃいけないんだよ」

「――――」

「それに、なんでお前は戦わないんだ？女の子に戦うように指示するだけで動こうとしない！禁止事項をつくったりするだけだ！恋愛禁止？何だよそれ！なんで全部背負わなきゃいけないんだよ!?元はと言えばお前がミラージュをディープミラーから守れなかったからなんだ！俺達を……巻き込まないでくれ」

叫ぶように、思っていたことを吐いた。

言えなかったこと。言いたかったこと。

気づくと温かい何かが目に溢れていた。

「……誠司くん」

立ち上がり、ブルーを見つめる。

「何だ…？」

「君は…憎しみに捕らわれているのか…？」
「…は？もしそうだとしてどうする？お前のやってきたことに変わりはない！」
もう我慢できない。お話は終わりだ。こいつは質問にも答えようとしない。もう正体もバレているだろう。
「憎しみに捕らわれている…？はっ。そうだよ。お前のせいでな！」
すぐさま結晶を取り出し変身する。
ブルーは少し驚くような表情をしたあと、悲しげな顔をしやがった。
「お前を…消す」
手に力を込め、赤い球を出現させ、ブルーに向けて放とうとしたとき―動きが止まった。声が聞こえたからだ。
「ブルー！誠司がいなくなった…って……？」
「……っ!?」
めぐみか。後ろにミラージュもいる。母さんかミラージュが知らせたのか。まあいい。どうせ避けられない戦いだしな。
「めぐみ！ミラージュ！」
「これは…!?え、どういうこと…？誠司…？」
「これが誠司さん!?もしかして…ディープミラーが？」

「恐らくそうだろう…。もう誠司くんは憎しみに捕らわれてしまっている…。めぐみ…戦えるか…？」
「…嘘だよね？…誠司は私達のヒーローだもん。なんで…誠司と戦うの…？」
「お話はもういいか？」

会話を断ち切り、赤い球のエネルギーを纏わせて強化した拳を振り下ろす。
ブルーは半円のバリアのようなもので防ぐ、が、俺はそのまま力を込め、バリアを破壊していく。
ヒビが入り、もう力は限界のようだった。だがまだあいつは何か力を隠しているような目つきでこちらを見ている。少しバリアが動く。―そういうことか。俺は少し後方に下がる。
そのすぐ直後、バリアが一気に大きくなり弾け、家の壁ごと吹き飛ばした。
「避けられたか…めぐみ！もう僕の力は残っていない！早く！」
「……くっ。そんな力があったとは。だがもう今ので使いきったのか。お前は弱い。何でだ？何故弱い？プリキュアよりも弱い？プリキュアにさせた張本人が？」
「……っ」

ブルーに問うてみるも、返事はない。
左手で右肘を抑え、へなへなと座り込むブルーをミラージュが支える。
ちっ。
見ているだけでイライラしてくる。こんなやつがずっと指令を出していたなんて。禁止とか言ってた張本人が一番幸せそうに恋をしているなんて。
「……返すことばもないのか」
そのとき。
「ラブリー・ハートリストラクション！」
桃色の無数の光弾が飛んできた。
俺は避けたり、腕で弾いたりして回避する。
「めぐみ……忠告だ…。俺はブルーを消す。そしてこんな腐った世界もぶち壊す。プリキュアの苦しみを終わらせるんだ。それを邪魔するならお前とも…戦わなきゃいけないんだ…だから…邪魔しないでくれよ」
「誠司…それはこっちも同じだよ。私はみんなを助けるの！誰も傷つけさせない！誠司もうやめて！それと、ごめんね…？私、全然誠司の気持ちに気づいてあげられなくって…憎しみとか、悲しみとかも全部…」
またお前は他人のことを思うのか…。

いつもそうやって自分のことなんて考えないで突っ込んでいく。たとえアンラブリーの言うような、誰かに誉めて貰うための正義感だとしても、誰かのため、みんなのため、どれだけ傷つけられようと立ち上がる。守りたいという心は本物。それがめぐみだ。昔から変わらない。それをあいつは…利用したんだ…！

「めぐみのせいじゃない！全部こいつのせいなんだよ！あいつに聞いた。こいつらが兄弟喧嘩をして、ミラージュはたぶらかされて、帝国ができて、プリキュアに戦わせてる…こんなやつらのために傷ついてるんだ。ひめがいおなに恨まれていたのだって、元はと言えばこいつが帝国を誕生させてしまったからだ。ミラージュを止められなかった。それを自分では戦わずに少女に命懸けで戦わせてるんだ！お前らはただの中学生だろ？助ける義理なんてないんだ！最後のチャンスだ。俺と一緒に来てくれ。今度は俺が守る。こいつから守ってやる！もう辛い思いなんてしなくていいんだ！」

誠司は夢中になって話す。今までのことを思いだしながら。プリキュアが何度も傷つけられたこと。

しつこい記者がいたこと。プリキュアを優先したせいで学校生活を削らざるを得なかったこと。

めぐみがアンラブリーに傷つけられたこと。

そして――、ミラージュとブルーの仲が復縁し、めぐみが失恋したこと。

「誠司…本当にどうしちゃったの…？正義感が強くて、どんな人にも優しくて、いつも周りを見てくれててくれて…そんな、他人を傷つけるなんてことしたこと無いじゃない！」

めぐみは少し瞳を潤わせて叫ぶ。

だが、決心は揺らがない。

「……俺はヒーローじゃない。ヒーローにはなれない。俺は昔から偽善者だ。結局自分のもの以外なんて考えていない。今もそうだ。お前が思っているほど俺は優しくない。だから、俺はおまえらしか助けられないし助けたくないんだ。『みんな』なんてものは助けたくない。お前らをこんな風に戦わせて、無償で助けてもらってるだけの『みんな』なんてやつらを消す」

「わかんないよ…どうすればいいの…？戦わなきゃだめなの？誠司は洗脳されてるの？倒せば元に戻ってくれるの…？」

「俺は、洗脳なんてされてない。力をもらっただけだ。だから倒しても元に戻るなんてことはない」

「洗脳されていないだって…!?どういうことなんだ…？ではなぜ、誠司くんは…」

「本人の意思だ」

頭上から声が響く。ブルーははっとした顔で見上げ、呟く。

「やはり貴方が絡んでいたのか…レッド！」
　対してレッドはふん、と澄ました顔でブルーを見下ろし、告げる。
「ブルーか。――俺は力は与えた、が、洗脳なんてしていない。奴は自分の意思で自ら来た。お前や、世界を壊すために」
「どうして誠司くんが…」
「お前も鈍いやつだな…。全く、だから愛というものは滅ぶべきなのだ。説明など必要ない！相楽誠司が自分の意思でこの道を選んだのは事実。それだけだ」
「……くっ」
　レッドを見上げているだけのブルーに向かう。
「よそ見なんかしてたら殺られるぞ？」
　そう言って、思い切り蹴りあげる。――が。
「……めぐみ」
　めぐみは――いや、キュアラブリーは誠司の蹴りを受け止め、ブルーを守った。またブルーを守った。
　奴を守った。誠司の闘志はまだ高まるばかり。ブルーを消す。愛を消す。世界を壊す。その一心で闘志をたぎらせる。
「……どけ」

「いや！誠司！目を覚まして！これ以上まだ戦う気なら…わたしも…容赦はしない！」
「……仕方ない」
誠司はラブリーごとブルーに拳をぶつけた。
そのままくはっ、と声を漏らし、破壊音と共に建物の壁へ飛び込む二人。
その光景を眺め、誠司はすこし、少しだけ胸が締め付けられた気分になった。

戦場。

――――。

続けて俺はブルーとめぐみに攻撃しようと手のひらを向ける。――――が

「ちょっと待ったぁぁぁぁぁぁ!!」

という大きな声が聞こえてきた。

「――――邪魔しないでくれ、って言ってもどうせ無駄か」

「そのとぉぉぉりっ！誠司！もうやめなさぁぁぁいっ！プリンセス！弾丸マシンガンっ！」

突如上空からやって来たひめ――――キュアプリンセスは、誠司を止めようと必殺技を繰り出した。

水色の光線が大量に地面に降り注ぐ。

それを誠司は全てかわし、今度はこっちの番だ、とひめに向かって赤い光線を放つ。

「私たちも」

「いるわよ？」
　現れたゆうことおいながひめを守って光線を防いだ。
「――揃っちまったか…」
「相楽くん！もうやめて！」
「相楽くん！守る為の力が欲しかったんじゃないの？みんなを…めぐみを…守るんでしょ!?」
　そう言いながら二人は誠司に拳を向けて向かってくる。
「……俺は…」
「……終わらせるんだ。こんな世界…。ぶち壊す。全部壊す。もう嫌なんだよ…もうんざりなんだ！」
　左手で頭を抱え、誠司は言いながら二人の攻撃を跳ね返し、ひめを含めた三人を赤いリボンで地面に拘束する。
「大嫌いだ！友情も愛も希望も夢も絆も！全部戯れ言だ！お前らに分かるか!?大事な人が目の前でボロボロになるまで見るだけしか出来ないやつの気持ちを！それどころかサイヤークにされるやつの気持ちを！」
「せい…じ…？」
「誠司くん…」

「お前らに分かるか!? 一番大切な人が一番嫌なやつとずっと楽しそうに笑っているのを、あいつが幸せならばと思って応援して見守ることしかできない気持ちを!」
「誠司ぃ…」
「お前らに分かるか!? 今までずっと大切にしてきたものが一瞬にして奪われてボロボロになってしまったときの気持ちを!」
「相楽くん…」
「守りたい人のために強くなろうと決心して続けてきた空手もあいつの役には立てなかった! だれも救えない! 何でなんだよ! 何で俺には力が無い!? 何で見てることしかできないんだよ!?」
「相楽くん…?」
「俺は嫌だ。こんな世界大嫌いなんだ。誰もお前らの苦しみを知らない。あたりまえだ。だけど! 笑っているのが許せない…」
「目障りな光なんて…いらない…。あいつ以外…全部消えればいいんだ…!」
「…誠司さん! 目を覚まして! あなたは私と同じことをしようとしているのよ! みんなを守るんでしょう!? 他にもきっと方法が…」
　プリキュアに変身したミラージュが呼び掛ける。

「憎しみに囚われてはだめだ！誠司くん！君もいつか滅びてしまう！」
「クイーンミラージュ……お前が言うなぁぁぁぁぁぁっっっ!!ブルーもだ！俺に説教する権利などない！」
誠司は感情をぶつける。そして、再びブルーのもとへ降り立つ。
ブルーはいまだに壁にもたれ掛かれていた。めぐみと一緒に。

メグミトイッショニ。

「何でお前なんだよ？何でお前なんかが…っ！離れろ…！離れろ!!」
怒りと憎しみが誠司を侵食し、支配していく。
めぐみを返せ。めぐみのそばにいるな。めぐみをこれ以上悲しませるな。めぐみに触れるな。めぐみに関わるな。めぐみと話すな。めぐみと笑うな。ミラージュと笑うな。ミラージュと一緒に行動してるところをめぐみに見せるな。やめろ…。めぐみは…お前のせいで…！
するといつの間にか、大きな鎌が誠司の手に握られていた。衣装と同じく、怪しげに赤く光る黒い鎌。
かなり大きく、地面に立てても身長ほどある。

少し重いが、誠司にはむしろ軽く感じたのだった。
「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっっっ!!」
ブルーに向かって振り上げる。
すると、
「プリキュア!ラブリー・シールド!」
めぐみがブルーをシールドで守った。
ミラージュもシールド技で重ねて防御。
「誠司お願い!誰も傷付けちゃだめだよ!誠司はヒーローだよ!?いつも助けてくれた!励ましてくれた!町のみんなを避難させてくれた!…すっごい感謝してるんだよ…?」
「戯れ言はもういい!」
さらに鎌を握りしめ、押す力を強める。
「くっ……誠司!目を覚まして…!」
「言っただろ…!?目を覚ますもなにも、元から正気だ!」
神経を研ぎ澄まし赤い力をコントロールし、シールドに突き刺さっている刃を引っ込め、反対側に刃を出現させる。その鎌を素早く回転させ、刃を強く振るう。
「キャッ!?そんな…っ!?」
シールドが割れた。

直後、二人に向かってそれぞれ少し大きめの光線を放ち、遠くまで飛ばす。
「っ……」
橋の脚にぶつかり、倒れる。
ブルー…。お前さえいなければ。あいつはこんなに傷付かなかったんだ。
お前らさえいなければ。ただ感謝することといえばひめと出会い、四人の仲が深まったことくらいだな。
「さよならだ」
「く……――――ぐはっ」
鎌を振り上げる。
赤。赤。赤。
腹部の大きく切り裂かれたばかりの傷から鮮血がにじみ、広がっていく。緑色の青々と茂る草花も赤色に染まっていく。
「うそ…でしょ!?誠司!?冗談キツいよ…!?」
「相楽くん…っ！嘘でしょ…こんなこと…」
「相楽くん！あなた、何やってるの!?…まさか」
「これで死ぬとは思えなくもないが…たとえ不死身だとしても永遠に殺し続けるまでだ」

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
ひめが泣き叫ぶ。
「行くぞ、相楽誠司。とりあえずの目標は達成だ。娘も回収した」
突如現れた鏡からレッドの声が聞こえてきた。
「分かった」
もうひとつ、大きな鏡が出現し、誠司はその鏡に入っていく。

綺麗だった草原は、地面に大きなクレーターが残る戦場となった。
やっと定位置へついた朝日が7時を告げた。

アカイロ。

［ぴかりが丘某所］

放置され続けている小さな廃家屋。

壁には一面ツタがはっており、ガムテープで乱暴に補強されたひび入りの窓、酸化して変色した書類の数々と、その上に厚くかぶっている埃が、最近この建物が使われていないことを物語っている。

誠司、レッド、めぐみは鏡を通ってこの建物へやって来た。

「何だここ？」

「さぁな。長い間使われていない建物を探してたら見つけたところだ。ここならあまり人目にもつかないし立地の都合が良かっただけで選んだが…埃が…」

誠司はリボンを抜き取り変身を解除しながら、レッドは軽く埃を払ったソファにめぐみを寝かせる。

「まぁ別に長期間滞在するつもりもないからいいけどな……てかお前、めぐみに変な真似は―」

「するかよ。俺はこんな娘に興味などない」

「そうかよ…」
そして誠司はプリキュアのアイテムを回収し、めぐみの変身を解く。まだすやすやと寝息をたてている。そこに自分の着ていた上着を被せる。
レッドは小さな椅子に腰をかけ、大きく穴があいてしまっている壁から外の景色を伺い、
「……まったく、地球は綺麗なもんだな…」
と憂鬱げにため息をつく。
「……。なぁ、お前」
「何だ？」
「お前は何で地球や愛を憎んでるんだ？」
「そんなことお前には関係……まぁいい、話してやるよ。ちょっとした息抜きというか暇潰しだ」
☆☆☆
――――幸せは一瞬。愛は幻。
あの頃は幸せだった。
まだ星には生物があふれ、生活があった。
みなの笑顔を見ているだけで幸せだったのだ。

すべてのものに愛を注いだ。
だが、もうそれも終わりのようだ。
「小惑星が接近しています！軌道は……！このままだと衝突して……この星はもう…」
「なんだと!?」
あまりにも突然だった。だが事実。本当に小惑星は接近し、もう惑星レッドの未来は閉ざされるかに見えた。
だが、レッドは諦めずに、立ち向かった。
あるだけの力を使い、星の使者として戦士を誕生させ、共に惑星を守ろうとした。
毎日毎日考えた。より確実に小惑星を消す方法を。
どうすれば惑星の環境を保ったまま被害を最小限にできるのかを。
民の不安もつのるばかりだった。

衝突まで一週間。
運命のカウントダウン。衝突の発表がされたのはつい数日前で、混乱が渦巻いていた。
レッドは近隣の星々にそれを知らせ、小惑星を壊すのを手伝ってくれないかとたのみに行った。

だが、小惑星等がどうなろうと無視できるほど、その星々は結構離れていたため、どの国もわざわざ危険をおかす気などさらさらないようで、どこも断られた。それに留まるどころか、惑星レッド周辺は危険だということで、貿易中止等といった、この星の孤立を招く事態になってしまったのだった。

しかし、最後の願いを込め出向いた惑星ファルサだけは、兵士は出してはくれないものの、物資を協力してくれるとのことなので、感謝して協定を結ばせていただいた。普段はファルサとの仲はあまりよろしくないのだが、緊急事態は別だ！と笑顔でファルサの王が言ってくれた。助け合おうとする気持ちや思いはなんて素晴らしいのだろう、と本当にこのときは思った。

このときは本当に思ってしまっていたたのだ。

――――「きっとレッド様が助けてくれるわ」

星に帰ると、そう皆は言い、またそれを疑う者など誰もいなかった。危機が刻々と迫ってくるなかでただレッドを信じ、応援してくれている姿を見、危機が迫っているのは分かっているが、それを幸せな時間だ、と感じた。と同時に、無力な自分がより惨めに思えた。

こんなにも応援してくれている人々がいる。それだけで最近の疲れが吹き飛んだ。それからはずっと自分の部屋にこもり、特訓をして、力不足だったなんて後悔の無いように対策を練った。

衝突まであと3日。

惑星レッドからはまだ小惑星は見えない。

だが、最近は細々とした隕石が落ちたくるのが増えてきており、民の恐怖も伝わってきた。

また、予想以上に大きめの惑星の可能性が出て来ており、またそれに伴う隕石もかなりの数とのこと。

命懸けの戦闘も高確率で避けられないだろう。

どうするか…。大きな鏡を召喚し、吸収しようにも、鏡で空間を移動したりする際は必ず出口用の鏡がいるため、文字通りの吸収は出来ず、小惑星たちが何処かでまた鏡から出てくる可能性がある…。

なかなか良い策は出ず、今のところはひたすら小惑星を粉々に破壊する、という無茶苦茶な案のみだった。

お茶を飲んで少し休憩。宮殿の中は緊急事態とあってざわざわとしている。ん、それにしても騒がし過ぎないか、と様子を伺い窓から僅かにカーテンを開けて中庭を覗く。

そして、聞こえてきた。

「レッド様は我々を見捨てるのではないか?だって、最近姿をお見えにならないし…」

「あなた、何を言ってるの!?レッド様はきっと今もこの星を守るために作戦を練ってくださってるんだわ!」

「もう手に負えないのかもしれないね……大き過ぎるらひいし…」

「この星に嫌気がさして隕石や小惑星をぶつけて壊すつもりに違いないわ!」

不安はつもりにつもり、やがてガスに火をつけるように広まっていく。疑念を抱き、争いが始まる。

ちょっとした暴動のようなものが始まっており、レッドは部屋を飛び出し、言う。

「何を言っているんだ…?俺はこの星を守る!そのまめにここ最近は鍛えていたのだ。この星を作ったこの俺が見捨てる訳がないだろう!」

レッドがそう言っても、耳を傾けた者はすでに少なくなっていた。変なニュースも流れていた。

一度強く刻まれたものはなかなか変えられないものだ。

人々は疑念を起こし続け、レッドの話を聞こうとしない。無実なのに罪を着せられた

者が検事を恨む、という気持ちが理解できた。
検事側のように、ありもしない罪をひたすら問われ、罵声を浴びせられ、してもない罪を検事の言われるがまま言うかのような。
「何故だ！」
なんともいえない辛さ。
「何で……！」
誰にも相談できない辛さ。
レッドは頭を抱え、ぐちゃぐちゃになった部屋で、綿が飛び出したボロボロの枕で寝た。

衝突まであと一日。
今日が最初で最後のチャンスだ。
もう小惑星とそのまわりの大きな岩が近くまで接近しているのが確認できる。

小惑星衝突対策チームの者も、分裂した。
レッドを疑う者と疑わない者。
どうせ小惑星の衝突は避けられない、と諦める者。

「どうせレッド様の仕掛けたものなのよ!?それをなんで私達が命懸けでやらなきゃいけないのよ!」
「もしそうだとしても私達がやらなきゃこの星は滅びるの!たとえ命懸けでも!皆を助けるんでしょ!?」
「それはそうだけど…」
　気持ちはまとまらぬまま、決戦のときを迎えた。
　惑星レッドから移動できる一番遠い所で、周りに星もない、被害がもっとも少ないところへ鏡で移動。
　これまでやったことのないかなりの距離の移動。鏡を使ってもそれはかなりの労力を要する。それを何人分も繋いだのだ。着いた時点でレッドは疲れはててい た。
　強行突破しかない…。
「ひたすら壊して細かくする!頼む!惑星レッドを守ってくれ!」
　声を振り絞って叫ぶ。チームの者は（一部頷き、）小惑星の方へ向かって行く。それに続いてレッドも後を追う。
「くっそ……力が足りん…!」
　民をまとめる力が。
　民に安心した生活を送らせられるだけの力が。

小惑星を一人で破壊するほどの力が。
精神に打ち勝つ力が。
罵声に耐える力が。
作戦を立て、指導する力が。
力が。
力が足りない。能力が足りない。
何故だ？俺には何も守れないのか？
自分のチームも、星も、民も、生活も命も何もかも？
「レッド様⁉顔色が悪いですよ⁉どうなさったのですか⁉」
チームの副リーダー、サマンサが声をかけてくる。
「何でも…ない…いいからお前達は先に行ってくれ」
「そんな！何でもありますよね⁉私、３日くらい前も見たんです！お部屋の家具がなぎ倒されて、机の上のものも全て下に落ちてて、枕の綿も舞ってて…そしてレッド様はベッドの上で膝立ちで立ち尽くしていて…」
「……見られていたのか」
「……外が騒がしくなっていましたし、その、チームもバラバラになってしまったので…これは相当疲れが来ているだろうと紅茶を淹れたので」

「そうか…それは申し訳ないことしたな…じゃあ帰ったらもう一度淹れてくれないか…？」

レッドの疲れは未だ身体を蝕んでいるが、サマンサのおかげか、少しは力が回復してきた。

レッドがゆっくりと立ち上がるところを、サマンサは嬉しそうに見つめる。

そして、笑顔で

「はいっ！喜んで！」

と答えたのだった。

ウラギリ。

小惑星は、『小』という名がつけられるかどうかも怪しいくらいに大きく、その周りの岩たちもそこそこの大きさ。直前の予想通りだった。

既にチームの皆は小惑星破壊に取りかかっている。

レッドも参戦すべく近くまで行き、続けて赤い光線を放ち、破壊していく。

「くっ…この数だと…」

チームの消耗も激しく、死者は流石に出ていないものの、皆かなりボロボロになりながらも、巨大な剣を振ったり、強化された拳で殴ったり、とそれぞれの得意武器を使って破壊を続けている。

もともとは惑星レッドの治安を守る騎士団だ。

こんな戦闘はまっぴらごめんだろうが、たとえ意思がバラバラでもこの星を守るという一心が貫かれる限り勝算はある。だが――

「なんだこいつら！めっちゃ硬いぞ！攻撃がまるで効かねえ！リーダー！応答願いますっ！」

「なんだと!?お前の拳が効かないとなれば俺が行くしかないのか…だがこっちも今手が

離せない！もうかなり深層部まで来ている！――――よし、こっちはもう片付きそうだ！ちょっと待っ――」
「うわあああああああああああああああああああ！」
「リーダー！チーム２，６，７の反応が消えました!!」
「何だと!?何だ！何が起こっている！」
　汗が額を流れていくのがわかった。
　そしてリーダーである彼は、２、６、７にはチームの中でもかなりの腕前をもつ四天王のうちの一人と、それには惜しくも及ばぬもかなり互角の勝負までもっていけるほどの人物が二人、それぞれ２、６、７で先陣をきっていたことを思い出す。
　余計に不安が積もっていく中、ピピっとインカムが鳴って、焦る女性の声が聞こえてくる。
「レッド様！リーダー！こちら指令部！聞こえますか!?」
「ああ！一体何事なんだ!?」
「…えと、小惑星に異常なエネルギー反応がみられるんです！それも、人工的な…一旦その場から離れてください！」
「了解！総員、急いで退避！鏡の中へ！」
「チッ」

舌打ちするものもいたが構わず、すぐさまレッドは大きな鏡を召喚し、少し離れた所へ皆を転移させる。

そしてレッドは再び鏡を召喚し、小惑星の近く、さっきいた場所に設置しておいた鏡に映る出来事を、こちらの鏡と通信して見れるようにした。

何だ…？

不安げに一同が鏡を見つめる。

数秒、双方に沈黙。

『ゴゴゴゴゴゴゴゴ……』

不気味な音が通信鏡からだけでなく、直接耳にも届いてくる。相当な音量、振動。

直後、目映い光に思わず目をつぶった。

―

―――

―――――

衝撃。今までに感じたことない、とてつもない衝撃と、爆発音がかなり遠くまで一時退避しているはずのレッド達をも包み込んだ。

――――――――はっ!?

「……なんだと?」

鏡には、爆発の勢いで速度の増していく隕石と、緑色の炎を纏った小惑星が映し出されていた。

緑色の炎。それが意味するのは――――。

「はは…そうか…そういうことか」

「ふは…はははははははははははっ!」

レッドは狂ったように笑った。

見事なまでに情けない自分に向かって。

またか。また同じなのか。

また俺は。また俺のせいで失敗するのか。

今まで何度失敗してきた!?ギリギリ惑星は守れてきたのに。ついにその惑星すらも守れなかったというわけか。笑える。滑稽だよ、実に、俺は。

誰にもすがるんじゃなかった。誰も頼るんじゃなかった。

「おい…レッド様笑ったぞ…!?」

「やっぱりこれを仕組んだのはレッド様――いや、レッドだったんだ!」

「ならば、レッドを倒せば隕石たちの衝突も止められるんじゃないか!?」

「そうだな」

「わが惑星のため、家族のため、少しでもかすなな望みがあるのなら俺は戦うぞ!」

「俺もだ!」

「私も!でも、隕石の方もやらなきゃだよね!そっちは私がもっと細かくするから!」

「分かった。俺達はレッドを倒す!隕石は頼んだ!――ほら、お前も行くぞ、サマンサ」

「え……?何でレッド様と戦おうとしてるの、リーダー?私、頭悪いけど、分かるよ。レッド様は悪くない!」

「何言ってるんだ、サマンサ!レッドは笑ったんだ!この状況で!それに、レッドは昔から素行が悪くて有名だっただろ!?きっと今までだって大臣やらに言われるがままだっ

たんだ！そして今回本性を表したに違いない！」
「何で決めつけるの…？レッド様は毎日心から深く傷つき、苦しんでいたのに…！知らないくせに…！――――ねぇ！レッド様!?私は、サマンサは信じています！」
サマンサが目を潤わせて叫び、レッドに答えを求めてくる。
俺は――。
俺は無力だ…。他を信じた俺が馬鹿だった。
ファルサが今さら協定を結んでくることに疑問を抱かないほうがおかしかったのだ。
もとよりかなり仲が悪かった。――というより、ファルサがこちらを良く思っていなかったのだ。卑怯な手で貿易関係を妨害したり、ファルサの挑発で戦争しそうになったことも、ファルサの命を受けたファルサの民が民に紛れ込んでレッドの民にデマを流し混乱させたときもあった。ありとあらゆることで妨害されてきたのだ。
緊急事態だからと焦っていたのか、俺は!?
緑色の炎はファルサの固有能力だ。他にあの色であれほどのエネルギーをもつ炎を操れる奴は少なくともこの宇宙の中で一人もいないだろう。
固有能力とは、そのままの意味である。
一つの星につき一人だけいる、守護者。
星の守護者は必ず一つは固有能力を持っているのだ。

固有能力と言うだけあって、全宇宙の中で同じ能力を持っている者はいない。似ているのはたまにあるが。

レッドとブルーは鏡。特に兄弟である俺達は特殊で、レッドは赤いエネルギーで戦闘に特化、ブルーは青いエネルギーで防御に特化している。

先述のように、ファルサは緑色のエネルギーで炎。

他に隣する星の守護者は、惑星アルゲオは水色のエネルギーで氷の能力、惑星ルプスは茶色のエネルギーで木々の声を聞くこと、惑星ニヒルは紫色のエネルギーで素手で触れたものを砂にする能力（一日三回のみ）、惑星クラヴィスは深緑色のエネルギーで天候操作。最初に行った惑星ドクトゥスは…何だっただろうか…思い出せそうで思い出せない…。

最近ファルサの妨害が減ってきて一安心してたが、それは恐らくこの計画の準備のためだったのだろう。

恐らく民の間に爆発的に広がっていったデマもファルサの仕業だろう。

――――ファルサの目的は何だろうか。

そう考えたときに浮かぶものは。

何故あんなに妨害してくるのか、と問い詰めたときのことだ。

「何言ってるんだい、レッド。僕は別に君が嫌いなんじゃないんだよぉ？むしろ大好きなんだよ？それはもちろん君に恋しているとか君と友達だとかじゃないよ？君の反応を見るのが大好きなんだよぉ？最高だよ？実に、君が苦しんでもがいて、あげく何も救えなかったときの失望した君がね？」

狂ってる。奴は狂っている。

人が苦しむことを、壊れていくことを、そして――死ぬことを楽しんで傍観しているのだ。

それに奴は頭がよくきれるので何度も策略にはまってきたし、自身が負傷することを怖がらないところも恐ろしい点の大きなひとつと言える。

ただただ自分が楽しむことしか考えてない。

あと、気になることがもうひとつ。

――今になるまで記憶がぼやけていたことだ。

ファルサに会うといつも心の底から溢れんばかりの怒りがこみ上げていた。ましてや、いくら星が危ない事態になったとしてもファルサにだけは助けを求めたりはしないと思っていた。もちろん会おうともするわけがない。

いくら俺が馬鹿だとしてもおかしいのだ。

ファルサにそんな力は無いはず――しかし、そう言えば。

一番最初に頼みに行った星の守護者の固有能力は、

記憶消去であることを思い出した。

ただ、脳は記憶をいろいろな他の記憶に関連させて覚えていくため、曖昧にする程度しかできないらしい。

勿論、これも今思い出したことだ。

さっき出かかっていた記憶をやっと思い出せた。

ということは、他の星もグルか。

まぁ恐らく、ファルサが脅迫したのだろう。

みな、あいつが、あいつの星の奴らが好戦的なことは知っている。そして、とてつもなく強いことも。

自分の星を守るため、そうせざるを得なかったと。

言い換えれば、自分達の星のために消えろと。

そういうことなのだ。

誰かに頼るというのはそういうことなのだ。

相手が善意で協力してくれる訳がない。

仲間など必要ない。どれだけ愛してもどれだけ時間をかけて築いたものも全て、壊れ、壊される。

絆も希望も愛もいらぬ。傷つくだけの曖昧なものは全て消してしまえ。自分の欲しいもの以外を見るな。自分のもの以外を見たらもう、それすらも手放しかねないのだから。

何としてでも小惑星を壊す。粉々に打ち砕いてファルサの笑い声を無くしてやる。惑星レッドを守り、ファルサの意外そうな顔をおがんでやる。

改めてそう誓ったのだった。

サヨナラ。

「あぁ…俺は何もしていないさ…なぜわざわざ守護者たる俺がこの星を破壊しようとすると思うものか。そして、今は言い合っている余裕など無い！隕石たちを全力で破壊するまでだ！文句がある奴はこれが片付いたらいくらでも相手してやる！」

レッドは言い合っているサマンサ達に向かって言う。

「レッド！だから、お前と言い合いたい訳じゃないんだ！お前が原因の可能性があるから――――」

「――リーダー。まず隕石、壊さないと、もともこもないですよね？」

「サマンサ……何故お前はこいつの肩をもつ！」

「尊敬してるからよ！信じてるからよ！

ねぇ、リーダー！急がないと！今も星の速度は上がってるの!!」

「わかったよ…総員！とりあえず隕石を片付ける！」

「「「「「了解！」」」」」

鏡を通り、次々とさっきの隕石に向かっていく。

とりあえずは、といったところかと少し安堵したのもつかの間、インカムから焦る

チームの声が聞こえてくる。
「とは言ったものの、やはりこいつら硬いですよ、リーダー！しかも、暑くて移動速度が速い！このままでは…」
「うろたえるな！我らの故郷を守るためだ！何としてでも隕石どもを破壊する！だが、我々も当然、必ず生きて帰る！」
　リーダーは叫び、自身も再出撃していく。レッドとサマンサも顔を見合せ、頷き合い、大きめの隕石のもとへ。
　リーダーは両手斧で隕石を細かく分断し、サマンサは小柄な体型に見合わぬ巨大ハンマーを軽々と振り回して粉々に打ち砕き、レッドは赤いエネルギーで生成したビームや鋭利な刃物を一斉に放ち破壊していく。
　かなり戦況は良くなったかに見えた。誰もが達成感を感じていただろう。ただ、ファルサ達を除いて。
「レッド様！危ないっ!!」
「!?待て、サマンサ！何を…」
　――もし今、何故こんなことをしたのかと彼らに問うならば、
「だって、つまんないじゃん？友情とか見せられても吐き気がするからね？ほら、よく言

うじゃんか？創るより壊すのは簡単なんだよぉ？君たちが汗水たらして創り上げてきたものを一気にぶっ壊すんだよっ？最高じゃない？」

と笑顔で言うだろうさ。

「私は、レッド様を信じています！」

サマンサは笑顔でそう言った。

レッドをハンマーで加減しつつも横から吹き飛ばして。

そして彼女は、

目の前で、消えた。

「――――サマンサァァァァァァァァ!!!!」

気付けばレッドは泣き叫びながら、エターナルゲージを発動させていた。星の人々

も、防衛チームの人々も鏡に閉じこめた。宇宙でレッドは独り、惑星レッドが破壊されていく様をただ呆然と見つめるしか出来なかった。

緑色の炎に包まれた彗星のごとき速さの隕石が、

惑星レッドに衝突した。

それは、長い長い出来事。
追い打ちをかけるように次々に隕石が惑星に降り注ぐ。
レッドは立ち尽くして、見た。
焼かれていく星を。
消えていく命を。
灰となる自然を。
倒壊する文明を。
そしてついさっき、消滅するサマンサを、見た。
自分が背後の微かな気配に気付いていれば。
隕石がこれ一つだけだと思っておなければ。

小惑星が、しかも様々な大きさの隕石までもがかたまって移動してきていることを少しでも怪しみ、警戒していれば、もしかしたら、サマンサはしななかったかもしれない。
サマンサは。
ハンマーを扱える勤勉で優秀なあの小惑星は。
あの、笑顔を浮かべて信じてると言った少女は、
レッドを庇い緑色の隕石に衝突し、消滅した――死んだ。
もう、終わりだ…。
星も、信じる気持ちも、民も、希望も、夢も、自然も、関係も全て。
火の海。忌々しき緑色の炎と本来の赤い炎がうずめいている。
何日か経ち。
いくつもの隕石は大きなクレーターを作りながら全てを壊していく。
放心状態のレッドはふらつきながら惑星レッドに降り立ち、周りをみる。とりあえずそこに、集めてきた全ての鏡に閉じこめた人々を置く。
ここはかつて、一番の都市だったところだ。いつも人々で溢れかえり、お祭りのごとき賑わいをみせていた。それが今は、緑色の炎が微かに残り、煙がたちこめているただの荒れ地とクレーター。
次に、宮殿へ。そこは、数本の柱が立っているのみで、他にはもう残っていなかった。

奇妙な化物以外は。
赤いエネルギーを纏い、黒いサングラスをかけた『サイアーク!』と時々うめき声をあげる化物。
ああ、これか、と思った。ふ
自分の力は知っていたが、そういえば使ったことのない技だったな、と振り替える。
エターナルゲージ。永遠の檻、という意味だったきか。
人々の負の感情を鏡に写しとって実体化させた化物、サイアークを生み出す。
その檻の特徴は四つ。
一つ目は、鏡でその人物の負の感情を写し出し、サイアークにすること。
二つ目は、心に蓋をして閉じ込めておくこと。
三つ目は、その檻は外部からの鏡への直接攻撃によって傷ひとつつかないこと。
四つ目は、エターナルゲージから解放するにはサイアークの浄化が必要なこと。最悪な気持ちを浄化すること。
この星の人々やチームの人々の最悪なことは、隕石のこととレッドのことだということは予想がつく。つまり、レッドには浄化は不可能。もしも原因が違う者がいるとしても、荒野となり全てが消えてしまったこの星に望めるものなどもう無いので、不可能。
「すまないな…民よ」

とっさの判断で惑星レッドの人々を全てエターナルゲージで閉じこめたのは、命を守れたという点では良かったと言えるだろう。だが、レッドには浄化が出来ないため、ずっと負の感情を発散させるべくサイアークはこの星を徘徊し続けるだろう。まぁ、この星の状況を見せるよりはいいかもな、と思いながら、レッドは砂埃の舞う荒れ地に寝転がり空を見上げる。――と。

「なんだ、あの星は……！」

澄んだ青が緑や茶色の大地を包んでいる、命に溢れた星がすぐ近くに。あれは、確かブルーの星…民には地球と呼ばれているのだったか…。

美しい星だ…そして、憎い星だ…。

人々は笑顔に溢れて生活している。幸せそうに毎日を過ごす。だが、正しき者ほど傷ついていく理不尽さは何処の星も同じようだ。人々は疑い、憎み、騙しあう。

愛は幻のように儚く散る。

幸せはたった一瞬のことだが、不幸は長く続く。

――深く深く、沈んでゆく。

独り静かに落ちていく。
なにも聞こえない。
見えるのは、目線の先に僅かに輝く光だけ。
それを覆っていく赤く黒い影のもや。
レッドを柔らかく包んでいく。
《もう、苦しむ必要はないよ》
《もう、悩まなくてもいいよ》
本当、か？
《君には闇がお似合いなんだ》
闇？
《そうだよ。何色にも染まらない、深い深い闇さ》
《さぁ、壊そうよ。大切な人を失う前に》
壊、す…。
《大切な人が悲しむ前に》
奥底から聞こえてきて。
そして、

――なにかが溢れ。

――なにかが、きえた。

「――幸せは一瞬、愛は幻」

「俺が、全て壊す。誰かが悲しむ前に全て無かったことにする…」

☆☆☆

――っ。

「おい、起きろ」

誠司は、ソファの背もたれで瞼を閉じているレッドに声をかける。

「――あ？」

「どーして寝てたんだよ?」
「あぁ、そうか。終わったのか。別に寝てた訳ではない。記憶を写す鏡を使うとその記憶の持ち主は気を失うんだよ…」
「ふーん…」

先程まで誠司は『レッドの記憶を写した鏡』の中にいた。
レッドの記憶を、全て疑似体験した。
思考がテレパシーのように流れ込んできた。
レッドの言動を、誠司は横からただ眺めた。
眺めることしか出来なかった。
その鏡の空間の中では、誠司自身が何かを考えることも感じることも、話すことはおろか身体を動かすことも出来なかった。
鏡から出され、部屋に戻ってきたとき、恐ろしかった。
怖かった。寒かった。
この男はこれほどのことを体験し、経験したのだと。
そしてここに、この地球に来たのだと。
行動理念は『悲しむ前に全て無かったことにする』。

愛という幻に惑わされて打ち砕かれるくらいならばもとより愛などいらない、と。
対して誠司は『めぐみを悲しませるものは消す。めぐみが幸せになる世界をつくり、出来れば一緒にいたい』という願い。

だが、目的は世界の破滅。
ブルーの破滅。
そこは一致している。
「まぁ、なんだ、その…お前も…大変、だったんだな…」
「……何がいいたい？」
「何がも何も、ただ俺は辛いんだろうなーって思っただけだ。そうだ、地球ぶち壊したらファルサ倒しにいくか」
「貴様、俺に同情でもしたのか？」
「するさ。俺だって…何も出来なかった。お前ほどのスケールじゃないけどな。それに、そいつがめぐみを襲ってくるかもしれないだろ!?」
「そういうことにしておいてやるよ」
レッドがへっ、と笑んで言う。
「はっ!?何言ってんだ―」

誠司は目を丸くして赤い顔でレッドの言葉に食いつく。
「――誠司、小娘を鏡の中へ運ぶぞ、手伝え」
「分かったよ…」
言葉を遮られた上に命令までされたが、不思議と嫌な気分にはならなかった。
そして、レッドが自分を名前で呼んだことに少しだけ嬉しさを感じたのだった。

それぞれの想い。

ガチャ。
ただいま、と小声で呟き、玄関の鍵をしめた。
時刻は深夜午前一時半くらい。
当然ながら、部屋は暗い。ベランダから入る月明かりがリビングを薄く照らしているくらい。静かで、勿論誰も起きている筈がない。
冷蔵庫から缶ビールを取り出し、忍び足でソファに腰かける。
「ふぅ」
ぼーっとしながらおもむろにカレンダーを見つめて、明日はクリスマスイブかぁ、なんて考えたりする。
子供達のプレゼントはどうしようかな…。
二人とも自慢のいい子達だが、いい子過ぎるところがちょっぴり寂しく感じたりもする。
もっと甘えてもいいのに、なんてね。
とはいえ、もともと不定期な帰宅でなかなか会えないので仕方ないのかも。

そういえば最近会えてないけど、かおりは大丈夫かなぁ。いつもお世話になっちゃってごめんなさいね、と心の中で感謝。

いつも通り。

いつも通りの日課。ビールを飲みながら考え事をして、家族の顔を眺めてから、寝る。

今日もそのつもりだったが、二十分ほど経った頃、予想外のことが起こった。

静まり返っていた空間に、小刻みな呼吸音が響く。

それと、ゆっくりとした足音も聞こえる。

ドアノブを掴んだ音が聞こえたので、何となく物陰に隠れて、様子を伺う。

――怖い。

ふと、感じた。

張りつめた空気と呼吸音の緊張感が自分の身体を縛り、その場から動けない。

泥棒かと思ったが、部屋から出てきたのは誠司だった。

ひろ子はほっと胸を撫で下ろすも、ならば何故私は息子に恐怖を抱いてしまったのかが分からなかった。

やがて、誠司はダイニングのテーブルに何かを置いて立ち去り――――玄関から出ていった。

僅かに見えた誠司の横顔は、普段あまり見せない強い目で、何かを追うような、必死

な顔だった。
こんな顔見たことあっただろうか。
知らない間に変わってしまったのか…？
訳がわからない。
状況を確認しようと、恐る恐るダイニングのテーブルに近づく。そこには、誠司の字で書かれたメモが置いてあった。丁寧な字で書かれたメモ――否、書き置き。
別れを告げる、手紙。読んでみると、ただの家出ではないらしい。よっぽどの覚悟があったのだろうな、と立派に成長した息子の姿に―決して家出が嬉しいのではない―喜びを感じる。

「どういうことよ…!?」

メリークリスマス
いままで育ててくれてありがとう
具体的に言おうとすると難しいかも
感謝してるのは本当だけど

みらいのまおが見てみたかったなぁ
それと、ごめんなさい
ガキのまま全然せいちょうしてないな…
これからやることは
すべてを壊すことです
でも俺は大切なひとを大切にしたいので
傷ついてほしくないその人のために
自分の信念を貫ぬこうと思います
ダメダメだな…最後まで心配かけて…
さようなら
どうかおげんきで
最後のメッセージが青春の報告になるなんて
思ってもなかったよ…

最後まで間抜けな誠司より

さようなら？
どうかおげんきで？

分からない。分からないことばっかだ…。
それに、青春の報告なんてどこにも書いてないじゃないか。
玄関出るとき止めておけばよかったのかも、と一瞬よぎったが、誠司のあの顔を見たらやっぱり止めなくて良かったと思ってしまう。全てを壊す、とか物騒なこと書いてあるけれど、それはどういう意味なのだろうか。
犯罪を犯すとしたらやっぱり止めるべきだったけど…私は息子を信じている。
正しいと思ったことしかしない優しい子だと信じている。
誠司が犯罪を犯すとしたら何かを守るときだということを信じている。
めぐみちゃんのことになるといつもと違う表情になることも知っている。
ん、めぐみちゃん…？
もしかして…。
ひろ子は数枚の紙とペンを机に置いた。
☆☆☆
誠司は、自身の上着をかけためぐみをお姫様抱っこして、レッドの鏡の中へ。
「…なんだここ」
「小娘の部屋を再現した疑似空間だ。部屋だけだからそれより先にはいけない」
「すげぇ…。——そういえば、作った空間って鏡と鏡の間の異空間何だろう？入口と出

口が一つずつ必ずいるんじゃなかったか？」
「ああ。だが大きさは変えられるからな、俺達が出たらすぐに人も通れないほどの小さい鏡にする」
「なるほどな」
ベッドにめぐみを寝かせて布団を被せ、鏡から出る。
ここまで再現できるんだ…。
だが、俺達に感動している暇は無い、とぶんぶん頭を振り、レッドは先程まで座っていた椅子に、誠司はソファに座る。
「…ふぅ……」
レッドが大きな息を吐き、先程まで座っていた、小さな背もたれつき木製椅子に座る。
ソファの方が楽な気がするが、先にレッドが小さな椅子に座ったのだからそんなに気にする必要もないか、とか呑気なことを考えてみる。
「――さて、これから誠司はどうするつもりだ？」
少しの間流れていた静かな空気をレッドが遮る。
「正直言うと、まだ決まっていないんだ…。先のことなんて考えずに来ちゃったからな…」
「まぁ、そうだろうな」

「それで、質問なんだが、今、世界のプリキュアはどうなっているんだ？」
「赤いサイアークと戦っているはずだ。世界中に送り込んでいる」
「赤いサイアーク？」
「普通のサイアークと違い、元になる人間はいない。それに、戦闘力も今までの何倍にも値する」
「さすがラスボスだな。なら、世界のプリキュアが応援に来ることは…いや、一部は来るかもしれないな…」
「世界中のプリキュア全員倒すと言い出す訳ないよな？」
「流石にそこまではしないが…どうにかしないとな。そもそも地球上に一体何人いるんだ…？」
「さあな」
不特定多数の人数か…。
どこか、一つの場所に集めてからエターナルゲージを使えればいいのだが。
サイアークを出現させればいいのか。大量、あるいは強力な。
だが一つの場所だけだと恐らく怪しまれるだろう。日にちを置いてからだとしたら、最初のやつらと連絡が取れない時点で分かるし、鏡でブルーも発見するかもしれないし…。

どうすれば効率よく…？

「おい、誠司。こっちも気になっていたことがある」

「？何だ？今ちょっと考えて――――」

「――何故ブルーを殺さなかった？」

「何言ってんだ？俺はあいつを斬った！死んでないのか？」

「無自覚か？心臓の位置よりかなりズレてたぞ。いくら血が出たとしても、回復はするだろうな。殺す覚悟でなければ無理だろうさ」

「……殺す…か」

倒す、壊す、ではなく、殺す。

命を消す、ということ。人を死なせるということ。

レッドや世界中の人達に比べれば、平和で平凡な日々を送ってきた俺には全く関わりがないようなこと。

それを今、やろうとしているのだ。

自分に、人が殺せるだろうか。ただの中学生が。

「まだ迷いがあるようだな。どうせ世界中のプリキュアのことがある。考えるのはそれからでもいいが、なるべく早く決着をつけといたほうがいいぞ」

「――――ああ」

まだ、決意が曖昧だったっていうのか？
また俺は直前になって怖じけずくのかよ？
もうそんなのは嫌だ、だけど…。
誠司ば膝の上で拳を握りしめた。
☆☆☆
「めぐみが…っ！めぐみがぁぁっ!!誠司いい！」
ひめがぽろぽろと涙を流し、服の袖で拭い続ける。
赤くなった目はとても痛々しく、震える声もまたこの場の雰囲気を一段と暗くさせる。
そんな中、ゆうこは責任感というか、使命感のようなものを感じていた。
ゆうこは、幼い頃から誠司とめぐみを常に見守ってきた。物心ついたときには既に、めぐみに対する誠司の想いには気付いていた。
応援しつつ、なかなか進展しない二人にむずがゆい感覚を覚えたりしていた。
めぐみが早く誠司の気持ちに気付いてほしいと願っていた。本人は隠そうとしていたが。
そして、めぐみは誠司の気持ちに気づくことなく、ブルーに恋をしてしまった。
親友の恋を応援してあげたい気持ちもあったけれど、やっぱり誠司とめぐみが結ばれ

てほしかった。
誠司はいつもめぐみのことを考えていた。
めぐみは誠司のことを兄弟みたいなものだと思ったままだと知っていても、好意を向けられているのがブルーであると分かってしまっても、誠司は変わらず、めぐみを支え続けていた。
決してめぐみと自分が結ばれることだけを望まず、めぐみの幸せだけを望んだ。

本当に優しいのだ。

――――自分以外に。
だから、溜め込み過ぎてしまったのだろう。
誰にも打ち明けられず。守るはずだっためぐみに守られてしまって。
ブルーへの怒りもつもって。
ガスが溜まって、レッドによって火がついてしまった。
今まで誠司のことを見てきたのだから、同情だってしたくなる気持ちもある。だけ

ど。
負の感情は自身を破滅に導いてしまう。
気づいたときには手遅れになってしまうかもしれない。
なんとかして説得しなければ。
めぐみと誠司は正面から自分達の気持ちを語り合うべきなのだ。
私がこの空気を打開してみんなを引っ張っていかなきゃ！
「――私達で絶対、めぐみちゃんを助けよう!!」
「そう、ね、ゆうこ。相楽くんのことも何とかしなきゃだけど、まずはめぐみを取り返さないとね！」
いおなも同意して俯いていた顔をあげる。
「僕も何か手伝っ――うぐっ」
ソファに寝かせられているブルーが起き上がろうとするも、慌ててミラージュに止められる。
上半身に巻かれた包帯は赤く染まっており、微量だが未だに出血している。
「ブルーは無理せずに安静にしてなきゃだめよ！――皆さん、私も出来るだけ力を貸すわ」
「ありがとうございます、ミラージュさん」

「無理だよ…だって誠司たち何処にいるのか分かんないもん！」
「僕、の、鏡で…まずは回復しないと…取り敢えず、今日一日あれば…っ…。君たちはもう帰った方がいい…ご家族も心配されているだ、ろうし…」
「分かりました…。では、お大事に…ほら、ひめちゃんもいおなちゃんも行こう？」
「え？私の家ここだけど…？」
「準備して？学校、行かなきゃ」
「ゆうこ…今日、どうしても行かなきゃ駄目…？」
「強制はしない。でも私はめぐみちゃんと相楽くんが帰ってきたときのためにも学校に行っておきたいな」
「ゆうこ…私も行くわ。ひめは？」
「そうだね……！行く！」
　三人は学校に向かう。
　道中の人々の笑い声が三人の胸を苦しませた。

それぞれの意味。

キーンコーンカーンコーン

今日も、学校が始まる。

誠司とめぐみを置き去りに、チャイムが時間を無慈悲に告げる。

「「起立気をつけ、お願いします」」

いつもと同じ。みんな、いつも通り。

ひめ達にとってそれは、非常に辛いものがあった。

勿論他言する訳にもいかないので、めぐみと誠司が何故休んでいるのかと問われても、分かんないよとしか言えなかった。

二人のいない教室というのは、色が無くて白黒だ。

楽しくない。あんなにいつも楽しく学校に通っていたのに。何でだろう。あ、また。

――最近、疑問ばかりが浮かぶようになっている気がする。だって、分からないことだらけだ。

何で誠司は私達と戦おうとするのか。

何で誠司は地球や世界を壊そうとしているのか。

何でブルーを殺そうとするほどになってしまったのか。
めぐみを連れ去って何をする気なのか。
めぐみと誠司とレッドは何処にいるのか。
誠司のあの力は何なのか。
本当に洗脳じゃないのか。
予想くらいはあるが、本当のところはどうなのか分からない。
やっぱり、私がアクシアの箱を開けなければ良かったのかなと思う。
もしも私が箱を開けなければ、世界が幻影帝国に侵略されることもなかった。
プリキュアも、そして勿論いおなの姉のような、ファントムにハントされた世界のプリキュア達もいなかった。
めぐみがプリキュアになってなければ誠司は傍観者になってしまうこともなかった。
こんなに辛くなかったはずなのだ。
ブルーが斬られることも、誠司が誰かを殺そうとするほどに絶望することもなかったはずなのだ。
確かに、私は箱から助けて、と叫ぶ声を聞いて開けてしまった。中に封印されていたのがそんな悪者達だったなんて知らなかった。だけど、そんなの屁理屈に過ぎない。
話を聞く限り、根本はブルーとミラージュの失恋、隕石衝突による惑星レッドの破滅

からの妬み。
私に原因の一つがあるのだから、私が責任を取るべきだと思うけど、どうすればいいのか分かんないよ…。
「…し…き？」
皆は、助けてと言われたから助けたんだからひめが優しいだけだよ、と言ってくれるけど…私はやっぱりそれでは納得出来ない。めぐみと出会いたてのときはそう思うことにして逃げていたけど、もう逃げたくないから。
とはいっても、私は誠司を倒して、止めるくらいしか考えが思いつかない。んー。
「……白雪？」
「ひ、ひゃいっっ!?」
いつの間にか先生に当てられていたようだった。
考えていて全然気づかなかったが。
「ぼーっとするな。珍しい。今日は愛乃も相楽も休みでこっちは驚きで参ってるんだよ…。さ、早く答えろー、一次関数の基本式は？」
「えっと…ｙ＝ａｘで……あ、＋ｂです」
「白雪、一発じゃないとは珍しいな。どーしちまったんだ？クリスマスイブで浮かれてるのか？確かに本当なら冬休みだったがな！まさか学級閉鎖のせいで延期とはな！残

念だったな！んじゃ、次、椎名！Xが2、yが4のとき…」
あー、そういえば今日はクリスマスイブだっけ。
きっといつもだったらもっと楽しい一日だったろうな…。白馬の王子様とクリスマスデート！とか言って騒いだりして。そんなことを考えている余裕はないけど。
溜息。
いっつも私、ダメダメだ…。めぐみだったら、ゆうこだったら、いおなだったら、どうしてたのかな。
もし私が誠司の立場になってたら誠司はどうしたのかな。
皆みたいに出来たら。もし私が、
めぐみみたいに、明るくて、自分のことなんてかえりみないほどに誰かのためにいつも何かしてて、周りを引っ張っていってくれるような人だったら。
ゆうこみたいに、いつも皆を見守って、優しく包んでくれるような人だったら。
いおなみたいに、強くて、冷静に周りを見て判断できるような本当に賢い人だったら。
誠司みたいに、他の人の思いを汲み取って、アドバイスしたり励ましてくれて、自分の気持ちを押さえてでも他人を思いやれるような人だったら。
もっと状況は良くなってたのかな…。
あー！もう！分かんないよー!!

こんな自分、だいっ嫌いだ。

少し開いた窓から、そよ風がひめの頬を撫でた。

『ひめは凄いね』

『ええっ!?どこが…!?』

『だって、何回倒されちゃっても諦めずにサイアークと戦ってるもん！凄いし偉いよっ！』

まだ出会って間もない頃、めぐみに言われた言葉だった気がする。あの日もこんなそよ風が吹いてたっけ。

すごごごーく嬉しかった言葉だ！

『ひめちゃんはひめちゃんらしくいればいいのよ？みんな違うのは当たり前。いい意味でも、悪い意味でも。自分の苦手なところを自覚してるひめちゃんなら、きっと乗り越えてもっと良くなれると思うの』

『他人みたいになりたいって、それだけ他の人のことを見れてるってことでしょ？とっても良いことよ？それに、私はお姉ちゃんのことがあってひめのこと、恨んでた…。でも、ひめは悪くないわ。事実、幻影帝国は復活しちゃったけれど、助けてって悲鳴が聞こえたから助けた、それだけのことなのよね？優しいのよ、ひめは。それに、ひめの元気なままでいてほしいわ』

ゆうこと、いおなに励まされたときの言葉！
いつの間にか消えかかっていた言葉。
そうだよね…。
前を向け、私！誠司を止めるんだ！
悪口を言う人は、悪口が自分に帰ってくるように。
誰かを傷つければ自分も罪悪感で傷つくことになるように。
悲しいことを考えていたら、それこそ最悪な気分になるだけだ。
復讐は悲しみしかうまない。
自分で自分を傷つけてしまわないように。
手遅れになる前に。
誠司を止める！誠司を、受け止めるんだ！

☆☆☆

誠司は埃まるけの仮拠点を後にし、ぴかりが丘の図書館に来ていた。あんな埃じゃ考えれるものも考えられない。万が一知り合いがいてバレルことがないように、深くフードをかぶって。帰りにお掃除グッズでも買っとくかな、とか思いながら、格闘術や世界の歴史、戦略系の小説を読み漁る。

今頃学校行ってるかなー、あいつら。
ブルーが生きてるなら、多分あいつも流石に家に返すだろうし。めぐみもまだ寝てるはず。
まさかクリスマスに学校があるなんてうちの中学くらいなので、他の学生や大人達が結構いて割と混んでいる。
多くの人が集まっているのに、館内にはずっと静寂が続き、ゆっくりとした時間を過ごすことができる。
参考に、と読んでいた戦略系の小説は、なかなか真似出来ない気がしたが面白かった…。
世界の歴史も、中学校で習ったことなんてこんな僅かな切れ端のところだけだったのか、と驚くほどに歴史は奥が深かった。そして、残酷で冷酷だった。
知れば知るほど人間には溜息がでるもんだな…。
愚か者しかいねぇのかよ。勿論、俺も含めて。
優しさはときに無慈悲に牙を向き、仲間は裏切る。
信じていたやつが、嘘をつく。
こちらがどれだけ相手を想っても、相手はこっちには見向きもせずに、他の人に『ありがとう』と感謝をする。

優しくて良い子だと思っていたやつが陰口を言い、悪い噂を広め、噂が一人歩きする。
守ろうとしても、つかもうとしても、するするとほどけてしまう。
今も昔も変わらない。
こんな連鎖を終わらせる。
めぐみにこんな汚い世界にいてほしくない。
傷ついてほしくない。
未だに自分に人を殺す覚悟があるのかは定かではないけれど…。
――さ、考えはまとまった。
作戦もある程度形になったし、百均にでも寄って帰ろうかな。
誠司の背中を夕陽が照らす。真冬とは思えないほどポカポカと暖かい光が、誠司に色濃く影をつくらせる。
☆☆☆
「プリキュアがいる学校ってここであってるの？」
本当にい？と青年が笑いながら少女に問う。
至って普通の、極平凡な学校。こんなとこに伝説の戦士がいるって？はは、そんな一般人かよ。
「あってるよー!!私の情報収集能力は凄いんだかんね!!えっと、確か情報によるとそろ

そろ…ほら来た！」

少女はふふん、と澄まし顔で三人組の少女の方を見やる。

「あれが？んじゃ作戦間違えないでよ？君、うっかりとかまじで勘弁してよね？」

「大丈夫だって！」

一瞬で制服に着替えて少女達に声をかける。

「あの、すみません、行きたいところがあるんですけど、ここって来たことないからあんまり分かんなくて…テレビで見ただけだから何ていう名前なのかすら…」

「それで！色んな人に聞いて回ってたんですけど！複雑な地形だから口で説明されても分かんなくて！教えて、くれませんか!?」

「うーん。どうしよう。今日って多分大使館集まるよね？」

青い髪の少女が心配げに後の二人に小声で言う。

対して紫の髪の子が、

「街で困ってる人を見かけたら助ける！きっとめぐみならそうするわ。きっとブルー様も許してくれるわよ」

と微笑み返し、茶髪の少女が、

「そうだね、私少し遅れるって連絡するねー。それに私、弁当配達でぴかりが丘の道は大体分かるからそんなに長くはならないはずだと思うよ？」

と言ってくる。
良かった良かった。計画通り。
「そうだね…。じゃあ私達が案内しまーす!!」
「ありがとうございますー」
「よろしくですよぉ!!」
少年と少女は笑顔でお礼をする。
この二人が後に、――もしくは前に、関わる重要な人物だということは、まだこの三人は知らない。

君が望むなら。

「よし…やるか」
誠司は上着を脱ぎ、着ている長袖トレーナーの袖をまくる。そこへレッドがやって来て、
「おぉ、帰ってきたか……って、おい、何やってる!?」
と驚きの声を漏らした。
何故なら――――誠司がせっせと掃除を始めたからだ。
「?何、もなにも、掃除だ」
「いや…それは見れば分かるが、掃除する必要はあるのか!?」
「いつまでここにいるか分かんないしな…それにこのままじゃここで夜も過ごせない気がするし。てか気になるんだよ…片付けたくてうずうずする」
「はぁ、勝手にしろ…」
誠司の主夫感にレッドは呆れて溜息をつく。
既に磨かれた小さなテーブルにはいくつかレジ袋が置いてあり、見ると、そこそこの量の食材が氷と共に詰め込まれていて、しかもご丁寧なことにガスや電気を使わずに食

べれるものばかりが。非常食とか缶詰とか。
ちょっと経って、
「あ、やべ、あれ買い忘れた…ちょっとまた買い出しに行ってくる」
と言い残して誠司は再び出ていってしまった。
「はぁ…」
こんな奴がまさか数時間前まで憎しみを叫んでブルーを斬ったとは思えん…。
ふと、レッドは少し外の空気でも吸うか、と思い河川敷へ。誰にも見付からないように術を施して。
緑の広がる河川敷と、ゆっくりと流れている澄んだ川や、狭くも広くもない道路の脇には街路樹と歩道を見つめ、街の楽しげな人々の生活音を聴き、改めて思う。
――――惑星レッドとは大違いだ、と。
幸せは一瞬。愛は幻。
どうせ幸せなんてほんの僅かなものだ。
誰かを傷つけずに幸せになんてなれない。誰かが幸せなとき、そのせいで他の誰かが幸せになっていないということに気づいていない、愚か者どもめ。
どれだけ誰かを愛しても同等の愛が還ってくる保証もないのに、何故誰かを愛す？理解不能だ。

少年が少女をどれだけ好きでも、少女は決して振り向かないように。
ある女性が幸せになった代わりに、少女の幸せが犠牲になり、その少女の幸せが奪われたことによって少年の気持ちが犠牲になった。
女性の幸せのために動いた妖精によって世界中のプリキュアが多くの時間を奪われた。
幻影帝国の幸せは、世界の不幸。
世界の幸せは、幻影帝国にとっての不幸。
――――世界の幸せは、プリキュアの幸せ？それは同等か？
人々はプリキュアという存在がどんなものかを本当は知らない。ただの中学生だということも、普通の女の子だということも、そのためにどれだけ自分を犠牲にしているのかも。
プリキュアはなかなか幸せにはなれない。
あの鈍感なブルーは気づいていないだろうが、永遠のループだ。
ミラージュとブルーのときも、キュアラブリーのときも、他の世界中のプリキュア達だって、みんなが本当の幸せにはなれていない。
その僅かな不幸が積もっていっていることも気づいていない。
いっそのこと全て不幸に塗り替えてしまえばいいのだ。

世界をめちゃくちゃに壊してやればいい。
誰かが悲しむ前に、消す。もう誰も失わないように。
作戦なんて立派なものは考えてないが。
まぁ恐らくは世界中のプリキュアの動きを封じてからブルーのところへ再出撃という形になるだろう。
「ディープミラー…っ！」
突如、レッドの背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。
プリキュアの姿で、こちらを見つめている。
「何故お前がいる…!?」
「私は……ここでけじめをつける！」
☆☆☆
「えー？あんなボロいとこ？あんなとこテレビで紹介してたの？」
「てかゆうこよく分かったわね…」
「うん。ここらへんは常連さんがいるからねー、通るたびに空き家の数多いなって思ってたから、ここかなって。合ってたみたいでよかった」
「本当、ありがとうございます。実はここ、昔知り合いが住んでたのでちょっと様子を見に。テレビで紹介っていうか、正しくは映りこんでただけなんです。それで、なんか気

になっちゃって…」
「なんか、騙しちゃったみたいでごめんなさい！でもね、お兄ちゃんとここにこれて良かったですよぉ！感謝感謝です！」
「あと、急いでるところ重ねて申し訳ないのですが、一緒にこの建物に入ってくれませんか？最近世界中で化物がいるみたいで二人だと怖くて…あと、帰り道も途中まで分かんなくて…」
「行こーよ！危ないもんね！幻影帝国はいなくなったけど、もしものことがあったりしたら！」
　ひめが二人に聞こえないように小声で言う。
「それもそうね。帰り道も案内するなら待ってるよりは一緒に入った方が」
「同じく。乗り掛かった船だもの最後までついていくわ」
「それは良かった。では」
　ボロボロの木造ドアを開ける。ギギギギ…という不気味な音に三人は身体を震わせた。
「良かった。埃は凄いけど泥棒とかには荒らされてなさそうで。じゃあ次行きましょうか」
　特に何か怪しいところはなかったので早くも一行は三階へ。

「あれ、なんかこの階だけ少し綺麗じゃない？泥棒さんが綺麗にしてくれたのかな、すごごーい！」
「そんな訳ないでしょ…？でもなんでかしら」
「何か気になるからハニーキャンディでも舐めながら調べてみよう。はい、みんなどうぞ～」
ゆうこが四人に飴を配り、それぞれが部屋を調べる。
――ピコンピコン♪
「あ、ちょっと電話出てくるね～」
二つ鏡を召喚し、電話の方も写す。
♪♪♪
階段の方に駆けていき、ブルーからの電話に出る。
『今どこにいるんだい？僕はもう大分回復できたから、これから鏡を使ってめぐみと誠司くんたちを追うつもりなんだけど…まだそっちは時間かかりそうかい？』
「もう三階ですし、あと数分くらいだと思います。今、えっと、川の近くの廃屋？みたいなところにいるけど、分かるかな…？」
『大丈夫。確認できたよ。あの二人を案内してるんだね。でも気をつけて。嫌な気配を感じるんだ…』

「嫌な気配?」
『ああ。……とりあえずその廃屋にいないかじっくり探してみるよ』
「了解です!そちらもお気をつけて」
プー、プー、プー。
通話は終了し、お待たせと言いながら再び部屋に戻った。
♪♪♪
「甘くておいしー!!この飴!」
電話をしている頃、少女が飴を舐めて感動していた。
「でしょでしょー!?ゆうこの作る飴は世界一美味しいのよっ!」
「世界一かぁ…凄いねっ!でも世界一で納得できるよぉっ!だってこんなに美味しいもん!」
「ふふん!もっと褒めてもいいのよ?」
「なんかね、すっごくスッキリした甘さでね…」
「こーら、二人とも!?なんかひめが二人いるみたいだわ…。褒め合うのもいいけど、今は、何でこんなにこの部屋だけ綺麗なのか原因を探るんでしょ?」
「「はーい」」

「お待たせ」
「ゆうこ、なんて言ってた？」
「ん、ブルーさんが今何処にいるのか聞いてきたのと、ここにめぐみちゃんがいないか調べてみるって。あと、嫌な予感がするから気をつけて、だって」
「そう…」
　ピコンピコン♪
「あら、まただわ」
「そんな頻繁に電話してくるなんて、やっぱり何かあったのかしら…」
　再び階段の隅で電話をしだすのを見つめて、いおなが呟く。
　――その、ほんの数秒後。
「おや？こんなところに鏡が…。しかもとても綺麗です。あれ、なんか、感触が硬くないです…」
　少年が小さな鏡を見つけて、その表面に触れた。
　ぐにゃん、と歪み、泥に手を突っ込んだみたいにどぼどぼと少年の手が入ってゆく。
「みんな！小さな鏡だって！緊急事態だからブルーさんも来るって――！それ！」
　少年が鏡を見つけた直後、ゆうこが物凄い勢いで階段から戻ってきて言い、と同時にブルーが突如現れる。

「驚かせてしまってすまない…。説明は後。とにかく危険だ。どんな罠があるかも分からないから、僕が先に行くよ。君は少し下がってくれないかい？」
「えっ!?……訳分かんないけど…分かり…ました」
ブルーは鏡に手をかざし、はあぁっと力を込めて鏡を大きくする。
「行くよ。ゆうことひめはゆっくり僕の後ろを着いてきて。いおなは、何かあったときのためにその二人を守ってくれ」
「分かりました」
いおなと二人は、鏡の中へ入ってゆく不思議な光景を不安げに見送った。
☆☆☆
「ここって…めぐみの部屋?――あっ、めぐみ…! 寝てるの!? 起きてー!! 起きて起きて起きてー!!」
ひめが半泣きで、バシバシと乱暴にめぐみを叩き起こす。
「……ふぇ?」
「…めぐみ。…すまない、僕の力が及ばなかったせいだ…さぁ、大使館へ帰ろう」
ブルーはお姫様抱っこでめぐみを抱き抱えて鏡を後にする。
「!ブルー! みんな!…でも私、プリチェンミラーとられちゃったみたいなの…」
「めぐみ! 良かった…無事で!…あと、それなら大丈夫よ。君」

「え？あ、これですか？」
少年がめぐみ達にプリチェンミラーを差し出した。
さっき部屋で鏡を見つけたときに一緒に見つけたそうだ。
「えーっ!?あるのー!?少年、すごごーい！」
「たまたまですよ、たまたま…あはは…」
――この少年が何故鏡を見つけて、さらにプリチェンミラーまで見つけることが出来たなんて、この時考えるものは誰もいなかった。ただ運が味方をしてくれたのだと、そう思って疑う者なんていなかった。

俺が望んでしまった。

「僕とめぐみは先に失礼するけど、三人はどうするんだい？」
ブルーが三人に答えを促す。
「少年たちを送ってから大使館に行くよ。それに、大分混乱してるだろうし…」
「そうね。――あ、めぐみがいたってことは、相楽くん達もここにいたのかしら…？そしたら今はどこにいるのか分からないわよね…」
「確かにそれもとっても気になるけど、日も大分暮れてきたし、めぐみちゃんも助けられたし、とりあえず切り上げましょう？えっと――」
「緑山まことです」
「印知恵（しるしちえ）だよぉっ！」
「緑山くんに印ちゃん、もう少しここ見てく？」
「あっ、はい。あと少しだけ」
「じゃあ、私たちももう少しここにいるので、また後で」
「わかった。くれぐれも気をつけてね」
「――俺にか？」

「「「!?」」」
ブルーがめぐみと共に大使館へ転移しようと鏡を召喚したまさにそのとき、聞き覚えのある声が聞こえ、目を見開いた。
今までとは違う、冷たく、低い声色、鋭く憎しみの籠った眼差しででブルーをみつめる誠司を見て、
「誠司っ!!」
「危ないっ。落ち着いて…今はまだ動かない方がいい」
めぐみが思わず叫ぶ。相変わらずブルーにお姫様抱っこされたまま、今すぐ誠司のもとに駆け寄りたいと言わんばかりに動くが、まだ不安定なのでブルーが必死に抱き抱える。
「めぐみを…返せ!」
☆☆☆
俺は買い忘れたアルコールシートを買いに百円ショップを訪れていた。安いので、あれよという間に籠がいっぱいになりそうになるが、お金もあまりないので我慢。
目的はそれだけだったのですぐに買い物を終えた。
帰り道、アンティーク調のおしゃれな店を発見。マゼンダ色のネックレスを買ったところだ。

めぐみが、ブルーに失恋したあの日、めぐみにプレゼントしたネックレス。めぐみの髪と瞳と同じ色をしていて、澄んだ輝きを放っていた。学生に買えるほどの値段で良かったと、今まで貯金してて良かった、と心の底から思ったものだ。

今朝の戦いで気絶した時からめぐみはまだ目を覚まさない。よほど疲れているのだろう。

またあの笑顔が見たい。何だかんだ、俺はハピネスチャージプリキュアのことは好きなのだ。人助けをするめぐみも、敵をも仲間にしてしまうほどのめぐみの強さも、友達と協力しているときのめぐみの顔も、全て。憧れであり、かけがえのないものだ。確かにプリキュアにならなければなかったことだってあるだろうけれど、ハピネスチャージプリキュアのメンバーといるときのめぐみも、ひめ、ゆうこ、いおなのことも知っているからやっぱり出会えて良かったなーと思ったりもする。

けど、ブルー達との話とは勿論別だ。あいつはめぐみを悲しませた。ひめが『アクシアの封印を開けた張本人』というレッテルを貼られるようになる原因、幻影帝国をつくってしまった。ゆうこはブルーに選ばれたせいでプリキュアとして世界を飛び回らなければならなくなった。いおなは幻影帝国のファントムによって姉を封印され時間を奪われた挙げ句に姉と戦う羽目になってしまった。幻影帝国に原因がある、といわれればそうなのだが、俺が一番気に入らないのはそこではない。

今朝も本人に言ったが、奴は何も答えずにはぐらかした。何故、奴本人は戦わないのか。地球の精霊というくらいならば力はあるはずだろうに。レッドと兄弟なら尚更。固有能力の関係だというのだろうか？あいつは防御シールド（しかも結構弱い…）しか使ってこなかった気がするけれど。

俺も早くこの力を使いこなして…この世界を壊さなきゃ。めぐみのために。あいつらのために。

――無慈悲に傷つけられた彼らのためにも、な。

廃屋が見えてきた。やっぱりボロいなぁ。

最初来たときは三階に直接移動してきたため分からなかったが、一階と二階のボロさもかなりひどい。三階が一番ましだった。階段を昇るときはいちいち木の軋む音がするし。とはいえ別に長期滞在する気はないのだけれど。さて今日二回目のあの今にも取れそうになっているドアノブを回さなければ、と思ってレジ袋を持ち直してドアを開けようと腕を伸ばす――が、既にドアが若干開いていた。

「どういうことだ…？まさかバレてないよな…!?」

レッドは基本的に鏡でで移動するため、ドアが開いている原因とは考えにくいし、バレているとしてもあまりにも早い。ここは人通りも少なく、部屋の奥からは川こそ見えたりするものの、玄関側の見晴らしは最悪で、人が三人並ぶのがやっとというくらいだ。

一体誰が見つけられるというのか。俺は警戒心から、レジ袋をドアの横に置いてから足音を忍ばせて三階へ。

二階の階段あたりから声が聞こえてきた。

「!ブルー!みんな!…でも私、プリチェンミラーとられちゃったみたいなの…」

「めぐみ!良かった…無事で!…あと、それなら大丈夫よ。君」

「え?あ、これですか?」

あいつらが、来てる!?

何でバレてる!?それになんか知らない声が聞こえてきたぞ!?誰だ…?

三階まで昇り、バレないよう壁に身を寄せて部屋の様子を伺う。

訳が分からない。どうなってる?何故あんな知らない奴がプリチェンミラーを持っている!?

以前壊そうとしたら何故か壊れなかったので、確か俺はポケットに常に入れていたはずだが…。上着のポケットを探る、が…何も入っていなかった。落ちたとは考えにくいが…。てかレッドは何処だ!?疑問が次々と浮かび、プチパニックに陥りそうになるが、慌てておさめる。

そして、この部屋で誠司にとって一番の衝撃だったのは――鏡の前でめぐみがブルーにお姫様抱っこされていること。またブルーが。めぐみを奪おうとしている。平

然と、当たり前のようにめぐみを抱えていて。いつもの、何も知らないような顔で。ほんのり笑顔のあの大嫌いな顔で。
「分かったくれぐれも気をつけてね」
「――俺にか？」
「「「!?」」」
その場にいた全員がこちらを向いた。
「誠司っ!!」
めぐみが俺の名前を呼んだ。
「危ないっ。落ち着いて…今はまだ動かない方がいい」
ブルーがそれを止めた。
「めぐみを……返せ…っ…」
俺はブルーを見て、そう声を漏らした。
もう何も考えたくない。
頭の中が真っ白に――――否、真っ暗になった。
苦しい。助けて。あいつがいる世界なんて。あいつとめぐみが結ばれる世界なんて。
報われない世界なんて。幸せになれない世界なんて。

——嫌だ。

嫌だ。

取らないで。俺からめぐみを奪わないで。確かにブルーといる方が幸せならそれでもいいと思ってたけど、やっぱり本当はめぐみといたかった。何も知らないくせに。めぐみのこと、全然知らないくせに。元カノが戻ってきたらすぐそっちに切り替えやがったんだ。

「めぐみの気持ちも知らないで。知ろうともしないで。考えようともせずに。ただ使うだけ使って、それでもう終わりかよ。めぐみは何だったっていうんだよ。プリキュアは何だったっていうんだよ……！」

気がついたら声に出していた。

今朝よりもより強く、濃く、深い闇が、怒りと憎しみが、誠司を侵食し、支配していく。

みんな嫌い。

大嫌い。

「めぐみを返せめぐみのそばにいるなめぐみをこれ以上悲しませるなめぐみに触れるな

めぐみに関わるなめぐみと話すなめぐみと笑うなミラージュと笑うなミラージュと一緒に行動してるところをめぐみに見せるなめぐみを奪うな…っ」

苦くて苦しい。助けて。この心を軽くして。

《壊せ》

声が、響いて。これが、レッドに見せられたときの鏡の俺だということはすぐに直感した。

「壊れろ…！」

《邪魔な存在はめちゃくちゃにして消せ。ずっとお前がみんなを支えて、めぐみを支えてきたんだ。みんな幸せに、世界は幸せになったのに、お前だけはどれだけ想っても報われない。ならば今度はお前が幸せになればいい。幸せになるためには手段を選ぶな目の前のすべてを、邪魔するやつを消して苦しめられないようにしろ》

「消えろ…」

「嫌だ。みんな嫌いだ。嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い。邪魔するブルーが嫌いだ。偽善者のブルーが嫌いだ。幸せになってるこの世界が嫌いだ。何も知らない癖に。何もしてないくせに。笑ってるこの世界が嫌いだ。理不尽で矛盾したこの世界が嫌いだ。めぐみの幸せが犠牲になったこの世界が嫌いだ。憎い。笑い声を聞くだけでも吐き気がするんだ。何で邪魔するんだよ。何でだよ?何でまた守れなかったんだよ?何

で知らない奴等がいる？何で見つかった？何で分かってくれないんだ」
「誠司っ！ねぇ、お願いっ！私達と一緒に大使館に帰ろう？」
めぐみが叫ぶ。
《いまだにみんながお前を大切だと思ってると信じてるのか？まだ信じてるのか？》
《俺を、解放しろ。みんなぶち壊してお前の望む世界を作ろう。…めぐみもこいつらもお前が嫌いなんだ。お前が、お前だけが躊躇する必要はない。めぐみを奪ったブルーも、決してお前の想いに気づかないめぐみも、誰かに壊される前に壊さなきゃ》
「…もう俺は……躊躇わない…」
「――死ね」
誠司の回りを黒く赤いオーラが包み込み、黒いコートに変身。瞳から輝きは消え、結晶がおぞましく怪しげな輝きを放つ。
「さぁて、楽しく世界をぶち壊そうか。何よりまずは―ブルー、お前を壊す」
「誠司くん！やめるんだ！これが本当に君がやりたかったことなのかい!?」
「……そうさ」
鎌を生成し、ブルーに振り上げる。
「待ちなさい！相楽くん！」
いつの間にか変身したキュアフォーチュンがブルーを押し、すかさずラブリーがシー

ルドで鎌を弾く。
誠司は、弾かれた鎌をその反動で回転させて再び振る。
「……くっ…。誠司！もうこれ以上傷つけないで！――――傷つかないで！誠司がずっと一人で苦しんでたこと、気づいてあげられなかった！本当にごめん…！私、どうすればいいのか、はっきりとは分かんない…。でも、誠司が苦しんでるとき、私も誠司の悩みを受け止めたいって思うの！相談してよ！抱えこまないで、言ってほしい！だからお願い！誠司！本当はこんなこと…！」
キュアラブリーがシールドを張りながら誠司に叫ぶが、そんな声はもう、届きはしない。
「…相談なんてできるわけなかった」
「え？」
誠司はそう小声で呟くも、キュアラブリーは気づかないまま、聞き返してくる。その隙に少し力を込めてシールドを破ってめぐみを吹き飛ばし、めぐみの近くまで歩み寄って、倒れているめぐみを見下ろす。
「目障りだ。どーするかな…こいつ、いっそのこと殺すか。みーんなまとめて仲良くさよならだ。あいつを苦しめる奴なんて望む世界には必要ないからな…。……あ？はぁ、…五月蝿いなぁ」

「!?本当に、誠司…なの…?」
「まー、誰かと言われれば一応相楽誠司だが…ほらほら!あんまぼーっとしてっとまじで死ぬぞ?」
誠司は鎌を軽々と回転させながらプリキュアとの戦闘を続ける。鎌は自身の闇のエネルギー、赤い力を感覚的に制御することで生成できるので、わざと鎌を離して視線をそらせた隙に拳をふるったり、と鎌に頼りきらない戦闘スタイルでプリキュア達を圧倒していく。
容赦なくプリキュアに攻撃をし続けている間も、彼女達はひたすら叫び続ける。届かないのに。
「無駄だぜ?どんなに叫んでも想いは届かない!もとより、この世界は誰の想いも届かないようにつくられてるんだよ!」
「届くよ!届くって私は信じてる!どれだけ離れていても、想いは届くよ!私達プリキュアは魔法が使える訳じゃない…助けたりできないこともあるかもしれないけど…けどね!信じる気持ちがあれば、何だってできるって思える!仲間といれば何でも乗り越えられる!想いの力って凄く強力だから!思うように伝わらなくても、無駄だって言われても、世界中がみんな諦めちゃっても、私は信じていたい!愛の名を持つ、愛乃めぐみとしても!キュアラブリーとしても!」

「誠司！私はあんたを許さないけど…信じてる！誰よりも優しいって知ってるから！めぐみのことも！もやもやが溜まってたんだよね…。そりゃあ誰でも嫌なことくらいあるわよ！どれだけ自分を責めても過去は変えられない！だから誠司、もっと大きな後悔をする前に元に戻って！こんなの間違ってる。理由なんてもう関係ないよ…っ。誰かを傷つけてまでの幸せって何？それは本当に幸せだと思うの!?全力で止めてやるんだからあああああああっ!!」

「私も相楽くんを止めるわ。友達が間違ってるときはちゃんと間違ってる、って止めるのが本当の友達だと思うの。ちゃんと止めて、みんなを守って、世界を守って、想いも伝えて…そしたらまた、みんなでご飯、食べよう…？」

「相楽くん！あなたはいつも正義感に溢れていたわ。空手でもいいライバルだと思ってた。でも、今のあなたは…！私が正しい道へ導くわ！お願い、あの頃の…道場に来たときのことを思い出して…！めぐみを守るんでしょ!?めぐみの幸せを！そりゃあ人生大変なことはあるに決まってる！それを一緒に乗り越えてこそなんじゃないの!?めぐみが悲しむって分からなかったの!?世界が平和になることがめぐみの夢なのに！何でそれを、しかも一番そばで見てきたあなたが壊そうとするのよ！目、覚ましなさいっ!!」

「戯れ言をごちゃごちゃと…五月蝿いなぁ！あーもーぅ！今更何言ってる？今まであいつを…正しくあろうとした相楽誠司を壊したのはお前らだろ!?傷つけて釘を打って破

壊して粉々に砕いて引き裂いて破ったのはお前らだ！どれだけ苦しんでいても、誰一人気づこうとしなかった！気づいても何もしなかった！相楽誠司は正しくあろうとしたのに！俺を――負の感情の塊の憎しみよって作られてるこの俺を、押さえて、押さえつけて、なんとかしようとしてたのに、一番の支えが崩れ去った！絶望しかなかった！そりゃあそんなボロボロの心じゃ俺には抵抗出来ない訳だよ。むしろ受け入れるほどになってたさ。今更――無くしてから気づくなんて…遅すぎるんだよ…」

鎌を振り。

ラブリプレスやバトンやタンバリンを輝かせ。

言い合いながら尚も戦闘は続く。誰がみてもどちらが劣勢かは明らかだったが、まだ…！

拳を交え、互いを激しく消耗させながら、今にも動かなくなりそうな身体を、憎しみで・希望で奮い立たせた。

☆

プリキュア達のすぐ横で、ブルー、知恵とまこと、妖精達が、戦う様子を目の当たりにして立ちすくんでいた。

今までとは違いすぎる、想いを激しくぶつけ合う戦い。

見ているこっちまで張り裂けそうな想いが込み上げてくるほどの緊張感。
そんな中でまことがほんの微かな小声で、「あれが相楽誠司か？凄いねぇ？あ、レッドはどこかな…？はやく君の楽しい顔がみたいよ？」と言ったのを、ファンファンは聞き逃さなかった。

思い出を無駄にしたくない。

――ゆらゆらと、草木が揺れる。

「――けじめ、だと？」

「そうよ…私は…幻影帝国の女王として、多くの人々の平和を、時間を、心を、奪ってしまった…。だから、今度は私が世界の多くの人々を守る…そして、自分に決着をつける…！」

「ふん、笑わせる。所詮そんなの建前に過ぎんのだろう？本当は――ハピネスチャージプリキュアのための足止めというわけか…まあいい、誠司は充分持ちこたえるだろうし少しは遊んでやるとしようか」

ミラージュの力強い眼差しがレッドを捉える。

「それは良かっ…たぁッ!!」

ミラージュが叫びながら拳を繰り出すも、僅かに首を動かしてレッドが澄まし顔で避ける。

そしてそのままレッドは回し蹴りを繰り出すも、ミラージュは両手で受け流す。その上に返された足をわざと思い切り上げ、勢いを利用し空中で回転して着地。

すぐに低い体制になって右足で地を蹴り、ミラージュに接触するほどの至近距離から赤い光を放つ。
「…くっ!?」
「その程度の力か。ファントムがいたらもう少し準備運動になったというものを…。ふん。想像以上に早く片付きそうだ。まぁ、お前など無視して立ち去ればいいだけだがな」
「私は――諦めない！けじめも、誠司さんも！」
お互い傷付け合い、お互い言葉をぶつけ合いながら戦いは続く。
「……何を言っている？」
「自分の気持ちを押し殺し続けてきたのに、我慢してきたのに、その我慢は無駄だったのかもしれないと知ってしまって、今までこんなに我慢に我慢を重ねてきたのに、って。どうして、って。どうして自分は大切な人の側に、一番いたいポジションで一緒にいられないのかなって。私がブルーにふられた時も。今までずっと、身分が違いすぎる、仕事に影響が出てしまう、って我慢してて、自分の思いだけは伝えたいと思って伝えたら、案の定。ずっと私はブルーの隣に『プリキュアの一人』という立場でしかいられない。実は今も少し、思うの。私がブルーの隣に恋人としていられるのは、かつて私が悪に堕ちてしまったから、二度と同じことにさせないためのある種の保護手段でしかないん

じゃないか、って。私は、誠司さんの想いが少しは分かる気がするの…」

ミラージュはプリキュアの力で強化した拳でレッドを殴り飛ばす。土煙が周囲を覆い視界を遮った一瞬の隙に、レッドがミラージュの足を蹴り飛ばしてバランスを崩し、再びミラージュの腹に赤い弾丸を放つ。

「――――くは」

口元から赤い液体が吐き出される。

「誠司を闇に堕とした原因が何を言う?お前にそれを言う資格などない!想いが分かる?戯れ言だな。たとえお前が共感しようと知ったことではない!それに……世界を侵略し、人々の時間を、人生を奪っておきながら、被害者面するのか?」

「――――そんなわけない!私に何が出来るかは分からない……けれど、世界のため、平和のため、罪を償いたい…!その最初の段階の最初の敵が、ディープミラーよ!貴方を倒して、過去の私にけじめをつけて、もう闇に飲まれる人がでないようにするわ!」

「―ミラージュ・スクエアミラーインパクト!」

口内の鉄の味を無視し、四角形の対角線のように頂点から中心―レッド―に向かって四方から稲妻を走らせる。病み上がりのミラージュが出せる最大限の必殺技だ。これできっと少しは世界の役に立てたはず。

――――――が。

「――ぐはっ…。今のはなかなかじゃないか？だがもうアップの時間は終わりだ――――ッ！」

直後、先の稲妻など比にならないほどの、とてつもない攻撃力の衝撃派がミラージュを襲った。

☆☆☆

誠司はプリキュア達と未だ戦闘を続けている。一対四なのにも関わらず、誠司が優勢だ。

そして、もうひとつの戦いが行われようとしていた。

――ファンファンが、ファントムに変身した。青く澄んだ眼差しでまことを睨み付ける。

「貴様、何者だ！」

「え？何者って、緑山まことです。どうしたんですか、突然？というか、貴方の方こそどちら様ですか？」

まことはきょとんとしたまま殺意を向けてくる相手を見る。そのやりとりを、隣の知恵も見つめる。

「何やってるんですの、ファンファン！一般人の前ですわよ！失礼ですわよ!?」

「――お前達は黙れ。おい、こいつらの言ったこと、聞いてなかったのか？」
「何か変なこと言ってたか？俺たちには特に聞こえなかったぜぇ？」
「緑山まことと言ったな。印知恵とやらもお前の仲間か。貴様ら、レッドを知っているな？」
　そのファントムの台詞を聞き、まことは少し驚いた顔をしたのち、うっすらと微笑んで、
「君、すごいねぇ？殺気がだだもれだよ？そう、僕達はレッドを知っているよ？だけどそれがどうしたんだい？一応言っとくけど僕達はレッドの仲間じゃないよ？しいて言うなら――――レッドに恨まれている立場だろうよ？」
「どういうことだ…？貴様はどっちの味方だ!?」
「妖精さん、僕達はどちらの味方でもないよ？人間の憎み合う様を、苦しむ様を、滅び行く世界を見届けたいと思った純粋な観光客さ？何もしてないじゃないか、ただの観光客を殺すというのかい？」
「何が純粋だ！何してないだと？そんなわけないだろう！お前達が、プリキュアをここに導いたんだろう？何のつもりだ？」
「だーかーらー本当に楽しみたいだけなんだって！ただ単に面白そうだなーと思って、相楽誠司のポケットから変身アイテム奪ったり、アジトを突き止めてプリキュアを案内

しただけ。レッドのときだって、面白かったから星を滅ぼしてやっただけ」
「――――星を、滅ぼした…？もしかして、君達は、守護者か？」
「おー、やっぱり気づいた？でも遅いねぇ？ダメダメな弟さんだねぇ？まぁ知ったところで何になるんだい？僕達は危害を加えてもいないし、加えるつもりもないんだ。……そろそろその剣をおさめなよ、プリキュアハンターさん？」
「――――っ」
　ファントムはやむを得ず剣をしまった。確かにこいつらは危害を加えてこないきがした。それに、こいつらの戦闘能力ははかりしれなかった。恐怖さえ感じるほどだ。到底敵わないかもしれない。ましてや、ファントム化はレッドの能力で叶ったものだったのだから、自分の意思で発動させるにはかなりの体力を要するし、プリキュアの戦闘に加わったとしても、今の力じゃただの足手まといになってしまう。
「君が話の分かる奴で良かったよ」
　ファントムが気を緩めた瞬間、またファンファンの姿に戻ってしまった。
「ところで、君達はここで何するつもりなんだい？見るだけ？傍観者だねぇ？僕達はここにいて見届けるけど？」
「僕は……見届けなければならない…恐らく、僕が誠司くんに何を言っても、彼を逆上させるだけだろう…何をすれば分からないけど…でもここにいなければいけない気がす

る…もし、何か少しでも状況が変わればいいんだけど…」

☆☆☆

ブルー達のやりとりをよそに、誠司とプリキュアは戦闘を繰り広げていた。

「あの鎌をどうにかしないと！イノセントフォームでも斬られるかもしれないし…何かないかな？……まあでも取り敢えず……っ!!」

ひめが呟きながら誠司の鎌をかわし、後ろへ飛ぶ。

「戦闘範囲、広げた方が戦いやすいっ！――プリンセス・ウォール！」

「ナイスひめ！」

ひめが周りへの被害を考慮して、新技プリンセス・ウォールで壁をつくり、建物から抜けてその広い壁内へ落ちて着地。続いて他の三人も降りて、ファントムを待ち構える。――――が。

「広い方がいいのは同感だが……俺はお前達とお遊びしたい訳じゃないんだ。そのままじっとしておけ」

誠司は建物から降りずに、壊れた床や壁、勿論ドアや窓にも赤いエネルギーで新たな壁をつくり、プリキュアが建物に侵入できないようにした。

「えっ⁇嘘でしょぉぉぉぉぉぉ!?どどどどどどどうしよーーーう!?」

ひめの叫びは町中に響いたが、建物内には全く響かなかった。

「お前達はいらん」
そう言って、壁を歪ませて、妖精と知恵とまことを外へ放り出す。
「……誠司くん」
ブルーと誠司が互いに、戸惑いの視線で、憎しみの視線で見つめ合う。先程までとは一変、怖いほど静まりかえった空気が漂う。
「お前は、めぐみのことをどう思ってる?もしくはミラージュが戻るまでどう思ってた?」
「……たくましくて元気な女の子だと思ってるよ。今も、出会った時も。世界を救ってくれて、ひめを、いおなを、そしてミラージュを救ってくれて、本当に感謝している」
「…それだけ、か?」
「ああ。勿論。誠司くんがめぐみに好意を抱いていることも知っている。僕も心のなかで応援していたさ…」
「俺は……知っている。お前が、夏の合宿のときにめぐみのそばを離れずにずっと一緒にいたことも、ブルーと呼ぶようになったのもあの日からだ。ハロウィンのときも、誕生日会のときも、いつもめぐみのそばにいた。俺は、めぐみがお前を好きならそれでいいとも思った。めぐみが幸せになるなら。でも違った。お前はめぐみを捨てた。ミラージュが戻ってくるから捨てたんだろ…?」

「君は、何を言っているんだ…？僕は別にめぐみに好意を寄せていた訳じゃない。特別視していたのは間違いはないが、それはハピネスチャージプリキュアのリーダーである彼女をサポートしなければと思っただけだよ」
「そうかよ。…じゃあ最後の質問だ。お前は何故戦わない？何故プリキュアに、ただの女子中学生に戦わせる？」
「僕は……弱い。防御しか、出来ないんだ。レッドから守護者のことや、能力のことは聞いているかい？
「――そうか。何故かは分からないけど……僕に与えられた力は、シールドの展開、シールドの操作、結晶の生成、結晶に選ばれた者への力の譲渡だけだった」
「聞きたいことは聞けた。―お前を殺す」
ブルーはどこか遠くを見るような悲しげな眼差しで、
「……そうか…」
と呟いた。
「ん、意外な反応だな。あっさりすぎて名残おしいけど…まぁいいや」
「さようなら」
誠司は鎌を生成し、振り下ろした。
何か硬い感触だ……ん!?

ブルーの腹の服は切れていたが、肉は綺麗なままだった。破れた服から若干見えるのは――――シールドか。

「流石に抵抗くらいはするのかよ」

力は今朝の時点で使いきったはずだと思ったが……。回復したのか？いや、今朝より力が増している。どんどん…!?

「そうじゃないか……忘れちゃいけなかった……僕は…みんなを守らなきゃいけないんだ…あんなにボロボロになった少女達でも諦めなかったのに、僕があきらめてどうする…!どれだけ傷つけられようと、世界中からの応援がある限り、力は無根だ！」

「ぶつぶつと…。くだらねぇー！守るだと？ふん、笑わせる。少年一人守れなかった奴が、女一人守れなかった奴が、兄弟一人守れなかった奴が何を吠えてるんだよー――――!?」

ブルーをさらににらんだその時、壁から大きな声が聞こえてきた。

「誠司いいいいいいいい!!」

☆☆☆

「どうだった？いおなちゃん」

「…全然駄目ね。ヒビ一つ入らなかったわ…悔しいけれど」

「そっかー…いおなでも駄目かー……あれ、何か声が聞こえない？」

「あああああああああああああああああああ!!!!」
「ぎゃふんっ!?」
ひめの上に妖精と知恵とまことが落下してきた。うぅ、とうめきながら彼らをどくように急かす。
「あっははは…ごめんごめん…!」
頭をかきながら知恵が差しのべた手をひめがとってフラつきながら立ち上がる。
「あれ?でもまだざわざわしてる気がする…」
ひめが呟き、少し飛んで壁の周りを見回す。
——壁の周りにはいつの間にか多くの人々が集まっていた。一体何があったのか、と混乱しているようで。それもそのはず、建物は崩壊寸前、壁は半分以上真っ赤だし、煙も辺りを漂っている。
そして、とある少女が先のキュアフォーチュンに気づいたのか、
「プリキュアだ!きっと何か悪いやつと戦ってるんだ!頑張れー!!プリキュアー!!」
と叫んでいた。どうやらその声だったようだ。やがて声は周りに伝染していき、応援の声が大きくなってきた。
傷だらけだった身体が少しずつ癒えて、疲れもどこかに吹っ飛んでしまった。
「凄い…みんなの応援でみるみる力が沸いてくる!」

おぉー！っとつい声が漏れてしまう四人。
「…ねぇ、めぐみちゃん、やっぱりイノセントフォームにならない？」
次の戦闘に向け、対策をしなければ、とキュアハニーが心配げにめぐみの顔を覗く。
「あれ？確かに！てか、まだ使ってなかった!?」
「…ハニー、今の言い方だと、どうやらめぐみがイノセントフォームにならないって指示してたみたいな解釈しかできないんだけど…もしかして、本当にそうなの…？」
「ええ」
「ええっ!?何でぇ!?っていうか、めぐみがそれを指示してたってことは、今まで使える場面があったってこと!?弱ってからじゃないと使えないのかと思ってたんだけど!?」
「相楽くんは…多分、あれでも大分身体に支障がでてきているわ。力を使うのはまだ慣れてないはず…それに、今朝も、今も、四人を一人で相手していたから…」
「いおなちゃんの言うとおりよ。それで少しずつ隙が見え隠れするようになってきたから、今やればきっと、って思ったんだけど…」
「みんなごめんね…でも…！何か、違う気がするんだ……確かに、誠司には効くかもしれない。もし浄化までは出来なくても大きなダメージは与えられると思う。けど、それじゃもっと大きな問題の解決にはならない気がするの…さっき戦ったとき、一瞬だけ赤い結晶に触れたんだ……そしたら、なんかもう分かんなくなっちゃって。今日の誠司

は、いつもの誠司とは違う誠司ばっかで…。何かに対して、燃え盛るように、怒りを爆発させてた。憎しみとか悲しみとか、苦しい気持ちでいっぱいになってたの…でもそんな誠司も全部誠司なんだよね。多分、私とかみんなの前では隠してた、隠し続けてた、本当の誠司なんだと思うんだ…。私、誠司のこと全然知らなかった。分かってなかった。誠司は私のこと、私より知ってるかもしれないくはいたくさんのことを知ってたのに…」

「めぐみ…」

「だからね、私、誠司とちゃんと向き合いたい。二人きりで。きっと私が原因だから。あの赤い結晶に触れたらもっと何か起きるかもしれない…。感じるの…ただの勘だけど、うずくまってる誠司があの中にいる」

「じゃあ次の作戦は、誠司の結晶に触ってめぐみが奇跡を起こす、だね！」

「このみんなの、世界中のみんなの応援でパワーアップしてるんだから、できるわよ！」

「私もめぐみちゃんをサポートするわ！……めぐみちゃん……相楽くんを…激しい感情の渦から解放してあげて…！」

それぞれがめぐみを激励する。

最後、知恵が寄ってきて、

「もし出来たら、誠司さんに、これ渡してほしいだけど…！」

と言って小さな紙を手渡した。めぐみは何も聞かずにこくりと頷いて受け取り、建物へと飛んでいった。それに他の三人もついていく。

知恵はその姿を見届けた。強い意思を秘めた少女達を心の中で応援した。

「行っちゃった…ふ――まこと、どうする？」

「ま、ついていっても結晶の中なんて見れないからいいかなー」

まことが草むらに身体を預け、空を見る。

「えっと…気になるのですが、さっきの紙は何だったのです？」

くつろぐまことをよそに、リボンが訪ねる。

「――誠司さんのお母さんからのお手紙だよ。たまたま会ったから貰ったの。あの子にあったら渡して、って」

助けられてよ、みなさん。

「誠司いいいいいいいいいい！」

ふと建物の外から聞こえた声主が誠司の動きを止める。

「何回同じことすんだよ？てかまだお前はブルーを守るのか？では問おう。お前はブルーを助けたいのか、誠司を助けたいのか。ブルーを選べば俺は世界を巻き込んで自殺でもしてやろう。俺を選べば…まぁ、それでも結果は同じだが」

「私は、二人も世界も助けるよ！目の前の人を助けられないでプリキュアとは言えないもん。…ねぇ誠司。いつもと違う誠司も誠司なんだよね…。ずっと隠してた本心の誠司なんだよね。私、ちゃんと誠司と向き合いたいの…だから…！」

ラブリーは誠司の胸の結晶に優しく触れた。

刹那、赤やら紫やらが混じり合った光が二人を包む。

目映い光に思わず目を閉じたブルーが再び目をあけたとき、先の戦場には誠司とラブリーが目を閉じて倒れているだけになっていた。

☆☆☆

「――――ん？もしかして…」

気がつくと、めぐみは暗い空間の中にいた。
全体的に薄暗く、かろうじて周りは見えるものの、明かりなどは存在しておらず、果ての見えない天井から垂れ下がる赤いリボンがうっすらと光っているだけである。
多分、ここは誠司の結晶の中。つくりがどうなっているのかは分からないけれど、とりあえず進んでみよう。
一歩、一歩と歩くたびにカツンと靴音が何度も跳ね返り不気味さを演出してくる。うぅ…。
少し狭めの一本道だ。最初に目覚めた広場から見えたのはこの道一つだけだったので怯えながらも足を進めた。
やがて、扉が現れた。鏡のようになっていて、私の顔を写し出している。
この扉開けるのかな?と思い、取っ手もないのでそのまま強く押すも、びくともしない。
プリキュアの力でも無理なの!?どーしよう…。
他に道はなさそうだしなぁ…。
「おいお前」
「誠司…?」
背後から聞き覚えのある声。だが、お前、と呼ぶということは、誠司であり誠司でな

いことを示している。
「何しに来た？こんなとこまでよお？」
「あなたを――誠司を助けに来たの！実際に来て実感してる。やっぱりここ、誠司の心の中だよね？」
「あぁ、まぁあながち間違ってないが…それで、お前はどうするつもりだ？お前は、俺を助けるとかぬかしてたが、それ相応の策があるんだろ？」
「――ないよ？」
「は？馬鹿かお前」
「うん。馬鹿だよ…。私は大馬鹿もんだよ！誠司の気持ち、全然何も知らなかった…。だから、もっと誠司を知りたいの！誠司を助けたいの！助けたい、って思いだけじゃどうにもならないかもしれない。つむぎちゃんのときみたいに、やっぱり私が出来ることなんてないのかもしれない。だけど！諦めたくないの！想いすら無かったら何も始まらないから！あなたと戦う気はないよ。とりあえず進もうと思ってただ歩いてただけだけど…」
「お前なぁ…本当に助けるつもりなのか？救えると思ってんのか？ならば証明してみせろ。お前が人を助けることが出来る人間なのか。他人の前に自分とでも向き合っとけ。証明できたらこの扉、開けてやるよ。もし出来なければ――永遠に悪夢の中だ」

嘲笑の不吉な笑みを浮かべ、扉に視線を促す。
「証明、か。うん！やるよ！」
キュアラブリーは……愛乃めぐみは、一切の迷いもなく扉へ触れた。瞬間、めぐみを鋭く赤い光が包み込んだ。
☆☆☆
「ラブリー、大丈夫かなぁ？」
プリンセスが怪訝そうな顔で、倒れてびくともしない誠司とラブリーを見つめる。何故かあり得ないくらい冷たくなっている二人の身体に毛布をかけて、さっきまでとはうってかわった静寂の空気にふぅ、とため息をつく。
ブルーは疲れたのか壁にもたれかかっていて、息も少しあがっていた。ハニーとフォーチュンも特に何も出来ないので鋭い目つきのままうつ向いている。
誰も喋りはしないので、よりこの静まり返った空間に緊張感をもたせている。
めぐみ、誠司、頑張れ！信じてる！
この気持ちだけは皆一緒、だよね！
『ガチャ』
そのとき、ゆっくりとドアが開かれた。
ミラージュが来たのかと思った。だけどそこに平然と立っていたのは、ほぼ無傷のま

まのレッドだった。

☆☆☆

「――ふふ、目、覚めたのね」

頭に柔らかい感触。膝枕されてるみたい。

ここは何処だろう？何のために来たんだっけ？あれ？

優しく包み込むような声が頭上から聞こえてきた。

聞き覚えのある――ありすぎるような声が。

「アンラブリー……？」

「覚えててくれて嬉しいわ。――ねぇ、めぐみ。辛かったよね？とっても苦しかったよね？この空間なら何も心配しなくてもいいのよ？一緒に、ずっとここにいよう？」

「それは、無理だよ」

「誠司、助けるの？やめてよ。もう。人助けなんて。だって、本当は嫌だもんね？知ってるよ？めぐみのこと。たっくさん知ってるの！」

愉快げにアンラブリーは語り出す。

あのいつもと違う誠司も私でいうところのアンラブリーと同じような感じなのかな。

「嫌なんかじゃないよ！誰かを助けると笑顔になってくれるの！それが、私にとっても嬉しい！」

「そうよね。嬉しいよね。誰かを助ければ誰かが褒めてくれる。私の存在を認めてくれる。愛してくれる。感謝してくれる。仲良くしてくれる。とっても嬉しい。だけどとっても辛いよ」

今度は切なげに目を伏せて囁いた。

「辛くなんてないよ」

「嘘よ。私は私だもん。ロケット作りを手伝ったときのこと、覚えてるかしら？私はあの汚い白衣を洗ってあげたのに！あの女はめぐみに感謝しなかった！褒めてくれなかったよ！完成するまで洗わないつもりだったなんて知らない！めぐみはあの女のためを思ってやったことなのに！また失敗した、って。めぐみは不器用だもんね。ひめがケーキ作ってくれたときもそう。皆が頑張ってたからめぐみも手伝いたかっただけなのに！あり得ない！ブルーだってめぐみを裏切って！めぐみはあんなに愛していたのにブルーは元カノが戻ってきたとたんに手のひら返しやがったわ！あり得ない！世界の人、なんてゆう曖昧で不確かなものなんかのためにめぐみが犠牲になる必要なんてないの。もう無理しなくてもいいのよ？可哀想に。あぁ、可哀想なめぐみ。愛して。もっと皆、めぐみを愛してよ」

アンラブリーが私の髪をふわりと撫でる。

何故だろうか。心が落ち着く。けど、なんか変。

心臓から苦しくて苦いものが溢れてる感じ。

「だってめぐみは！誰かに認めてもらわないと存在できないもの。最初はお母さんのお手伝いだったよね。でもだんだん皆大きくなっていって、みんな将来の夢も決まって、個性も豊かで…自分だけひとり取り残されちゃったよね。人助けしたら感謝してくれるもん。愛してくれたもんね。お母さんは身体が弱いし、お父さんもあんまり帰ってこないから、しっかりしなきゃって思ってる。それから、両親がめぐみを構ってくれなくても全然幸せだって思うようにしたよね。不幸じゃないって。最悪じゃないって。私は幸せだって」

「私は、そんなこと、思ってないよ。本当に私は幸せだよ」

小声で私は抵抗する。

アンラブリーの言葉が心に浸透して、広がる。

ずきずきと痛む。

私は幸せ。苦しくない。辛くない。痛くないよ。安心して。私は大丈夫だから。心配しないで。みんなを心配するのは私なの。私がみんなを助けるから。

本当に幸せだよ。あれ？本当のことのはずなのに、何で私は小声になってしまったんだろう？

私は何？私は、誰？

「ここには私と私。めぐみと、めぐみしかいないわ。何でも言っちゃっていいのよ？全部吐き出していいのよ？」

いままで堪えてたなにかが弾けて溢れた。

相手は私何だし、言っちゃっていいかな…。

「ねぇ、私、どうすればいいのか分かんない。私は人助けしたい。笑顔が見たい。ブルーに振り向いてほしかった。愛してほしかった。お母さんもお父さんも私にもっと構ってほしかった。私、みんなを助けたのに！みんなは私じゃなくてプリキュアに感謝してる！めぐみである私じゃなくてプリキュアのキュアラブリーに感謝してる！同じことのはずなのになんか嫌なの。それに、頭悪いからみんなの考えてること全然分かんなくて。周りが今どういう気持ちなのかとか分からない。何でいつも失敗ばっかりなんだろうね。私。みんなは普通に出来るのに。勉強だってちゃんとやってるはずなのに全然分かんない。助けたつもりなのに迷惑かけてばっかだし。みんなに頼ってばっかりなの。助けてほしくないの。誰にも助けてほしくない。自分で出来なきゃだめなの。全部私がやりたいの。じゃないと、私は私じゃなくなっちゃう気がするから」

誰にも言いたくなかったこと。

ポロポロ出てきちゃった。

「あれ、やっぱり私、アンラブリーの言ってる通りなのかな…」

涙が出てきちゃった。何でだろう。
「めぐみ。めぐみ。優しいめぐみ。世界を守った英雄のめぐみ。めぐみはさ、世界を命懸けで守ったよね。じゃあその分壊してもいいんだよ」
「駄目、だよ。人を傷つけちゃ」
「めぐみ」
「？」
「もう休んでいいんだよ。めぐみは精一杯戦った。私に任せてよ」
「……私って、最悪…だなぁ…」
甘い香りが漂う。あんなに恐ろしかったアンラブリーが今は全然怖くなかった。むしろ優しく感じた。
私の心から溢れでる何かをアンラブリーが受け止めてくれる。暖かくて、冷たい。
力も元気もでなかった。疲れた。
正直辛かった。何もしたくない。何も考えたくない。
嫌い。みんな嫌い。滅茶苦茶にしてやりたい。
黒いもやが私の周りに漂い始める。
赤い光が暗い心を照らし出す。
《何でみんな笑ってるの？めぐみはこんなに辛いのに》

《誰にもめぐみを責める権利なんてないのに。中学生のひとりの女の子に一体何を求めてるのかしらね》
《もう悲しむ必要なんてないわ》
——本当に？
《壊して。壊して。壊して。》
《そしたらまた皆があなたを必要とするわ》
——そう、かもね。
《さぁ、解放してよ》

あぁ、

プリキュアなのに、私最低だ。

――――誠司もこんな感じなのかな。

「ぐ…ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！」
「――所詮綺麗事に過ぎなかったようだな。自分の闇すら乗り越えられずにどうして他人を助けようなんて思えるのか、全く愚問だぜ」

☆☆☆

「レッド!?ミラージュは…」
「準備運動程度にはなったが。まさか流石のお前達でもあれで倒せるとは思ってないだろう？」
「……………そんな…っ！」
「それで、あなたはわざわざ何故ここに戻ってきたの?まさかまた――」
フォーチュンが目を細めて構えをとり、レッドを睨み付ける。

「いや、戦いはしない。誠司とプリキュアとブルーがどうなっているのさ見ておこうと思っただけだ。で、今はどういう状況だ？」
「ラブリーが相楽くんの憎しみの結晶の中に入って助けにいったわ」
ハニーが低いトーンで答え、視線を促してレッドに説明を求める。
「そんなこと…結晶製作者の俺ですらどうなるか知らないぞ…とはいえ恐らく、一つの要素は確定だ。結晶の性質は闇だ。光を速攻排除しようとする。つまり――」
「めぐみも誠司みたいになるかも知れないってこと…!?うそぉぉぉぉぉおお!?」
「そういうことだ。おっと、噂をすれば」
「……………っぐ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあ！」
ラブリーのプリチェンミラーが不吉に輝きを放ち出して、フォームや髪を黒く染めていく。
やがて、苦しみながら、か細い声でラブリーが呟き始めた。
「私は幸せ。私が助ける。みんな助ける。私を認めて。私を愛して。私を見て…」
ふらふらと、立ち上がる。
それをただ傍観することしか叶わない自分たちを呪った。
「うそでしょ…」
深紅の瞳が鋭く見開かれ、一同を見つめた。

「――大好きだよ、みんな。だから私に助けられてよ」

消したくない。

「助けたい。みんな助けたいの！だから……みんな私が壊す。何もかも滅茶苦茶にしてから、助けてあげる……っぐっ!?」

ラブリーが胸と頭を押さえて苦しそうに悶え始めた。

そして今度は、

「滅茶苦茶になんて、壊…さない…壊したくなんて…ない！…私は…困ってる人を…助けたい…だけ…なのに…」

とさっきとは真逆のことを呟き始めた。

「一体何がどうなって…!?」

＊

苦しい。心からじわりじわりと黒いなにかが広がっていくのを感じる。辛い。怖い。そう思えば思うほど、力が底なしなのかというくらい沸き上がってくる。

破壊衝動が全身を駆け巡る。

壊せ、と囁く声が聞こえる。めぐみの思い通りにしてしまえばいいのに、と甘い言葉で私を惑わす。

ファントムが変身したアンラブリーではないけど、多分仕組みは同じなのだろう。

私を鏡で写し出して負の感情だとかの闇の部分を切り離したもの。私自身。

どうすればいいのか分かんない。

助けたい。その思いでいつも動いてきたけど、それが誰かの邪魔をしてたなんて。気づかないばっかで。気づいてほしいばっかで。私、何してたんだろう。

バカ。バカだ！

本当に！私はっ！大バカだ！

誰にも気づいてもらえてない？

多分みんな気づいてくれてたよね。

アンラブリー戦のときもそう。

『そんなの、ラブリーらしくない！』

私のこと、みんな見てくれたのに。

『お前らしくていいんじゃねぇの』

『たまには自分も幸せにならないとな』

誠司っ…私っ…ずっと一緒にいたのに何も気づけなかった。
自分を誰かに見てもらいたいって思ってるだけだった。
私がちゃんと誰かと向き合えたことはあったのだろうか？
ひめ。ゆうゆう。いおなちゃん。お母さん、お父さん。いおなちゃんのお姉さん。街や学校のみんな。そして……誠司。
全部私がやればみんな楽になれると思った。
私がやらなきゃ駄目なんだって思った。
だけど。
この世界にいるのは。
この街にいるのは。
このチームは。
――私だけじゃなかったんだ。
皆が、私を大切に思ってくれてたんだ。
私もみんなが大好きだし大切だから、この性格はなかなか変わらないかも知れないけど…。
「……頼っちゃっても…良い…かな…」
みんな……助けて…っ！」

私は胸を押さえながら叫んだ。
ハピネスチャージプリキュアに。
大好きなみんなに向かって。
迷惑かけてばっかでごめんね。私の力不足かもしれない。みんなに力を借りたい。
どうしても。
私の知らかったことをたくさん教えてくれて、
私と一緒に笑ってくれて、相談にのってくれた、
ひめと、ゆうゆうと、いおなに。
助けられたいって思っちゃった、私の我が儘、聞いてくれるかな…？
どんな反応が返ってくるか不安になりながらも顔を上げてみると、ひめがこれまでに無いんじゃないかってくらいに、とっても嬉しそうに、にっこりと笑ってくれて、いつも以上に元気で明るい声を届けてくれて。
「――あったりまえでしょーっ!!むしろ私めっちゃ頼っちゃってたからね、もっと頼ってもいいですぞ！」
「何年一緒にいると思ってるんですか～？頼るの、遅すぎだよ？頼りすぎも頼らなすぎも、ご飯のバランスと同じでかたよるのは禁物なのよ！」
「んもう……何でも一人で抱え込まないの！それを私に教えてくれたのはあなたじゃな

い！」
ゆうゆうもいおなちゃんも。
それがとっても嬉しくて。今までのモヤモヤなんてどこかに消えちゃった。
「私に…必殺技…ばーんと打ち込んじゃって！…ちょっと、何言ってるのよ!?またあの日々に戻るつもり?戻るよ。いつもの普通の生活に。幸せな生活に、ね？」
「なんか二人で一人みたいな感じになってるわね…」
「めぐみが、ばーんって言うならやっちゃうよ！信じてるからねっ!?」
「思いを込めて…いくよ、めぐみちゃん！」
「「ハピネスチャージプリキュア！イノセントフォーム!!」」
「プリンセス・ウィンデイウィンク！」
「プリキュア・ハニーテンプテーション！」
「プリキュア・エメラルドイリュージョン！」
三人から同時にまばゆい光の花束がぶつけられる。
――あったかい。とげとげした最悪な気持ちを包み込んでくれる。私は、幸せもんだなぁ。

問い：【あなたはあなたを乗り越えられますか】

回答…私だけじゃ無理かも。みんなと一緒に、乗り越えたい。　ずっと私は幸せ。でもね、みんなと一緒にいれたら、もっともっともーっと、幸せなんだよ。

そのときは勿論、誠司もいないと。

誰も欠けることなく。

誠司、苦しいよね。私とは違うかもしれないけど…結晶の空間のときからも、言葉からも、行動や表情からも、辛いことは伝わってきた。

憎い。辛い。怖い。嫌だ。苦しい。痛い。苦い。何故。酷い。嫌い。悲しい。そんなような闇の感情が。

助けたい。多分、今までで一番心からそう思ったかも。

大切な、大好きな、人だから。

誠司が私の幸せを願ってくれたように、私も彼の幸せを願いたい。正しい形で。

人を傷つける誠司じゃない、人を守る誠司を。

助けたい。私で…私たちで…！

再び私は結晶に触れる。誠司…待ってて…！

――ここは、さっきの…。

アンラブリーが私に囁きかけたところだ。もう今はアンラブリーはおらず、代わりに目の前に誠司が立っていた。
「それが、お前の答えか？」
「うん」
「はっ、戯れ言ばっかぬかしやがって。まぁ約束は約束だ。この扉を開けてやる。助けれるもんなら助けてみろ」
「ありがと！助けてみせるよ、絶対！――ねぇ誠司」
「？なんだ？」
「誠司はやっぱり誠司だね」
ラブリーはそう言うと笑顔で、しかし真剣な表情で扉をくぐっていった。
「――は…」
彼女の言葉に思わずため息をついて、壁にもたれながらへなへなと倒れこんだ。

☆

「――ぐみ？」
「―おい、めぐみ？」

「――あれ？誠司？どうしたの？」
「どうしたはこっちの台詞だ。何ぼーっとしてるんだよ？次、移動だぞ？」
「う、うん…。なんかね、怖い夢を、ずっと見てた気がしたの…」
「怖い、夢？」
「誠司が、苦しんでいなくなっちゃった夢」
「なんだそれ」
「さぁ…？もう忘れちゃった」
幼なじみの穏やかな顔。いつも通りの日常。
閉めた窓から冷気が伝わってきて身震いする。寒い…。
――あれ？気のせいかな…？
なんか妙な違和感を感じるけれど、それがどうしてなのかも何に感じているのかも分からないのでスルー。

「――――ふぅ、やっと終わったぁぁ！」
最後のチャイムが下校を告げてくれたところだ。
「めぐみー、帰るぞー」
「オッス！」

「あ、大森は今日は手伝い忙しいから先帰るってさ」
　私は急いで鞄を準備して誠司と並んで帰路を歩きだす。
「そっか。あれ？今日って何日？」
「嘘だろ…お前に限ってそんな事あるかよ…!?てか一時間目、何やってたんだよ」
　一時間目？あれ、確か、眠っちゃってたっけ？目が覚めたのは二時間目の大きな放課のときだったし…。
「――クリスマス、だぞ」
「ふーん、クリ――――くくくクリスマス!?」
「めぐみ…もしかしてずっと寝てたのかよ!?一時間目、みんなでクリスマスパーティーするためにわざわざ冬休みなのに先生が出校日にしてくれただろーが」
「そっ、そうだっけ？」
　全然覚えてなかったけど、言われてみればそんなような気がするような…？
「はぁ…じゃあ、今日の放課後のことも…覚えてないのか？」
　誠司が少し瞳を潤し気味に、私のことを見つめてきた。――頬を赤らませながら。
「…ごめん…最近忘れっぽくて…」
　分からないのに分かったふうにするよりは、と素直に忘れてしまったことを伝えた。
　クリスマスかぁ。ゆうゆうの家のチキン配りの手伝い？それとも誠司の家と合同で

パーティーとかかなぁ？
「……俺と……その…えっと…」
「……？」
「……っ！で、デート…みたいな…」
「…デデデデート!?……わ、分かった！な何時にどどこで待ち合わせ？」
「俺より焦ってどうすんだよ。５時にぴかりが丘クリスマスツリーで待ち合わせな」
「うん！じゃあまた後で！」
「おう！」
あっという間に家に到着。
玄関のドアに鍵を閉めたとたんに、わっと身体が熱くなってきた。なのに、私はマフラーとか制服とか着たままベッドに横になった。少し大きめの枕を胸に強く抱きしめる。
デート…デート…誠司と…デート…!?
突然の幼なじみからのデートのお誘い。
いや、実際は以前から誘ってもらってたみたいだけど…。
どうせ買い物に付き合え的なやつなんだろうけど、やっぱりデートとか言われると…何か胸がかーっと熱くなって心臓がばくばくしちゃう。

そうだ！せっかく誘ってくれたんだからクリスマスだしプレゼントとかしようかな！

「お母さーん！毛糸ってどこに仕舞ってたっけ？」

☆☆

「やべぇ、まじで誘っちまったぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「お兄ちゃん、うるさーい」

「あ、ごめん」

「あー！お兄ちゃんめぐみちゃんのこと誘えたのねー！良かった良かった～！ふふっ」

「んなっ!?」

玄関の鍵を閉めるなりついに叫んでしまった。

真央がにやにやしながら、お兄ちゃんが変なときはめぐみちゃんのこと考えてるときだけだからねー、とからかってくる。むむー。我が妹よ…いつからそんな子に…!?

二人で、デート……！

デート、返事待ちだったから、一応約束してたってことにしてもいいよな？サンタさん。

何かプレゼントでも買っておこうかな…。あ、そうだ！この前雑貨屋で見た、あれにしよう！

「ちょっと出かけてくるー！」
「えっ、ちょ、お兄ちゃん!?…行っちゃった…。もう、早く付き合っちゃえばいいのにー」
浮かれぎみに玄関を出る…が、冷気にあてられたからなのか、いつの間にか頭は冷静になっていた。
どうか、このまま…。
めぐみがあいつらのことを、プリキュアのことを、ブルーのことを、思い出すことなく普通に幸せに暮らしてくれるといいな…。
今のところは順調。クリスマスというのすら忘れるくらいにあいつらのことを忘れている。元から学校にいるいおな、幼なじみのゆうこはそのままいる設定だが、彼女らはあくまでゲームでいうＮＰＣになっている。
自ら行動は起こさない。

この世界には、俺と、めぐみだけ。
プリキュアもいない。
幻影帝国もいない。
ブルーもミラージュもレッドも妖精もいない。
ハピネスチャージプリキュアは、いないんだ。

――めぐみ、この世界で、二人で暮らそう…？

明日も、一緒に。

――運命の刻。
「誠司〜！お待たせっ」
「俺も今来たところ。めぐみ、どこ行きたい？」
「え？いいの!?えっとね…」
めぐみの嬉しそうな顔を見て、ホッとする。
最近見ていなかった、心の底からの笑顔。
めぐみが、笑ってくれた。
それが何よりも嬉しかった。それだけでもう充分だと思えるほどに尊かった。
そして、めぐみの好きなところ、行きたいところを巡る。スケートとか買い物とか、イルミネーション見たりとか。ほんとに、デート…みたいだ。
「次はあの観覧車乗らないか？」
「おーっ、いいねー！久しぶりに乗ろう！」

七色に変化し続ける観覧車からはぴかりが丘の夜景を一望できた。すげー。再現度高い。

「――ねぇ、誠司」

「今日は、ほんとありがとね」

「…こちらこそ」

「――――一つ、聞きたいことがあるんだけど、いい？」

「ん、何だ？」

「……やっぱ、いいや。何でもない。それより、今日は誠司にプレゼントがありますっ！はい、これ！」

めぐみは紙袋を差し出してくる。これはもしかして…。

可愛らしいシールを丁寧に剥がして中を確認。

……手編みのマフラーだ。とっても長い。

「誠司のこと考えてたら、いつの間にか長くなっちゃった。まあ今年のことあんまり思い出せなくって、ずっと思いだそうとしてたってのもあるんだけどね。何でだろう。ここ一年くらいの記憶が全然無いんだよねー。不思議なこともあるもんだよね。…あ、そのマフラー、使いずらいだろうし使いたくなかったら使わなくても別にいいからね？捨てたりはしないでよぉっ!?」

「誰が捨てるかっつの！ありがとな！んじゃ、俺からもプレゼント」
そう言って俺は行く前に買ってきた小さな木箱を取り出す。
「おっ、これオルゴール？すっごい可愛い！綺麗…！ありがと、誠司！」
めぐみは嬉しそうにネジを回し、箱をあける。オルゴールの音が時間とともにゆるやかに流れる。瞼を閉じて耳を澄ませているめぐみを見て、あぁ好きだなぁとまた思う。
めぐみの笑顔が俺の心を照らしてくれる。
めぐみの声が俺の心を癒してくれる。
めぐみの優しさが俺に希望をくれる。
めぐみの瞳が俺に輝きを見せてくれる。
めぐみの仕草が。めぐみの性格が。めぐみの全てが。
好きだ。大好きだ。溢れるほどに。
エゴかもしれないが、俺を、俺だけを見てほしい。
みんなの相楽誠司じゃなく、めぐみの相楽誠司になりたい。
まあこの世界に他のやつなんていないんだけど。
とはいえ、やはりいつか言うべきだろうか。
気持ちを伝えるべきなのだろうか。
でも、怖いのだ。この関係が壊れてしまいそうで。

幼なじみじゃなくなるとこの関係はどうなるのかと。
いつも一歩が踏み出せない。
……もう少しこのままでもいい、かな…？

観覧車を降りて、俺は先ほどもらったマフラーを巻いてみる。あったけ～。ふわりと優しい感触が首を撫でてじっくりあたためていく。
その後、クリスマスツリーで記念写真を撮ってから帰宅（めぐみの作った長めのマフラーを二人で巻いて撮ったのだが…これはかなりはずかしかった…）。
ひぇーっ。力が抜けてしまいそうだったけど踏ん張って、ＮＰＣの妹とご飯を食べた。
街そのものをコピーした（ファントムが使ってた陰を纏う技の応用）ので全く不自由なことはない。人々も、人格が全部プログラミングされており、仕事をし、家庭を持つものもいる、ぴかりが丘の完璧な複製。
ただ、誰も何も起こさなかった。明日になっても人々は今日と全く同じことをするだろう。リセットされたかのようにまた同じ時をたどっていく。とはいえ、クリスマスというかなり特別な日のため、流石に何日も同じクリスマスが続くと変なので、俺の権限で日付を更新していくとしよう。勝手に対応してくれるだろう。

さ、明日も学校だ。昨日はクリパだったが、結局学級閉鎖のときのやつが尾を引いて一週間登校日になったんだったっけか。
明日も無事気づかないでくれよ…。

☆☆☆

今日も学校かぁ～。
まさか冬休みが一週間削れちゃうなんてぇぇぇぇぇっ！んもうっ！
何かモヤモヤするし！朝から何なんだろう？
いや、正しくは昨日のクリスマスツリーのときからだ。
あの、大きくて派手に装飾されたツリーを見たとき、確かに胸がぎゅってなって、頭がガンガンと痛んだ。
不思議なことばっかだよーっ！分かんないよー！
そんな混乱した気持ちのまま学校へ。
「おはよう、めぐみちゃん」
「おはよっ、ゆうゆう！昨日はお店、どうだった？」
「うん。楽しかった。また、良かったよ。けれど、大変だった。ご飯は美味しかった！」
「？そっ…そっか…」

なんか、ゆうゆうも話し方変わった？
国語全然出来ない私が言うのもなんだけど、なんか日本語がちゃんとした文章にまとまってない…。というか、最後のご飯美味しかった！ってどこからきたの!?
お店の手伝いの途中でご飯食べてたの!?クリスマスチキンを例年通りに売ってたとてっきり思ってたんたけど…。
「あっ、誠司だ！」
「オッス、めぐみ！今日は大森も一緒か」
「うん。何か今日のゆうゆう変なの！」
「何言ってるの、めぐみちゃん。私のどこがおかしいの？そして私は今日もいつも通りだよ。ご飯も美味しいし」
「確かに変だな…」
「でしょ!?」
「まぁ話せてるしいいんじゃねぇか？てか学校遅れるぞ」
「う、うん」
？誠司もちょっと様子がおかしい？気にしすぎかな？
いつもの誠司ならゆうゆうがおかしい原因があるはず、ってちゃんと調べたりしそうだと思ったけど…。

慌てて、小走りに進んでいく誠司を追いかけつつ学校へ向かう。

＊

大森ＮＰＣの言動がおかしい…。完璧なはずなのに…。

やはりホンモノじゃないと駄目か…。ハピプリメンバーならこの世界に来てもらうのは大歓迎だが現実世界の彼女らが結晶世界に来ようとしてくれないので俺には何も出来ない。人工知能ってのはやっぱ不便だな。

＊

☆

学校へ行き、学校を終え、家に帰り、時々誠司たちと一緒にご飯を食べる。

そんな普通の日が何日か続いた。

何か事件が起こったりとかはなかったけど、変な感じがずっと胸から取り去れないまま過ぎていった。

☆

――そういえばもうすぐお正月だ！

せっかくだからお母さんたちにお守りでも買ってこようかな！

「ちょっと出かけてくる！」

私は足早に神社へ向かう。寒ーいっ！

ぴかりが丘神社って何のご利益だったっけ？
分かんないけど、ご利益って言うからには良いやつだよね！
神社に到着――――ッ!?
「これ…これって…！」
激しい頭痛と共に鮮明に映像が浮かび上がる。
青い髪の少女が鈴を振る姿。
水色の髪の男性がそれを見て微笑む姿。
水色の髪の少女が鈴を振り、舞いをする姿。
赤い髪に水色の瞳をもつ青年が私と戦う姿。
他にも、たくさん。
忘れていたものが、忘れさられていたものが、溢れてくる。ゆうゆうと、いおなちゃんと、誠司と、――そしてひめがいる日々。本当の日々。現実。
――――忘れちゃいけなかった大事なこと。
ここから、脱け出さなきゃ。
……誠司！
「そうだ…そうだよ…私は…キュアラブリーなんだ…プリキュアなんだ…みんなを助けなきゃ！みんなを……誠司を！」

はぁっ、はぁっ、と息をきらしながら全力で走る。
急がなきゃいけないきがしたから。
ここは、多分結晶の中だ。偽物の世界だ。
だからおかしかったんだ。ゆうゆうの様子も。
あの大きなクリスマスツリーを見たときとこの神社に来たときの胸のざわめきも、全部、ハピネスチャージプリキュアとして思い出の詰まった場所だ。
五人で過ごすはずだったクリスマス。ぴかりが丘の名物スポットの巨大クリスマスツリー。
ファントムと戦ったこの神社。
ひめが舞いを踊り、アクシアをシャイニングメイクドレッサーにした神社。
そして――ブルーとミラージュが会ったところ。
たくさんの想いが詰まってた。
なんで忘れてたんだろう。こんなに大切なこと。
誠司の家のドアの前で深呼吸する。膝が笑ってる。手の震えが止まらない。意を決してチャイムを押そうと手を伸ばしたその時。
「めぐみ…なんで思い通りにならないんだよ。なんで幸せなままでいようとしないんだよ。このまま気づかなければ一緒にいられたのに。苦しまずに生きていけたのに…っ

！」

ドアが、開いた。誠司がその隙間から私を見つめる。

戸惑いが顔に浮かんでいて、歯を食いしばっているのがわかった。低く、押し殺すみたいな声で、続けた。

「いつもお前はそうやって！誰かのためにって！自分のことを考えずに人助けばっかで！誰にも助けを求めずに突っ走って、自分を大切にしないんだ！自分の気持ちを押さえて！だから、そんな危なっかしいお前を守りたいって思ったのに俺はまだお前に守られてばっかだ！」

涙ぐみながら誠司が叫ぶ。

「命にかえても守りたいっていう決意も、言葉だけの戯れ言になって！

自分の無力さに絶望して！

結晶の力を借りてでも、どんな手段を使ってでもめぐみを幸せにしたいって思って！

周りの邪魔な奴は削除して！戦場になったこの街を捨てて新しい、理想の世界で暮らそうって！

他の奴なんてどうだっていい！それぞれの想いも、それぞれが存在する意味も、俺には知ったことか！

めぐみさえいれば、それでいいんだよ！

いや、これはもう…めぐみのためとか言って理由作ってるだけだ…。本当は俺は…っ」

「――いいよ、全部、言って?」

「俺は…俺は…っ!お前が好きだ!お前が、愛乃めぐみが大好きだ!お前は俺のことをそうは思ってないだろうけど!俺は、幼なじみとして、友達としてっていう以上に、お前が異性として大好きだ!ずっと前から好きだ!ブルーなんていなければよかった!あいつがいなければプリキュアも幻影帝国もなかった!めぐみがあいつに恋することも、失恋することもなかった。プリキュアにだってなってほしくなかった!俺はお前を守りたいって、そう思ったから空手もずっと続けてこれたのに!でも凡人の俺には何も出来なかった!女の子よりも弱かった!チョイアークくらいしか相手に出来ないほどに!力が欲しかった!こんなに努力したのに、なんで敵わないのか分からなかった!悔しかった!格好よくて優しいとこもすっげー好きだけど、男の俺がめぐみに守られるのは辛かった!努力は、無駄だったんだよ。努力なんてひたところで何も変わらない。力も、関係も!結果が出ないなら努力とは言わないとか、結果が全てじゃないとか、そんな矛盾した言葉でさらに訳がわからなくなった。めぐみが幸せになるという結果を求めた。求め続けてずっと努力してきたつもりだったのにそれを否定された気がした!結局俺はめぐみの為じゃなく自分のために努力してただけだった!めぐみのためにと

頑張ってる自分に酔ってただけだったんだよ…！そんなの自分でも分かってる。俺はどんなに最低で最悪な人間で、自己中で、承認欲求の強いやつなんだよ！…なぁ、言ってただろ、元の誠司に戻って、って。俺はもともとこういうやつだ。必死に隠して包んできた、俺の本性がこれだ。失望しろよ。愛なんて微塵もないんだよ。自分の望みの望むまま、欲望のまま動くだけだ。……俺はここでめぐみと暮らしたいんだ！誰も他にいないこの世界で！二人でずっと暮らしたい！ブルーとミラージュのいないこの世界で！邪魔者なんて絶対こないんだ。理想の世界なんだ。思うがままに設定できるんだ。欲しいものも全部手に入れられるんだ。めぐみ、俺を、選んでくれ…」

「…確かに、この世界にはブルーはいなくて。私が失恋することも、ミラージュが失恋することもなくて。幻影帝国もいなくて。私が戦わなくても世界は平和。平和は良いこと。分かってる。確かにそれが理想かも。傷つかずに楽しいことだけあって。でも、やっぱり、ここでは暮らせないよ」

精一杯の思いをぶつけてくれた誠司に、私も懸命に言葉を紡いでいく。この箱庭に想いの音色を編んで。

「……な、んで…？…じゃあ、ひめとか大森とか氷川とかも連れてこよう。それなら――」

「ううん。そうじゃないよ。私は本当の世界が好きなの。我が儘だけど、私はこの平和

な世界じゃなくて元の世界の方が好きなの。苦しむ人だってたくさんでてきちゃうだろうけど、それぞれの想いがぶつかり合う世界が好き。ロボットみたいな世界じゃなくて。辛いことも、苦しいことも、悲しいこともあるけど、乗り越えたい。楽しいことも、嬉しいこともシェアしたい。みんなが幸せハピネスになることが一番私も嬉しいよ。だけど、この作られた世界には本当の幸せハピネスはない。誰かが幸せになれば誰かが不幸になるかも。それがあの現実の世界。不条理で、矛盾してばっかで息苦しい世界。

　みんな心に鏡を持ってる。楽しいことがあると不安なこともある。真逆なこと、思い通りにならないこと、たくさんある。特に心は、誰の思い通りにもならないよ。微妙に違うキモチの一つ一つでだんだん世界は変わっていくから。笑い飛ばして前向きに生きていけたらいいな。だけど、どうしようも無くなるときもある。誠司もそう。勿論私だって。自暴自棄になったり、過去の後悔が走馬灯みたいに駆け巡ったりして永遠に抜け出せなくなることが。ひとりじゃ無理かも。二人でも。けど、みんなでお互いがお互いを支え合って明日に踏み出したい。それにね？誠司は確かに、街を壊したり、襲ったり、ブルーに切りかかっちゃったり、悪いこともしちゃったけど、私は信じてるよ。あのとき、ブルーを斬るのを躊躇った誠司を。私達を守ってきてくれた今までの誠司も。

　誠司の幸せを否定したい訳じゃないけど、やっぱり、人を傷つけるのは駄目だよ。そこはちゃんと言っとく。迷惑とかかけるくらいなら全然良いんだけどね！むしろ、もっ

と相談してほしいな。頼ってほしい。抱え込まなくていいよ。伝えてほしい。
自分のこと大切にするの、当たり前だよ。
誰でもきっとそういうことはあるし、そういうもんなんだよ。褒められたいとか幸せになりたいとか、願って何が悪いの？責められる必要なんてない。
でもそんな自分の欲望の中で誰かのためを想って行動できる、そんな誠司が大好きだよ。
あとね、全部楽しかったら、もう楽しいことじゃなくなっちゃうと思わない？……うーん、上手く伝えられてない気がするけど…」
私は大きく息を吸って、うつむきがちの誠司の目を覗きこんで言った。
「苦しいことも、楽しいことも、分かち合いたい！幼なじみで、ずっと兄弟みたいなもんだったから…その……誠司をどう見ればいいか分からないけど…。……でも……デデデデ、デート、すっごく嬉しかったよ。誠司と久しぶりにいっぱい話せたし。……ちょっとそれちゃったけど、まとめると…。誠司と一緒に生きていきたいってこと！」
「……どうしたらそうなるんだよ。……ったく、まいったな」
誠司が、僅かにしか開けていなかったドアを思い切り開いて、困ったような顔で笑っ

た。

私は、誠司に手を伸ばす。

「誠司、みんなのところ、戻ろう?」

あ、と思い出してポケットから手紙を差し出す。

「みんな、信じてるし、待ってるから」

それは、誠司のお母さんからの手紙。

誠司はその小さなメモを読んで、潤んだ瞳をパーカーで拭った。

「でも俺……」

「大丈夫。もうやっちゃったことは仕方ないじゃん。開き直りすぎとか言われるかもだけど…ま、ちゃんと謝れば!」

「本当に、いい、のか…?」

大きく頷く。

誠司が手を伸ばし、私の手をとる。

その瞬間、ニセモノの世界はまるで鏡が割れるみたいにパリン、パキパキ、と音をたてて崩れていく。

＊

崩壊していく世界を眺める。なんかもう、もやもやしていた心は吹っ切れてしまった

気がする。
やっぱりめぐみには敵わないなぁ。
いつも俺を引っ張ってってくれる。
対等な関係でいたい。
俺がやらなきゃとか考えるのはもうやめよう。
あいつがこれをしたらどう思うのかとかちゃんともっと考えよう。力に溺れることなく。
男女の関係になるのはもっと先かもしれないし、ならないままかもしれない。そこは俺にも分からないが、時の流れにまかせてみるとしよう。
☆☆☆
まずい。非常にまずい。
レッド達は一時休戦をしているのだが…。
なんかヤバそうだ。結晶が輝き始めてる。
それも、赤い憎しみの光ではなく、白く輝く光。
結晶が、浄化される…！
上手くいったと思ったんだがな…。
どうする…どうする!?

全く思い付かん。普通に、戦うしかないか。
今のうちに三人を片付けておけば、ラブリーが戻り万が一誠司と共に戦うということになったとしてもまだ相手しやすそうだ。
「おい、プリキュア。休憩は終了だ」
「「!?」」
レッドは勢いよく床を蹴り、プリンセス達を攻撃する。
不意討ちには流石に対応しきれていないようだ。
とはいえ、なんか想像以上の力だ。恐らくあれだ、仲間とためなら頑張れる!とか、みんなが応援してくれているから!とかいう類いの綺麗事パワーだ。
憎い。
俺の星は地球のように綺麗じゃないのに。
俺の星は地球のような民はいないのに。
俺のことを信じてくれた人はもう殺されてしまったのに。
滅茶苦茶にしてやりたい。
ブルーもミラージュもプリキュアもその他の人々も豊かな自然も動物たちも街も全部、俺もろとも滅ぼしてやる。
「……つぐ?」

「もう諦めろ。お前達の星は滅びる。内部から腐っていくようにしてある。残り時間などほぼ無いぞ」
「地球が、内部から…？」
突如告げられた無慈悲な現実に、思わずそんなことを呟くプリキュア。
「レッド…それでも私は…ラブリーを！誠司を！信じているから！負けない…絶対諦めたりなんて、しない！友達、だもん！」
「ほざけ」
会話を交わしながらも尚戦闘を続ける。
「……レッド。私はあなたを許さない。たくさんの人々を巻き込んで、傷つけて、大切な時間を奪ったあなたを許さない！私はそんなに優しくない。ラブリー達は甘いことを言うかもしれないけど…。きっと世界中が、世界中のあなたに傷つけられた人々が、あなたを恨むでしょうね」
「フォーチュン…？」
「許さない…許さないけど……助けたいの…。なんかラブリーがうつっちゃったみたい。…ねぇ、苦しいでしょう？人を憎み続けているのも、一人でいるのも。嫌い嫌いって思ってる人も、その人のことを知れば案外いい人かもしれないじゃない」
フォーチュンはプリンセスに笑いかける。

「…黙れ…お前達に何が分かる！体験したこともないだろう？幸せに普通に暮らしてきたお前達が…！その人のことを知れば案外いい人かも、だと？そんな都合の良いこと、ある方が少ない！幸せは一瞬、愛は幻だ！弱肉強食のこの世では到底不可能だ。ただの理想にすぎん」

「理想…そうよ」

フォーチュンに変わってハニーが言葉を放つ。

「みんなが幸せ。みんなが楽しくご飯を食べれる世界…平和な世界…それを望んで何が悪いの？誰もが幸せを求めるものよ。欲望や目標がないと誰も成長できないわ。

愛は幻なんかじゃない。愛は見えなくても、確かにそこにあるの。愛の力は強すぎて、時には人を傷つけたりしてしまうこともあるかもしれないけど、でも幸せにすることも、幸せになることもできる諸刃の剣なのよ」

「だからなんだというのだ。そんなもの、完全な剣になる前に消し去ってしまえば誰も哀しむ必要はなくなる」

「レッドさん、本当はすっごく優しいんだね」

「は……？」

「ちゃんと、皆のこと心配してるもの。でもね、皆そんなにか弱くなんてないのよ？苦しいことだって乗り越えるの」

「……そうだよ！レッド！」
「「ラブリー！誠司！・相楽くん！・」」
「わりぃ、待たせちまったな」
「相楽誠司…」
　やつの胸元の結晶は消滅していた。
　先に片付けておく作戦は失敗のようだ。
「なぁレッド…。俺はお前の苦しみをちょっとは知ってる。お前がもともといいやつだってことも、星を壊された恨みも、大切なやつを目の前で失った辛さも。それに、本当は気づいてるはずだ。……地球に同じことをすればまた同じ運命を辿るやつが増えるだけだってことを」
「もう一度、愛を信じて…。幸せになることを、諦めないで！みんな！お願い！力を貸して！」
「プリンセス！蒼き風！」
「ハニー！大地の光！」
「フォーチュン！希望の星！」
「ラブリー！ビッグな愛！」
「「「愛と勇気と命と星を聖なる力に！ラブプリブレス！プリキュア！フォーエバー

ハッピーレイン！」」」

「新しい必殺技か…プリキュア！頑張れー！」

「僕も手伝おう。世界のみんな、再びプリキュアに力を貸してくれ！」

ブルーが鏡で世界中を中継し、ドール王国のときと同じように、ライトを振るように促す。

頑張れ、という声が聞こえてくる。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

あたたかい光が俺を包む。

「……愛はやがて消え失せる。永遠なんてない」

「だからこそ、いとおしいんだよ。私ね、愛って無限にあると思うの。辞書とかに載ってる意味だけじゃなくて、たっくさんのことを含んでる。みんなで暮らすことも、誰かを守りたいって想うことも、一緒にご飯を食べることも、誰かを信じることも、幸せもみんなきっと愛なんじゃないかな。だからね、レッドも自分の幸せ、ちゃんと見つけてほしい。辛くなったら、私達でもブルーでもミラージュさんにでも相談しにきていいから、ね？」

「――俺は……ただ地球が羨ましかっただけなのかもしれない。俺の星、惑星レッドは荒れ果て、民もみんなサイアークになってしまったから…」

「レッドさん！見て、あなたが星を想う力が、私達のレインと共鳴して、奇跡が起きたみたい」
ハニーが鏡を通して惑星レッドに目を向けるようレッドに促す。
「……！」
惑星レッドは、星こそ未だに枯れたままだが、徘徊していたサイアークの姿などなく、そこにはえ？と戸惑っている大勢の民の姿があった。
先のフォーエバーハッピーレインによりサイアークが浄化されたのだ。
「……感謝、する…。本当に…っ！」
泣き崩れるレッドに微笑み返す。
「…レッドは、これからどうするの？」
「星を、復興しようと思う」
「兄さんなら、できますよ。できるときは僕達も手伝いますから」
「ブルー……すまない」
☆☆☆
あの最後の戦いからちょっと経って。
私達は新学期の学校へ。ひめもまだぴかりが丘に残るみたい。
ブルーには、救ってくれたお礼として愛の結晶を貰いました。

とっても綺麗なビー玉みたいなやつ。
大切な人に渡そうかな。
誠司も私と同じみたい。
ひめはぶん投げてお友達をつくるんだって！
最初はあんなに人と喋るの苦手だったのにぃ…ちょっと感激。
今は、壊れた街もハッピーレインで元に戻って、みんな普通の生活に戻りました。
ファンファンはゆうゆうと同棲して大森ごはんで働いています。腕前も結構いいの！美味しかった…。
いおなちゃんは冬休みにお姉ちゃんに会いに行ったんだって！元気そうだったようでなにより！
三幹部の人たちも普通にお仕事してて、増子さんに日々追いかけられてます。増子さん、やめてあげてぇぇ！また注意しとこう…。
あと、たまに歩いているとつむぎちゃんとすれ違います。この前はつむぎちゃんのバレエの発表会もみんなで見に行ってきたの！凄い綺麗だった！
そして、私にとってかなりの出来事。
私のお母さんの病気をお父さんに教えて貰いました。
お母さんは身体が弱いから、長いこと付き合っていかなきゃいけないけど、そんなに

重い病気じゃないみたい。サポートさえあれば普通に暮らしていけるんだって。
なかなかお父さん教えてくれなかったから今までで一番何度も頼みこんだよ～。
ブルーとミラージュさんは時々レッドの星で復興をお手伝いしに行ってるみたい。
レッドとミラージュさんと誠司と幹部とファンファンとかの人達はやはり自責の念を感じてるみたいで、積極的にボランティア活動をしてる。
マダムモメールさんもボランティアで海岸をお掃除してるとか。
「おはよめぐみ！ん、何か考えごとかー？」
誠司もなんかちょっと変わった、かな。
前よりグイグイくるかんじ？嬉しい限り。
「ううん、何でもない！いろいろあったなーって」
「だよねーっ！濃い一年でしたぞ」
「私も楽しかった」
「わ、私も…そのひめが帰らなくて本当に嬉しい――って何よ!?」
「へへん、いおな、デレちゃってぇぇぇ！可愛いんだからっ！」
えーっ？とか言いながらひめといおながはしゃぐ。
「私、本当に良かった！みんなと出会えて、プリキュアやれて！幸せを、ありがとう！」
「めぐみ、今のお気持ちはぁぁぁ？」

「幸せハピネス！」

深淵ルート
絶望さんを、ご招待

《クリスマスイブ前日３：３０》

ガチャ。

久しぶりに帰ってくる我が家に安堵する。

明日はせっかくのクリスマスイブだから何かプレゼントでも買ってこようかなーとか考えながらビールを取り出す。ソファに腰かける前に、息子と娘の愛しい寝顔でも見ておいて損はないだろう、と二人の寝室をのぞく。

真央は相変わらず可愛いなぁっ！

続いて誠司の部屋へ。

もう、顔まで布団被っちゃって！息が苦しくなるぞ！

ひろ子は静かにベッドに忍び寄り、そっと布団をめくる……と。

誰もいなかった。

そこには、いるはずの誠司がいなかった。

おかしい。一体何処へ!?
もしめぐみちゃんの家に行っているなら、普通置き手紙くらいするはずだし、第一、小学校高学年くらいからお泊まりなんてしていない…。
昼間から行方不明なんだとしたら私に連絡があるはず。それに、真央も気づく恐れがある。
手がかりが何もない。
メモ一つ、ｌｉｎｎｅ一つ無い。
夜遊びなんて怪しいことはしていないと信じるけど。
考えられるのは、夜中に一人で出掛けたってことだ。
だとしても、何故？謎は深まるばかりだった。
無断で誰かの家に行ったり、街をふらついたりなんて今まで無かったし。だいたいいつも書き置きしてあるのに…。何があったんだ…!?
申し訳ないけど、緊急事態なので急いで真央を起こす。
「んー、あ、お母さんおはよう～もう朝――じゃないね」
「真央、誠司見てない？」
「え？お兄ちゃんなら私が寝る前に寝ちゃってたよ？……いないの!?」

「ええ、どこ行っちゃったのかしら、あの子…」
でもこんな夜中なので誰かに連絡出来る気がしない…。
どうすれば……――――――ッ!?
グサッ。
物騒な音と共に、私はバタリと倒れる。
続いて真央も。
背後から何かに刺さ…れた？
意識が、遠退いていく。
☆
自分の親と、妹を刺してしまった。
いくら殺傷性はないとはいっても、流石に実の家族を相手にするとなると戸惑う。
今俺が刺したのは記憶を消す結晶だ。
誰か知らないが、ついさっき朝を待つべく星を見上げていたら、突然とある少女がやって来て、
「はい！そこの君！プレゼント！貰ってよ！貰ってくれないと困るの！お願い！これはね、記憶を司る結晶なの！怪しい商品じゃないから！無料だし！手持ちが今二個しかなくて！しかも血族しか使えないというワケアリの使えないというワケアリの限定品だ

よ！ぜひっ！いや、絶対もらってえええええええええ！」

と押し付けられたものだ。

一体何だったのだろうか…。変なやつだった。確か後ろにもう一人男の子がいた気がしたが…気のせいだろうか。

丁度二個だったので、俺、相楽誠司に関する記憶を全て消させてもらった。

変に事を荒立たせる訳にはいかなかった。

ブルーたちと戦う前に大捜索とかされたらたまったもんじゃないし、この二人から記憶を消しておけば恐らく他の人が気づいたとしてもなかなか通報などは出来ないだろう。いろいろ怪しいが、なんかあいつらはただの一般人ではない気がしたのでレッドとかと同業者なのかもしれない。あんなうるさい同業者がいたらたまったもんではないが。

☆

《クリスマスイブ前日７：１０―廃家屋―》

めぐみ（眠ってる）、誠司、レッドは、ボロボロの廃家屋に来ていた。

「当分はここで生活することになる。お前は掃除でもしとけ。小娘はどっか適当に」

「……適当…」

誠司はささっと埃を払い、コートを敷き、めぐみを寝かせてからパーカーを被せた。

「さて、これからどうするかなー」
「お前がクイーンミラージュの代わりとして幻影帝国を復活させればいいだろう」
「あー。……あ。その手があったか」
「ま、当分は力のコントロールをつかまないといかんから、新しく幹部の勧誘とかしてきたらどうだ？」
「……そうだな」
誠司は頷き、レッドに鏡である場所に転移させてもらった。そこは、プリキュア墓場。未だに放置され、ファントムやミラージュが浄化されたのにも関わらず、多くの者は解放されていない。
それはある事を示唆していた。
――幻影帝国の残党だ。
本来、ファンファンになった時点で闇の力を失ったファントムの拘束からは解除されるはずだった。
だが、鏡に写した最悪の未来をプリキュアに見続けさせ、閉じ込めたままにしている別の人物がいる。
ミラージュが浄化されても尚、世界をうらみ続けるやつが。それらしき影を発見し、声をかけてみる。

「俺はお前を知っているが……お前は多分覚えてないだろうな」
「お前…どこかで見たことがあるような…まさか、あのとき私を消したやつらの…！」
「俺は相楽誠司。今はプリキュアとは敵同士だ。ま、一応あのとき俺はお前の消滅を応援してたわけだが今は違う。そして、今のお前はあのときとは違うはずだと思って会いに来た。人型になってるのにはかなりびっくりしているが…

――ブラックファングだな？俺と共に、世界を滅ぼしてみないか？」

炎の組織、活動開始。

「めぐみ…っ！誠司…っ！わっけわかんないよぉっ！」
ひめがうつ向いて涙をこぼす。
ゆうこはそれをなだめようとしたが、
「あんな誠司、初めて見た…。でも辛そうだった…私、やっぱり、誠司を助けたいよ…勿論めぐみも…！もっと、強くならなきゃ！」
とひめが言ったので、なんだ、自分の方が弱気になってたんだ…と思い、決意新たに。
「ひめちゃん！そうよね！ひめちゃんの言うとおりよね！」
急いで自分を奮い立たせる。
でも、やっぱり不安は消えなかった。
「でもまずはやっぱりめぐみを取り返すところよね…。相楽くんはかなり深い傷、って感じだわ」
「僕…もそれがいいと思…うよ…がはっ…ごめんみんな…最低でも今日は動けなさそうだ…とりあえず…君たちは家に帰ってご家族を安心させてくれ」
はい、と頷く一同。

――澄んだ空に朝の鳥の声が虚しく響き渡った。

☆☆☆

「――世界を滅ぼす、だと? 何故この私が元プリキュアの仲間だったやつと手を組まなきゃならないんだ?」

影が言う。

「目的は同じなんだからよ…頼むって」

誠司は影を見据え、尖った視線を送る。

「……ふん。納得はしてないが、おもしろい。協力してやろう」

「そりゃよかった」

笑みを浮かべる誠司を見て、ブラックファングは気味が悪い奴、理解出来ないやつだ、と思った。世界を滅ぼす、ということは、今までプリキュアと共にやってきたことの真逆の立場になるということであり、人々も土地も文化も時間も、ありとあらゆる存在を壊すことであるというのに。この少年は微笑みながらそれを語った。

そして、油断一つ許さぬような目で。

一体この数ヶ月の間に一体何があったのだろうか。いや、そんなすぐできた軽い理由ではないかもしれない。もっと前から蓄積されていた心の隙間、だな。ディープミラーとミラージュのときと同じく。とはいえ、クイーンミラージュよりもこの少年のほう

が、憎しみが強そうだ。絶望の良い匂いがする。人間というのはつくづく恐ろしい生き物だな。

「それで、まず私はどうすればいいのだ？」

「ブルーやファントム、ミラージュや世界を恨んでいるプリキュアを解放して、闇の力を与え、世界に放ちたい」

「ほう。いいだろう。だが期待しないほうがいいぞ。プリキュアというのは心が綺麗な奴等だからな。誰かを恨むことなんてほとんど無いだろうし、いたとしてもほとんどが幻影帝国を恨んでる。幻影帝国に似た立場である俺らの側につくやつなんているのかねぇ？」

「いるさ。だってプリキュアの中身は――――ただの人間だからな」

半信半疑のまま、ブラックファングは、鏡に無理やり閉じ込めておくための絶望の糸から、それぞれのプリキュアの情報を収集、処理する。

特に思いの強いやつが数人いたので、糸をほどき鏡の檻から解放した。

全部で四人。

「やっぱり仲間なんて割れ物だったんだ」

と下を向いて拳を握りしめる少女。

「何で私がみんなを守らなきゃいけない使命をあたえられたんですかねぇ？大間違いで

すよぉ！」

と、あははっと笑い狂ってる少女。

「騒がしいです…」

と鬱陶しげに周りに視線を送る少女。

「んー、眠いー、寝たいー疲れたー」

と目をこすっている少女。

かなりの個性派ぞろい。しかもこのプリキュア墓場に残っている者の中でも最も強い四人が偶然選ばれたようだ。いや、偶然じゃないのかもしれない。想いの力ってやつか。

私はもともと、人々の絶望から生まれ、具現化されたもの。今まではピエロのような姿で、幻影帝国としてひっそりと、着実に絶望を集めていたのだが…。

ある日、バレエ好きの、夢に満ちた少女、つむぎの足に呪いをかけ、ドール王国を作り上げ、プリキュアを招待しそのままハピネスチャージプリキュアを滅ぼす算段だったのだが、逆に私の方が滅ぼされてしまった。浄化ではなく、消滅。あのいまいましき戦士、キュアラブリーの手によって弾けとんだ私は、より確実な肉体を求めた。

そして、前回の私とは違い、不条理な世界への絶望、憎しみ、恨み…などの激情をとある少年をもとに形成し、完全な肉体を得た。本人も認証済み。

簡単に言うなら……私はとある少年をのっとったのである。
破片となってさ迷っていた頃、見つけたこの少年に。
彼の心は、空虚だった。幼いながらに全てを諦めていた。ただ根強く張り巡らされ続けるだけの激情がどこかで鐘を鳴らしていた。
ふらふらと生きながらえてさまよう。そんな姿を、自分と重ねてしまったのかもしれない。
そして私／僕たちは、共に生きることを選んだのだ。
世界を滅ぼそうと。世界を恨み続ける者であろう、と。
そこで集中的に絶望の集まるプリキュア墓場に来ていた。もしかすると、誰かを待っていたのかも。彼のような、新たな王を。ミラージュとはどこか違う不思議な王。実に興味深い。
改めて王――相楽誠司を見やると、彼は目覚めた少女四人を、私の時のように勧誘していた。
それは成功したようで、バスローブ姿だった少女たちは全体的に黒い衣装に変わっており、プリキュアには珍しい鋭利な武器を身につけていた。
「んで、こいつはブラックファング」
誠司が俺を紹介する。

「名前長いー、言うのめんどいー、よし、黒い牙だから…クロガって呼ぶー」
「勝手にしろ」

「…改めて自己紹介とかしとくか。俺は相楽誠司。コードネームみたいなやつもいるか。じゃあ《アビス》で」
「水原きなこ。……《ミエル》」
「はいはーいっ！鐘嶋りんなですっ！《カプリス》！」
「大園硝子。…《アルバ》」
「藤代ひつじー。よろしくー。《エステラ》ーー！」
「ブラックファングだ。もういい。クロガと呼べ」
「おーっ。クロガクロガー。本人公認だねー」
「ーさて、自己紹介も終わったところだし。仮アジトみたいなとこを紹介するからついてこい」

相楽誠司が空中に丸を描くと、鏡が出現し、やがてそれは身体がすっぽり収まるほど大きくなった。その輝く鏡の中に入っていく誠司についていくと、変な建物についた。ボロボロの屋敷だ。一部コンクリート造りで少し冷ややかだ。ツタが侵食してきている割れた窓からは風が入ってくる。

ここはどうやら玄関のようだ。
とはいえ、玄関だからといって靴が並べられているわけでもなく（むしろ床が汚れているので脱ぐ必要がないということとは別に）、入り口、というだけで特に段差があったりとかもしない。
目の前には開けたスペースがあり、中央からは三階の天井まで見える、吹き抜けになっていた。
思いの外でかい。
「んで、しばらくここで暮らしてもらわなきゃいけなくなるわけなんだが、空き家だっただけあってものすごく汚い。掃除しようにもどこから手を出せばいいのか分からないレベルだし、ところどころ壊れてたりする。んで、それぞれ個別の部屋――というか空間？を用意したから、好みに改造してくれ」
「どうやっていくんですか…？」
「さっきの俺みたいに指で丸を描くと鏡がでてくるから、そこから移動する。他人の部屋に勝手には入れないが、相手が描いた鏡からなら行ける。他に質問は？」
「私たちのチーム名はなんですかっ！」
「ん…考えてなかった…何でもいいな…」
誠司が天井を見上げ考え込んでいると、

「《イグニス》でどう？」
と静かな少女が呟いた。
他に特に案もなかったし、ラテン語で炎を意味するしいいなとおもったのでそれに決定。
「…んじゃ、もうそれぞれ活動にうつってくれ。解散ー」
幻影帝国が滅び、今、新たなる闇の勢力が世界を覆わんと誕生した。
相楽誠司率いる世界を憎む組織、イグニス。
これで世界を壊す。その先には何もない。無だ。復讐をすることだけが目的のやつらが集まってしまったのだ。
この先どうなっていくのか、本人たちですら予想できない。
未だに目覚めないめぐみに想いをはせつつ、出ていく五人の姿を見送った。

刻まれた、叫び。

相楽誠司《アビス》
水原きなこ《ミエル》
鐘嶋りんな《カプリス》大園硝子《アルバ》
藤代ひつじー《エステラ》
ブラックファング　《クロガ》

＊＊＊

地球は今どうなっているかな。
みんな元気だろうか
【今】っていうのがどこを表すのか、この私にはもう分かりづらいのだけれど。
青く澄んだ美しい星、地球。
あんなことあったな、懐かしいなぁ、なんて思い出を噛みしめて、広い星を一人歩く。
この私にもいつか会いにきてほしいな、なんて叶わない願いを胸にいだいて。

＊＊＊

☆☆☆

「よし、っと」

自分の部屋になる場所をあらかた片付け終え、掃除を済ませ清潔感のやっとでてきて安堵の息をこぼす。

前記憶を消しに行ったときに家から拝借した毛布やらを使って（イグニスの他の奴らにも勿論配った）、簡易的な布団をつくる。ただでさえ寒いのにこの廃墟はそこらじゅうに小さな隙間が空いていて風が入ってきてしまう。あぁさむっ。応急措置程度に段ボールとか新聞とかプチプチとかはやったが…。夜の冷え込みはなかなか厳しそうだ。

そんないい感じに仕上がった部屋にめぐみを抱えて布団に寝かせる。

壁も少し汚れているが、切りがないのでやめておこう。

☆☆☆

『今入ってきた最新のニュースをお知らせします。新しい勢力、《イグニス》なるグループが、世界の破壊を繰り返しているとのことです。サイアークと呼ばれる化物も多く現れています。また、幹部らしき人物のほとんどが日本で確認されていますので皆様、なるべく外出は控えるようにしてください。メンバーは四から六　七人程度で幻影帝国の残党と思われ、少女四名が幹部とみられており――』

淡々と流れてくる情報に耳を傾ける。誰も予想しなかった不穏なクリスマスイブだ。まだ何故かぴかりが丘にはサイアークはでていないが、中継から世界中のプリキュアが戦っているのは分かった。そして、新しい幹部が増えているということも。誠司らしき姿は未だに見当たらないが。

「イグニス…？なにそれ…でも多分これって――」

その時、明るいベル音が鳴り電話がかかってきた。どうやら、安全のため学校は休みになったのだそうだ。それはつまり、幻影帝国よりも脅威であり、生徒の安全性が保証できないこと、他の地域で酷い惨事になっていることを表していた。

「世界のプリキュアたち、大丈夫かな…？」

「でもひめ…残念だけど私達にそんな余裕はないわ…」

「学校が休みになるくらいだから、世界中大変なことになってるのは分かるけど…」

「僕が動ければ…ッ…いいんだけ…ど…ッ…」

「ブルー！安静にしてて！また傷が開くわよ!?」

「……絶対助ける！…とは言ったものの、どうすればいいのかな…場所も分かんないよぉ…」

「今の私達じゃまだ刃が立たないわ。敵の陣地に行けたとしても、最悪、生きて帰ってこられるかすら危ういわ…」

「何か作戦か新しい必殺技でも考えないとね…」

うーん、と俯いて考えていると、ミラージュが三人のもとに駆け寄り、学校は休みになったことを告げた。恐らく誠司とめぐみの行方不明が原因だろう。また被害者を増やす訳にはいかないし、謎が多いことから教師も流石に折れたというわけだ。

「学校も休みになったことだしじっくり考えましょう。まずは、めぐみを救出する方法だけど、少なくとも場所を絞りこまないと無理ね。多分向こうはこっちが救出しようとすることは分かっているはずだから慎重にいかないとね…。相楽くんを助けるにしても、めぐみを助けるにしても、強くなる必要があるわ。三人のラブプリブレス、ハニーバトン、スタータンバリンの技を組み合わせてみるのはどうかしら」

「えっ、ドレッサーは使わないの？」

「ドレッサーは私達四人の力に反応したから三人でまた新たな力をくれるかどうか…。それに状況にあわせて技を変えてみるのもいいかもしれないわ。確かにドレッサーの方が力では強いけど…」

糖分補給に、とテーブルにおかれているハニーキャンディーを口に含みながらゆうこがひめの疑問にこたえる。

その日は一日中提案を出し合って話し合った。午後はその案を試し練習したがなかなか身体が思うように動かず、まだまだ作戦、特訓ともども必要であるという結論に落

ち着いた。まぁ、実戦で試していないので何とも言えないことに変わりはないのだが。
「すーすー」
「あらあら、三人とも寝ちゃったのね。そうよね、あんなにショックなことがあったんだし…少し寝かせておきましょう」
ふわりと毛布をかけてからブルーの元へ戻る。
先程淹れたばかりの紅茶のティーカップを並べて静かに置く。
熱い身体を拭いてから包帯を巻き直す。白い肌とは対照的に包帯に血液が滲み広がる。かなり汗をかいている彼の手をそっと握り、額を撫でる。深く眠っているだけなのに、そのまま瞳を再度見ることなく自分の前から消えてしまうのではないかと焦る。そんな考えを首を振って否定する。
「やっとあなたの側にいられるようになったのに、ね…ごめんなさい…私のせいで…」
誰にも聞こえないように微かな声で絞りだす。悔やんでも、懺悔しても時すでに遅しだ。どれだけ謝っても、謝っただけでは許されない、いや、何をしたって許されないことをしてきてしまったのだ。
「……っ」
力が抜けてすとんと腕がおりる。全身が震え、膝が笑う。
右手を左手で抑えながら紅茶を飲む。温もりが喉を通り、やがて震えがおさまる。

何を今頃怖がっているのか。
自分と似た立場にいる誠司？
自分の隙をついたレッド？
いつまた自分が戻ってしまってもおかしくないのかもと恐れを抱く。
分かってはいるつもりだが、ブルーはもしかしたら、私のことが好きということではなく、私がブルーの影響を受けて堕ちてしまったことへの罪滅ぼしで一緒にいるのかもしれないと思ってしまうことがある。
不安定な精神にまた囁き声が聞こえてきそうで恐ろしい。
誠司は自分よりも深く闇に堕ちてしまった。自ら自分を消し、自ら自分を出した。隠していた自分でも逃避したくなるような自身の黒い部分を肯定し、前向きになろうとした自分を消した。優しさ故に、というべきか。想いが純粋であるあまり、溢れて、脆くも崩れてしまった。
そして赤い強い決意をもって全てを憎む死神と化した。
迷って、声に甘えただけの私なんかとは比べ物にならない憎悪。嫉妬。彼を助けられるのはめぐみだけだ。あるいはハピネスチャージプリキュア達四人か。
――――ドゴォーン!!
なんて答えなど出ない考え事をしていたら突如大きな爆発音が響いた。プリキュア

の三人も共鳴したのか、はっと目を覚ます。
「河川敷にサイアークの気配ですわ！」
「――ゆうこ！いおな！行くよ！」
いつものめぐみに代わってひめが叫ぶ。
「「ええ！」」
変身を済ませ、普通のサイアークでも赤いサイアークでもない、青いサイアークと対峙する。新しい幹部らしき少女と、絶句するほど大量のサイアーク。自分たちと同じくらいの少女で、似たような服装、極めつけは、腰にさがっている黒いプリチェンミラー。
――――プリキュア……!?なんで…！
相手が堕ちた原因も気になるが、サイアークを取り敢えず何とかしなければならない。動きがなかなか豪快だ。
昨日はみんなショックすぎたし、学校も休みだったしで、それぞれ家に帰っていたので分からないが、昨日の内にニュースであんなふうに世界中で暴れまわれたのだから、あっという間にぴかりが丘も甚大な被害になってしまうことも容易に予想できたからだ。
最初からとばして必殺技を放ちまくっていくも、なかなか減っていかない
「くっ…！じゃあこれで！」

三人はそれぞれイノセントフォームに変身し、再び格闘する。だが、最強の必殺技ではあるイノセントプリティケーションが使えないとなると、決定的な攻撃を与えることができず、状況はあまり変わらなかった。

イノセントフォームが解けて元の通常フォームに戻る。

「どうすればいいのかしら…めぐみちゃんもいないし…」

「イノセントフォームでもここまでだなんて…!」

全身の傷に悶えながら短草を握りしめ、弱々しくなった体を懸命に立たせようとするも、なかなか力が入らない。それを嘲笑うかのように頭上から声が聞こえてきた。

「あはっ!おやや、あなたたちは確かアビスの元お仲間さんの方々です?すでにボロボロですかねぇ?心とか。ふふ、楽しいね!安心して下さいね!私達イグニスが、他人のことなんて考えれないほどに滅茶苦茶にぶっ壊してあげますよぅ!!」

「……そんなこと絶対させないんだから!プリンセス!弾丸マグナム!おりゃゃゃぁぁぁぁ!」

弾丸マシンガンの強化版の強化版である弾丸マグナムを力を振り絞って発動する。

威力が増しており地面には無数の大きな穴があき、煙がたちこめる。

「土煙のあるうちに!ハニー!リボンスパイラル!」

ハニーが闇キュアに向かってリボンを放ちぐるぐる巻きにする。その隙にすかさず

フォーチュンが反応しフォーチュン・スターバーストで爆裂させる。煙が濃くなり、やがて晴れてくると、普通に立っている敵の姿を睨み付けた。かなりの至近距離で与えたはずの衝撃波が全然効いていないようだ。

「むぅ……ちょっとぉ！痛かったですよぅ!?ま、その驚いた面白い顔が見られて割と満足ですけどぉ…っ！」

闇キュアは嬉しそうな笑みを浮かべてから、ころっと意味深な笑顔に変えて、フォーチュンに拳をぶつける。その手には黒地に赤ラインのはいった手甲が装備されており、より強化されていた。

その衝撃は地面にいたハニーの元にも届き、思わず頭を押さえる。

フォーチュンは物凄い勢いで地面へと落下、弾丸マグナムのとき以上に大きなクレーターを作って倒れる。

プリキュアで身体能力の向上があるからかは定かではないが、生身の人間よりも勿論出血は少ない。はず。なのに――かなりの出血だ。

いつもならそこまでではないはずなのに。

昨日のブルーの血液がフラッシュバックしてハニーの鼓動を急かす。

プリンセスが…あ……あ……っと震える声を漏らしながらもハニーにフォーチュンの回復を頼む。

はっとして急いでハニー・ヒーリングリズムで回復するが、血が止まっても既に出ていた血液が多く、顔は青ざめたままだ。
硬直しているところに再び明るい声が耳に届く。
「選んでくださいよぉ。私と遊ぶのか、サイアークを倒して町の被害を抑えるか、その子を助けて町を捨てるか」
「……ないじゃない」
「あー、えー？」
「選べる訳！ないじゃないっ!!私はプリキュアだからっ！ハニー、フォーチュン連れて一回病院か大使館連れてって！私はこいつを足止めする！」
「プリンセス……っ。……うん。任せたまたあとで」
「ええ！あとで！」
暗い赤にに染まったドレスを身にまとってしまったフォーチュンをお姫様抱っこしてハニーは地を蹴り、大きく跳んでぴかりが丘の中でも大きめの病院へ向かう。止血してあっても時間はかけないほうがいい。プリキュアでジャンプして移動した方が、速度的にも信号的にも救急車よりはるかに速い。
道中、大使館へ寄り、運良く外に出ていたミラージュをも担いで、事情を説明しておいた。

ミラージュにフォーチュンを任せ、ハニーは再び来た道を辿る。
プリンセス……！どうか……！
河川敷に到着したとき、目の前に広がっていたのは、変身がとけて水色に光り倒れているひめと、つまらなそうにサイアークの上から見下ろす少女。
しかしよく見てみると、まだましな状況のように思えた。
変身こそ解けているが先程のフォーチュンのように流血はしていない。
ひめの周辺が不自然な形で地面がえぐられていることと彼女の得意とする技を考えた推測だが、恐らく地面に落ちる直前に風を発生させてクッションにし、衝撃を緩和させたのだろう。
闇キュアも少しボロボロになってる気がする。
少し。ほんの少しだけだけど。
どうする。一人では流石に無理だ。だがこのまま被害を拡大させるわけにもいかないし…。
――――試しにやってみよう。
とっさに思い付いた策だが他には思い付かないし。頭に、まりのようなものをイメージする。
「ハニー・リボンプロテクト！」

「!?」

ハニーがリボンで作った球の中に闇キュア（プラス付近のサイアークもなるべく）を閉じこめた。どうやら成功したようだ。念のために何重にもかけておこう。

「今のうちに…！」

羽を使い上空から、マイクモードを応用して付近の住人に避難を呼びかける。

幻影帝国の際、緊急時ぴかりが丘が指定した避難所に避難することになっていたはずだ。もう私だけじゃ戦いきれないし、二人もボロボロだ。今までのサイアークと違い範囲も広い。

お年寄りや子供はまとめて自ら飛んでいき運んだ。

最後にプリンセスを肩にのせて大使館へ。

遠くの方からバン！と破裂音が聞こえたが、今は…と自制。

「……このままじゃ……っ」

言葉にすることも辛かった。

☆☆☆

「……んっ……ん？どこ、ここ…？見知らぬ天井だ……なーんて…あはは…」

めぐみが目をゆっくりと開けると、そこは見知らぬ部屋のベッドの上だった。

なんか、なんというか、ボロい。
壁も変な模様だし。
一体どういう状況なんだろ…。
……誠司！
『ガチャガチャ』
ドアを開けようとしたが鍵が閉まっていて開かない。
ドアは諦めて、他に手がかりはないか、と部屋を見渡す。
「やっぱりこの壁、変な感じする…」
模様が不規則にならんでいるし濃淡もバラバラ。
いたんでいるのだろうか？
近づいて見てみる。
「……っ!?」
あまりの恐怖に強烈な寒気を感じてめぐみは絶句した。
何で
うるさい
嫌だ
俺は何だ

どうでもいい
辛い
助けて
痛い
苦しい
全部滅茶苦茶にしてやる
壊す
壊す
守る
誰を?
めぐみ
壁の模様だと思っていたものは、こんな言葉の羅列だった。誠司が書いたのであろう言葉。
悲痛の叫びは赤く、鉄のような匂いがした。
文章じゃないのに、ただの簡単な単語なのに、一つ一つが重くて。
それは強く、濃く、深く、めぐみの心に刻みこまれた。

見え始めた、希望。

――――時は無慈悲にも規則的に紡がれ続ける。ブルーのいる大使館だって勿論例外ではなく。希望があろうと無かろうとお構い無しに進み、刻まれていく。

ボロボロになったプリンセス。

顔色は良くなったもののまだ不安定なフォーチュン。

連携技もまだうまく使えない。イノセントフォームを一人で使うしかないのだろうか。

ハニーだけで、幹部五・六人と戦わなければならないのだろうか。

技は想像力次第でどうにかできる。もしかしたら……とフォーチュンとプリンセスに回復技をかける。

「具体的に元気になる姿を想像して……。ハニー・ヒーリングリズムモア！」

体力の回復だけなら……とヒーリングリズムのバージョンアップをイメージしてかけてみる。どうやら上手くいったようだ。

二人のまぶたが動く。

「……あれ？痛くないっ！」

「……。私…あの黒いプリキュアにやられて…って、あら？傷がもう癒えてる…」
「ありがとう、ハニー！」
「……良かった…！良かった！私、もう、駄目かもって、このまま消えてしまいそうで…」
変身を解除したゆうこが崩れ落ちて涙をこぼし声を絞り出す。
今までの敵、幻影帝国とは違う。明らかに。
「ゆうこ、ごめんなさい。ありがとう、助かったわ」
「ありがと、ゆーこ!!」
「いいのよ、２人が生きてたんだから…でも…」
「次負けたらもう、その次は無いかもしれないわね…」
「「……」」
いおなの口からこぼれた現実に沈黙が走る。特訓するしか道は無いのだろうが、それでも不安は拭えなかった。
――――と。
「みんな…っ、話が……ある、、んだ…」
ブルーがよろめく体をミラージュに支えてもらいながら言った。
「もう大丈夫なの!?無理しちゃダメだよ！」
「いや、これは僕の責任なんだ…全部僕のせいで…」

「そんなこと……っ！」
「あるんだ…。僕は役に立たない…。自分でも責めきれないが力が、無いんだ…。どれだけ鍛えても防御力ばかりが増していくんだ。戦闘に関してはレッドの比にもならない…。君たちに頼ることしか出来なくて本当に申し訳ない…」
「私達だって感謝してるの！いっぱいサポートしてもらったし！」
　ひめが明るい口調で話すと、笑みを浮かべてブルーが話し始めた。
「お世辞でも嬉しいよ。――それで、本題なんだけど、一つ、あるんだ」
「何がですか？」
「《イグニス》に勝つ方法、だよ」
「えっ!!あるならもっと早く言ってくれれば良かったじゃん!!」
「この方法は、すごく危険なんだ。失敗すれば君たちは……二度とプリキュアに変身出来なくなるしもしかしたら眠ったまま目を覚まさないかもしれない。みんなもそれぞれ戦いで実感していると思うけど、戦いには力と強いメンタルとチームワークが重要だ。力はイノセントフォームが今のところ最強、となれば今はメンタル、つまり精神の強化が最も適切なんだ」
「精神強化って……」
「鏡に映る、自分を受け入れるんだ。否定したいところも自分の一部として認めなけれ

ばならない。できなければ自身の心に閉じ込められて――変身はもうできなくなる…だけど、これを僕が話すのはこれが最後の手段だから、というだけじゃない。1年間プリキュアとして、1人の中学生として、数々の苦難を乗り越えた君たちだから――信じているんだ」

「……大丈夫だよ!!だって私達今まですごごーくいっぱい乗り越えてきたもん!」

一定時間の静寂の後、ひめから明るい声が飛び出した。

「ひめちゃんに同じく。それに、不謹慎かもしれないけどみんなのこともっと知れるチャンスかもしれないわ」

「そうね、ただ、二度と変身出来なくなるっていうことは少し引っかかるけれど、そもそもここで戦わなきゃ世界が滅ぼされてしまいそうだし…」

前向きな言葉を掛け合う三人を見つめながらブルーは目を細めた。

折れそうな心を懸命に奮い立たせるために無理して笑顔を作っているのが分かっているからだ。

だからといってこれ以外の方法が見つかる訳でもなく、ただ一つの細い糸にすがるしかないのだ。

「それでそれで!!そのせいしんきょーか?をするには何をすればいいの!?」

「三人とも、ついてきて」

ブルーに促され、その目線の先――クロスミラールームへと足を踏み入れる。
中央には見覚えのない大きな鏡が万華鏡のように設置してあって、すぐ下の床にも鏡が三つ置いてあった。
「この鏡に横たわって、目を閉じて。深く息を吸って、耳をすまして感覚を研ぎ澄ませるんだ。夢に入ったら、『鍵』を探して。すまないが、これ以上ヒントはない…」
言われた通りに横たわり、目を閉じる。肌に当たる鏡の冷たい感触がだんだん薄くなっていく。意識がぼんやりとして胸のあたりから何かが溢れてきそうな、そんな感覚に襲われた。
●●●
「……ねぇ。……ねぇひめってば」
「……?……あれ……?」
「んもう、どうしたの、ぼうっとしちゃって～！学校で寝ちゃうなんて珍しいなぁ」
窓から差し込む夕日が瞼を刺激する。数人しか残っていない活気の失われた放課後の教室。ヒメルダとめぐみ以外の人物の顔はぼやけて見えず、名前すら思い出すこともできない。そんな奇妙なことに違和感も感じないままめぐみと会話を交わす。……あれ？
「……めぐみ…!?めぐみぃぃぃ!!!!!」

遅れてやってきた感動に思わず声を漏らす。
「あわわわわわ、ほんとにどうしちゃったのひめ」
困ったように笑いながら頭をポンポンしてくるめぐみに、姫は涙ぐみながら口を開く。
「あのね……悪い夢を…見てたの…めぐみも誠司もいなくなっちゃって、街もゆうこもいおなもたくさんの人達がボロボロになっちゃって…」
「酷い夢だね……それで、ひめは何をしてくれたの？」
「え？」
「私が連れ去られて、助けてくれたの？誠司を助けてくれたの？努力してくれたの？何も出来ないひめは、何かしてくれたの？……ねぇ私知ってるよ！友達は都合のいい道具なんだよね！わたしとひめは友達？ってことは私の事は便利な道具としか思ってなかったんだね!!」
「めぐ……み……？……ちがう…ちがうよめぐみ…」
光の無い目で笑みを浮かべて話すめぐみに、慌てて否定をするも、混乱でうまく言葉が紡げない。
「いつでもめぐみちゃんに頼ってばっかり。逃げてばっかりだったわよね。自分からも他人からも運命からも罪からも全部から逃げて。そのくせ自分の欲望ばかり人におし

つけるんだもんね」
　ゆうこの声が胸に刺さる。
「あなたさえいなければ幻影帝国は復活しなかった。私のお姉ちゃんが捕らわれることもなかった…世界が侵略されてたくさんの人々が傷ついたのはあなたのせい！」
　ぐにゃぐにゃと視界が歪む。
　ああ、悪い夢は夢じゃなかったんだ、と。そしてこっちが夢だったんだ、と確信する。手に少し力が入り、緊張で首筋に汗がつたう。そして目の前に突如現れた自分自身――ひめがゆっくりと口を開く。
「ひめ…ひめ…ヒメルダ……私はあなた。あなたは私。鏡で反転したあなたの隠したい負の部分のあなた。でも、何も怖がることはないの。だってこのままいれば満たされる。この辛い言葉からにげればいい。この教室の扉を開けて出ればいい。それだけでこの世界は生まれ変わる。裏側の力が隠れてないこの状態は完璧なの。完全なの。この夢の世界にいれば何も嫌なことは起こらない。あなたが望めばあなたの想い描いた通りになるの」
「そんな……いらない!!めぐみを助けにいかなくちゃ！だから、鍵を渡して！」
「幸せなのよ？拒むの？ここは感覚も現実と同じ。めぐみも誠司もいる。大変なことは全部リボンがやってくれる。これでいいじゃん」

うっすら笑みを浮かべた鏡のひめが耳元で囁く。
「それは幻だよ……めぐみはめぐみだもん誠司も誠司だもん！みんなに助けられてばっかの私は卒業したの!!辛いことも、苦しいこともみんなで乗り越えて！今まで知らなかったこと、めんどくさがってやってなかったこと、楽しいこともいっぱい知れた!!友達が困ってる！だから助けにいきたい!!自分の思い通りの世界なんていらない!!」
「あなたのせいでたくさんの人が不幸になった！傷ついた！だからこの箱庭で暮らせばもう誰も傷つけることはない――そうは思わない？」
「思わないよ……この世界じゃ誠司もめぐみも助けられない。ホンモノのみんな、ホンモノの友達を助けられない。また笑いあわなきゃなんだ!!」
「逃げてばっかのあなたに、家事もリボンに任せっきりのあなたに、幻影帝国を復活させたあなたに、何ができるっていうの？」
張り詰めた空気。切迫した、叫びともとれるその鏡のひめの声に対し、ひめは答える。
大きな呼吸をして。自信満々で。笑顔で。真剣に、告げる。自分に言い聞かすように。自分を塗り替える。
「私は昔の私じゃない!!アクシアの箱を開けたことも、知らないことだらけで怖くて人見知りして逃げてたことも、家事もダメダメだってことも全部わかってる!!自分のダメなとこから逃げるのをやめたの!!向き合って受け入れるの！ううん、とっくに気づいて

受け入れてた。それができたのはめぐみやゆうこ、いおなや誠司、リボン…他にもたっくさんの人達のおかげなんだ。みんなが私を信じてくれた。みんなが私を助けてくれた。だから今度は私が助ける！」

「……あなたには試練なんて必要無かったって訳か。答えなんてとっくに出てた」

鏡のひめは瞳を閉じて少しため息をついてから、すっと手をさしだした。手のひらの上に光が集まり、鍵を形成する。

「これが鍵。あなたの心の強さを思う存分発揮するための、鍵」

ひめは小さなそれを受け取り、教室の扉に手をかける。

「……覚えてて。私は――心の影はいつでも共にいる。消えないトラウマも、いっそ消えちゃいたいって思うほど辛いことも、きっともっと経験するし、重なっていく。トラウマはなかなか消えない。けど、あなたがここで宣言した希望も消えない」

「うん……ありがとう、わたし！」

瞬間、光に包まれた。

●●●

「……おかえり、ひめちゃん」

大きな瞳で覗いてくるゆうこの顔が近すぎて一瞬驚いたけれど、慌てて状況を理解して微笑む。

「ただいまっ！……ゆうこ、大丈夫だった??どんなんだった??」

「ふふ、何があったかは、秘密。ひめちゃんも無事そうで良かった！あとは――」

すぐ近くで眉間にシワを寄せて拳を握りしめているいおなに目を見やる。

ひめは少し俯いてから自身の両頬をバシッと叩き、いおなの近くに駆け寄って声をかけ始めた。

「いおな!!いおないおないおな!!負けちゃだめだよ!!!ううん、いおなはすっっごごごーーーーーーい強いもん!!自分にだって負けないよ!!!だから!!!私たちを信じて!!!自分を、信じて!!!」

力強いその声は1年前の泣き虫で逃げてばかりだったひめとは全然違っていて。自分と向き合った時の影響か、今までの思い出がフラッシュバックする。こんなにも強くなって……とゆうこは親のような感想を抱くも、自分も、と同じように隣で声をかけ始めた。

☆☆☆

めぐみは冷たく圧迫されたような重い空気のただよう密室で、1人、壁にもたれてうずくまっていた。

壁に刻まれた叫びを見る度、心臓に闇が染み込んで広がっていくような感覚に襲われた。本当に誠司は自分たちの手で救えるのだろうか。救う、とは何なのか、ぐるぐると

回って訳が分からなくなってくる。戦わなきゃいけない。止めなきゃ行けない。分かっているのに。ここじゃ動けない。……脱走……できるかな…。カギないし、うう、どうすればいいの―!!?

小さなテーブルの上に置いてあった水を思い切り飲み干し、深呼吸する。

―――ほこりっぽい…。

「……誠司」

めぐみはなんとなく口にしたその名前を部屋に響かせて、突然襲ってきた猛烈な眠気に意識を奪われた。

☆☆☆

「私は……いいえ、私たちはもう逃げないって決めたの。過去は受け入れるしかない。でも、未来はまだ変えられるかもしれない。だから……力を貸して」

そう穏やかな口調で自分の片割れに告げると、彼女もまた満足そうに微笑み返して、カーテンがぱっと開いたかのように辺り一面が真っ白になり暖かい風が心のモヤモヤと共に疑念を吹き飛ばした。

○○○

「……おな…いおな!!!」「いおなちゃん!!」

「…ひ……め…ゆう…こ…?」

「いおなああああああああああああ!!!!よかったあああああ!!!」

思わずいおなに抱き着くひめに、ちょっと照れながら笑顔向ける。

「なんか不思議な感覚だったけど、自分の中のもやもやみたいなのを言い切ったおかげでちょっとすっきりしたような気がするわ」

「今までの嫌なことから逃げないって決めた。今の辛いことに向き合うって決めた。世界を守る。相楽くんとめぐみを救う」

「とっくに覚悟してたはずだと思ってたのにまだ足りなかった」

「んじゃあ早速!!」

「「特訓だね!!!」」

信じていた、と言っては失敗したときの代償を思えば安直だろうか。でも他に言葉は見つからなかった。今までの彼女たちの成長を見てきた身として、というのもプリキュアも幻影帝国も生み出し、新たな憎しみを作ってしまった自分にはそれを語る権利もないだろうが。見送るのも毎度辛いが、彼女たちにすがることしかできず、引き留めてあげられない自分の無力さにもまた落胆し絶望するのだった。

溜息。

鏡の部屋から出ていく彼女たちの力強い声を聴き、その背中を見送りながら、目の前の鏡に目を向ける。世界中で戦うプリキュア達のサポート。それが自分にできる唯一

の道だと信じて。

○○○

「こちょこちょしてくださいな」

「こちょこちょ」

「はーーーっぴしょん!!」

ひめたちは精神強化による全体のパワーアップと、日々重ね続けている特訓の成果もあり、だんだん勝率を上げ、連勝し始めていた。そしてそれは世界中の人々に希望と明日を生きる活力を与え、よどみきっていた世界の空気を換えていった。

新しい発見もあった。赤いサイアークと違って青いサイアークならプリカードを生み出せること、青いサイアークが強い原因は召喚者の体力を削るため一定を超えると同時にうみだせなくなること、素体となる人が一体につき複数人いるため幸せを感じたらプリカードが手に入る確率が格段にあがったこと。

黒いプリキュアを倒すことはまだ叶ってはいないが、いづれはきっと――。

☆☆☆

憎悪。絶望。虚無。

心臓にもやがかかったような、感情がなにかでかき混ぜられているような、そんな感

覚がずっと続いている。町を見ても、逃げ惑う人々を見ても、何も感じない。昼間の空を見上げた時の憎悪のための手段に過ぎないのだから。その目には青髪の男と桃髪の少女しか映さない。頬を撫でる風すらも鬱陶しい。鈍くも鋭くなった、狂った自分の感情に目もくれず、『戦地』へ赴く。叫び、嘆き、もがき苦しむ人々を見て乾いた笑い声をあげ、ただ一言残して去る。

「消えろ」

取り戻した、はずなのに。

順調に勝ち始めて希望の光が差し込んできたチームハピネスチャージプリキュア。世界のプリキュアたちもそれに影響されたのか、ぐんぐんと力を増していっている。とはいえ、誠司たち――イグニスの猛攻はとどまることを知らず、今尚世界の人々を恐怖に陥れている。

力をつけてきたと自負したひめ達は、現状を受け止めながらも、やはりめぐみ救出を優先事項とすることを考えていた。ラブリーはプリキュアとしても強く、取り戻せば戦力になる――というのは建前の理由。友達を取り戻したいといういたって普通の気持ちが彼女たちの心を支配していた。

めぐみの居場所は分からない。だが、その手がかりとなるものはあるはずだ。そう考えてたどり着いたのが――

「――――私たち、イグニスって訳ですか」

「そーゆーことっ!!」

いおなが肯定しながら技を繰り出す。サイアークを大量に倒した後で体力はかなり削られているが、それはサイアーク達の召喚者――アルバと名乗る、黒いプリチェンミ

ラーを手にした少女も同じだ。
「なぜあなたたちはこんなことをしているの!?」
攻撃を避けながらフォーチュンが問いかけるも、彼女は顔を歪めて怒りを叫ぶ。
「あなた方には永遠に理解することなんてできない!!!仲間だのチームだの助けるだのほざいているあなた方には!!」
「ぐっ……」
アルバから放たれた黒く光る光線がフォーチュンを狙い打ちするが、プリンセスがシールドを展開して防ぐ。
「……ええ……分からないわ……だって私たち、あなたのことを何も知らない！」
「当たり前のことを…何を今さら…ッ!!」
「どうしてあなたはプリキュアになろうと決めたの!?守りたかったものがあるんじゃないの!?大切な――そう、大切な家族や友達や仲間、とか!!」
自分のプリキュアとしての始まりの決意と重ねてプリンセスが声をあげ、ハニーが、体力を癒しながら背中を支え、ついにシールドで攻撃を跳ね返す。
「くはっ……!!家族……友達……仲間……全部綺麗事よ……すぐ割れて崩れ去る……!!裏切られる!!あなた方もすぐこちら側になる!!妬んで恨んで騙して憎んで…壊してやる……みんなみんな壊してやる……ッッ!!」

プリチェンミラーの黒い光が強く!! 禍々しいものに変化していく。
「はあああああああああああああああ!!!!」
絶叫しながら大きなエネルギーが放たれる。
「私は――少し前までプリンセスのことを憎んでいたわ。……でも、私は彼女のことを何も知らなかったって知ったの。酷く強く当たってしまっていた私にでさえ優しくしてくれた。勇気をくれた」
「……うるさい……」
「最初は逃げてばかりだったプリンセスがラブリー達と出会って世界からも自分からも逃げなくなったり。大切な友達と出会うことができたり。ご飯をみんなで食べるのがこんなに美味しいんだって教えてくれたり。……いろんなことがあったしぶつかったりもしたけど、陰っていた私の心に希望の光を射し込んでくれた！」
「……」
「私たちはあなたも助けたい……出会いは最悪。でも――!!」
プリンセスが心への問いかけに加わり。
「あなたのこと、たくさん知りたいの……心が苦しんでる……冷たくなってる……あったがご飯でハピネス、したいな…！」
ハニーも声を重ねる。そして、3人は変身を解いた。

「なんで……なんで……あなた方と私は敵同士なのに……他人以下なのに……」
「知らないから、知りたいの」
「私…っ……こんなに優しい言葉かけられたこと無い……分からない……分からないよ……」
アルバのプリチェンミラーから黒い光が剥がれ落ち、本来の姿を取り戻した。
「一緒に、帰ろう?」
プリンセスが手をさしのべて笑みを浮かべた。
強い光と朝の澄んだ空気に包まれて。
☆☆☆
「死神さんは今更ご帰還か。ずいぶん長かったが…」
「……」
「……無視か……」
久しく来ていなかった誠司に言葉をかけたはいいものの向こうが黙ったままで少しため息をつきながら呟いた。
「……俺は……誰と……何のために戦ってる……?分からない……いつの間にか分からなくなってきたんだ……レッド……教えてくれよ……俺は……誰だ……?相楽誠司は……誰になった……?」

頭を抱えて自身の胸元を掴んだ拳に力を込めて震えた声で彼は、そう言った。
記憶の混濁なんていう容易い問題ではない。戦いに慣れていなかったものが突然こちら側に足を踏み入れたことの精神の混乱。
ただでさえ傷ついた心が日を増す事におかしくなっているのだろう。
「俺はお前を手放さない」
そう一言告げてレッドはその場を立ち去った。
☆☆☆
ごめんなさい、と最初に謝ってきた彼女に、じゃあ一緒に世界を救おうよと声をかけて、そのままいろんな話を聞いた。
ファントムに追われた友達や仲間が自分を盾にして逃げたこと。家族が信じてくれなかったこと。そして、イグニスのこと。変身すると憎しみばかりが心を支配すること。
「つらかったよね、話してくれてありがとう」
とゆうこが微笑みかけるとまた泣き出してしまったのを慰めつつ、めぐみのことを聞く。
廃家屋の最上階の部屋にいるはず、だそうだ。
廃家屋までの道は鏡を通っていたため分からないらしいが、窓から見えた景色を元に

探してみたらだいたいの位置が掴めた。
決意をあらたに、新しい仲間と共に歩幅を広げる。
ぴかりが丘だけでなく幅広い範囲までサイアークを倒しに行けるほどに進歩し、イグニスの幹部である黒いプリキュア達とも対等に戦えるようになった。『倒す』ことは出来ても、心に幸せを届けなられければ『浄化』は出来ず、ワープで撤収されてしまうことがほとんどだった。
その点においてはひっかかってはいたが、チームは、世界は、前向きな兆しを見せていた。
そしてたくさんの人が背中を押し――めぐみ救出作戦を実行することにした。
☆☆☆
ワープをして自分の元部屋に来たアルバ――否、大園硝子は、悟られぬようプリチェンミラーをポケットに隠し、何もない部屋に唯一飾っていた写真を手に取った。
『トモダチ』の顔に大きく赤で×がかかれている写真を。
「またいつか…」
そう呟いてポケットにしまった。
自室を出、最上階へ向かう。
窓の外を眺めるレッドを見つけ、相楽誠司――アビスの居場所を問う。

「あいつならフランスで暴れ回ってるはずだ……もう何日もここへは来てない」
「そう、ですか」
「ところで――プリチェンミラーはどうした」
「……どういう意味ですか？」
「そのままの意味だ」
　そうして凍りつくような冷たい視線で一瞬固まった硝子に近づきレッドが囁く。
「今度はお前が仲間を裏切るのか」
　と。
「――――っ」
　悪だと分かっているのに。短い間とはいえ同じ目的を共にした仲間。そう言われると少しだけ汗が滴った。
　だが。
「私は――仲間を裏切りに来たんじゃない！助けに来たの！」
　ハピネスチャージプリキュアの仲間を。黒いプリキュアの心を助けたいと、自惚れかもしれないがそう思ってしまったから。
「プリキュア！くるりんミラーチェンジ！闇をも照らす星々の輝き！キュアアルバ！……レッド！私と勝負よ!!」

「最近体も鈍ってきたところだし多少は付き合ってやろう！」

窓ガラスを突き破って草むらに着地し、戦闘を開始する。

レッドの猛攻をなるべく避けて、できるだけあの廃家屋から離れる。一発ごとの攻撃が重く速いためだんだん避けきれなくなるが、受け流すにもどうも連続だと上手くいかない。力量差は圧倒的だ。これでも日本のプリキュアの中ではかなり強いほうだと言われていたのだが……。

（早く……！このままじゃもたない……！）

ハピネスチャージプリキュアの作戦成功を願う。

☆☆☆

硝子が落ちていくのを見て心が痛みながらもてくれた彼女のためにも作戦を成功させるべくめぐみのいるという部屋を探す。だいたいの場所が分かったところでブルーに調べてもらったが硝子の情報は正しいらしかった。

幹部は世界中飛び回っているようで、幸いと言っていいのか分からないが、部屋を見る限り何日も帰ってきていないようだった。

鍵のかかった不気味な雰囲気を放つ部屋に近づく。周りを見回し鍵がそこらへんには無いことに落胆するプリンセスだったが、それは思い切ってドアを蹴り破ってしまったフォーチュンによってあっさりと解決された。

そんなやわなセキュリティでいいのか、と少しトラップを疑ったが、ここに通じるところにレッドが居たわけだし、そもそもこんな廃家屋に何か施すというのはあまり現実的では無いので余計な心配だ。

「めぐみ……？」

プリンセスが部屋に駆け出しめぐみの姿を探す。不自然に汚れた壁が、廃屋の元来の不気味さをより増している。ベッドの上に寝かされた彼女の辛そうな寝顔を見て、起こさずに連れ出そうとそっと華奢な身体を持ち上げ、ハニーとフォーチュンと目を見合せて離脱を測る。

キュアアルバに作戦成功を伝えるべく、割られた窓から花火を打ち上げて。

☆☆☆

「なーんかあっさりすぎてビックリしちゃった」

「それでも成功したことは素直に喜びましょう？」

「そうだよねーっ！……めぐみは？」

「めぐみちゃんは奥のベッドに寝たまま…なかなか目を覚まさないの…」

「疲れているでしょうししばらくは安静にしときましょ」

「しょーこも無事に帰ってこれたし！めぐみも取り戻せたし！なんかなんか私たちすごごーいかも!?!?!」

なんて盛り上がっているハピネスチャージプリキュア陣はまだ、この先の運命なんて知る由もなく。

☆☆☆

「どういうことだ……!!」

「キュアラブリーが消えた。俺はアルバって奴と戦ってる隙にな。言い逃れはせん」

「レッド……まさかわざと…」

鋭い視線を送る誠司にレッドがフン、と目をそらす。

これ以上あの女といたら余計にこいつが壊れるだけだ、という考え。勿論、彼の堕ちた原因が彼女である以上手元に置いておくのとプリキュアとして戦わせることのどちらがいいのかレッドには分からなかったが、アルバの姿を見て作戦を悟った時、もうそのままの成り行きでいいと思ったのだった。

「奴はプリキュアだ。プリキュアは倒さねばならん」

「……」

☆☆☆

「みんな……ありがとう……!今日からは私も参加するよ!」

深い眠りについためぐみは鏡の自分――――アンラブリーとの対面を果たしていた。それは幸いにもハピネスチャージプリキュアチームの3人がやった精神強化と同じ効

果を持っていたため、ひめたちとの共闘および特訓を早い段階で始めることができた。気がかりなのは内側の自分との強制対面、および誠司のあれこれでの様々な悩みによるめぐみの精神状態だった。一見いつも通りに見えるが、ゆうこは悟った。幼なじみの心の不安があまりにも大きいこと。あの廃屋での何かが彼女の心の不安定さを加速させたことを。

「無理は……しないでね…傷以外の回復は…私には難しいから…」

そう声をかけると彼女は明るい声で大丈夫だよゆうゆう!と返した。

最初はめぐみとあとの４人というようにバラバラだったが、特訓と実践を重ねるうちに順調にまとまっていった。こういう時のめぐみのリーダーシップにはやはり適わない。どんとん引っ張って行ってくれる。リーダーの帰還にみなが喜んでいた。

そしてそれぞれが溜まってきたプリカードの願いをどうするかについて考え始めていた。

きっと、誠司が笑える世界へ。

リボンが持つプリカードファイル。それがいっぱいになった時、何かの願いを叶える。

めぐみはそれで誠司を助けられないかと考えて提案した。みんなも同意見だったようで考えは通ったが、具体案は見つかっていない。

ぐらさんのプリカードファイルでいおながプリキュアにちゃんと変身できるようになったことを考えると、愛の結晶と反応して憎しみの結晶が浄化できないかという案を頭をフル回転させて絞り出したが、それでは駄目だということをめぐみは瞬時に悟った。

彼の心を突き刺す憎しみの棘は深い。憎しみの結晶のある無しに関わらず彼を蝕み続けるだろう。

唸るめぐみを見てゆうこが言う。

「多分相楽くんのことを1番知ってるのはめぐみちゃん。だから…考えがまとまったらめぐみちゃんが使って」

ゆうこ、めぐみ、誠司は幼なじみでずっと一緒にいたが、誠司の想いを本人の自覚よ

りも早いくらいの時から気づいていたゆうこはここはめぐみに任せるのがお互いにとってもプラスなのではと考えたのだった。

「そうね……でも辛かったり決断に迷ったなら相談して…プリキュアとして……友達として」

いおなも肯定し、心配そうにめぐみの顔を覗き込む。

「みんな……ありがとう…うん、もっと私、考えるよ！考えて考えて考えて、絶対に誠司やみんなを助ける！」

決意を新たにしためぐみに、あっそういえばと付け加えてひめが硝子の紹介をして、ひとまず今日は解散となった。

力をつけてぐんぐん巻き返しを測っている世界中のプリキュア達は、やがてすべての元凶であるイグニス殲滅に向けて動き始めていた。もちろんそれはハピネスチャージプリキュアも例外ではなく、日々の特訓は欠かさず行い備えていた。情報はブルーや妖精を通して伝わっており、チームごとに担当を割り振って計画を立てている。

幹部達の殲滅はハピネスチャージプリキュアと各国の有志者で実力者の数名。あとはそれぞれ割り振られた地域の護衛。状況を見てその他の判断は当人に委ねるという形になっている。

幹部の殲滅がハピネスチャージプリキュア主導となっていることに意見を申した者

も少なからずいたが、アビスやブラックファングとは関係性が深いこと、ブルーのいるプリキュア本拠地であり敵の本拠地も近いプリキュアであること、そして世界で最も強いプリキュアチームであることが挙げられ、納得して退いていったのだった。

決行は明日――。

それぞれ口には出し難い想いを胸に瞳を閉じた。

☆☆☆

「では、最後に確認をするよ。これは心に深い憎しみを負ってしまった少年少女、その負の感情の塊の牙、そして僕の兄であり惑星レッドの守護者レッドの浄化作戦。いくら相手に知り合いがいようと油断は許されないよ。下手をすれば容赦なくこちらがやられる。だけどプリキュアには愛がある。その愛で、どうか彼ら彼女らを救って欲しい。世界を救って欲しい。力のない僕には戦闘が出来ないことを重ねて謝罪するけれど……幸運を願うよ。――作戦開始！」

クロスミラールームに映し出された戦う彼女らの勇姿を見て、度々罪悪感を覚えるが、悔しさに打ちひしがれている場合ではない。

それぞれのチームに細かく指示を出しつつ、自身も向かう準備をする。ブルーはどれだけ誰に止められようと行かねばならないと確信していた。兄と誠司、どちらも自分が原因なのではないかと考えていたのだから。

黒いプリキュアおよびブラックファングは世界から集まった有志の実力派プリキュアと硝子に任せてハピネスチャージプリキュアは誠司およびレッドの元へ一直線で向かう。

勿論、黒いプリキュア戦には自分達もと思っていたのだが、

「私たちの実力、なめないでよ!?あんた達はさっさと友達と家族を救ってきなさい!!」

「一瞬でも私の……仲間……だったかもしれない人達なんです!こんな時くらいカッコつけさせてくださいっ!」

なんて言われては反論することもできず。お礼を言ってその場は去った。黒いプリキュアの強さを知っている分振り返るのは怖かったが、心の中では彼女たちを信じて大きく地を蹴る。

ブルー、めぐみ、ひめ、ゆうこ、いおなはその熱い思いを瞳に宿し。

ぐらさん、リボンはそんな彼女らを見守り。

ミラージュは自分のせいだという自責の念と共に希望を内に秘め。

――最後の戦いが、幕を開けた。

「――――めぐみ」

「誠司!!」

「相楽くん……！」
大切な、幼なじみの名前を叫ぶ。
「誠司くん…」「誠司！」「相楽くん！」「誠司さん！」
それぞれも名前を呼ぶ。
家族を捨て、友も捨てた誠司にとって、名前なんてものはただの単語でしかなく意味をなさない。空中から見下ろす彼の目に映るのはめぐみの姿だけだった。……否、青い悪魔の姿も、だ。
怒りが込み上げる。激情が心を支配する。
「うおおおおおおおおおおおおおッ!!!」
誠司の恨みの込められた声と共に黒い弾丸のようなものが放たれる。
それを巧みな動きでかわしながら、時々弾き飛ばして腰の羽で誠司のもとへラブリーが羽ばたき拳を振りかざす。
「誠司!!目を覚まして!!!ラブリー!パンチングパーンチッ!!」
「消えろ」
彼がそう呟いた瞬間、ラブプリブレスで発現した大きな拳がブラックホールに吸い込まれるかのごとく闇に消えた。
黒いプリキュアとは比べ物にならないくらい強く、以前の戦いよりも強く、黒く、赤

く。心を囚われているのが分かる。

……分かる、から、諦めない。

激しい戦いがつづく。

フォーチュンとプリンセスの連携プレイで攻撃を与えつつ目くらまし、そののちに後方からラブリーが轟速で誠司のもとに飛び込み、ハニーは強化及び回復をしつつ後方支援。

少女達が協力して紡ぐ洗練された技の数々が、少しずつ彼にダメージを与えていく。

少しだけ希望が射し込んだその時――。

「――――ぐ、ふ」

ラブリーが背後からの突然の痛みに鈍い声を発した。後ろには血を彷彿とさせる鮮紅の髪にマントを羽織った男性――レッドが立っていた。

「もう始まってたか……まあいい。貴様らの無駄な抵抗では希望は見いだせなかったと告げておこう」

「どういうこと…!?」

「空を見ろ。数時間後に俺の星とこの地球は正面衝突し――すべてが吹き飛ぶ」

そして大声で笑い、嘲笑し、地球を、希望を、笑い。笑い。笑い。見下し、絶望に、憎しみに染まった瞳で見据えたプリキュア達の希望をねじ伏せた。

希望やら夢やらという理想論では片付けられないどうしようも無い物理的かつ精神的な絶望をぶつけられ、少女達の体からだんだん力が抜けていく。逆に、イグニスのメンバーは強さを増す一方で、少女の心に追い打ちをかける。

「どれだけ崖っぷちに立たされても……私は諦めない…!!」

ラブリーが先のレッドの攻撃で受けたダメージに痛みながらよろよろと立ちあがり、誠司に攻撃を仕掛ける。

3人と、駆けつけたミラージュも続く。精神的な支柱のめぐみがいるおかげでいつも以上の力が出せている。確信している。なのに。

「無駄だ」

歯が、立たない。地に叩きつけられボロボロになる4人。

仮に多少ダメージを与えられたとしても彼の心は欠片も揺らいでいない。このままじゃ浄化は不可能だ。

ふと、めぐみは思い出した。誠司の家族から誠司の記憶が消されていたこと。壁に書かれていた血文字のこと。いままで戦闘中に叫んでいた彼の心の悲鳴。その全てが、ずっと一緒にいたはずの相楽誠司のめぐみの知らない部分で。

「誠司……っ」

もう立ちあがる力も残っていない。

「……あとは……お前だ!!」

自身の名前を呟く幼なじみなんて見向きもせず、漆黒の大鎌でブルーを薙ぐ。その斬撃は大きな傷を体に植え付け、鮮血が噴き出す。その僅か数秒の間、ブルーは一瞬バリアを展開しようとするも、それを超える勢いの誠司を止めることなど出来なかった。

地面は大量にできたクレーターで荒野の如く荒れ、みんなボロボロ。掴みかけた希望はどす黒い闇に塗りつぶされた。みんなで力を合わせれば乗り越えられると思ったのに。それでもラブリーの心に諦めは無かった。大切な人を助けたいと、苦しみから解放したいと、そう心から思っていたから。

「誠司、もうこれ以上傷つけないで！傷つかないで！」

血まみれになって倒れているブルーを見て。

足を引きずるミラージュを見て。

肩を抱えるプリンセスを見て。

力なく倒れたまま起き上がることもできないハニーを見て。

浅い呼吸で苦しむフォーチュンを見て。

「誠司がずっと一人で苦しんでたこと、気づいてあげられなかった！本当にごめん……！」

自分にも力はもう入らない。ならば、言葉で。

「私、どうすればいいのか、はっきりとは分かんない…。」

「でも、誠司が苦しんでるとき、私も誠司の悩みを受け止めたいって思うの！」
「相談してよ！抱えこまないで、言ってほしい！」
「だからお願い！誠司！」
幼なじみだから。友達だから。大切な人だから。
あなたが私に想ってくれていたように私もあなたを大切に想っているから。
巻き込みたくない、と避けて欲しくなんてなかった。言って欲しかった、と。できる限りの言葉を紡いで紡いで紡いで。
いままでの戦いでも何度呼びかけても駄目だったけど、それでも。少しでも光があるかもしれないから。それに縋るしかないと、やれることをやるしかないと思った。だが。
「例えお前がそう言っても…想いなんて届かねぇよ…!!」
誠司は知っている。めぐみと過ごした日々で空回りし続けた想いの辛さを。届かない想いを。
「届くよ！届くって私は信じてる！」
何も知らなかった癖に。
「どれだけ離れていても、想いは届くよ！」
綺麗事だ。

「私達プリキュアは魔法が使える訳じゃない…。」
「助けたりできないこともあるかもしれないけど…、けどね！信じる気持ちがあれば、何だってできるって思える！」
「仲間といれば、何でも乗り越えられる！」
「想いの力って凄く強力だから！」
「思うように伝わらなくても、無駄だって言われても、世界中がみんな諦めちゃっても、私は信じていたい！愛の名を持つ、愛乃めぐみとしても！キュアラブリーとしても！」
　言葉の最後にめぐみをかき消すように誠司の声が重なり、……つも、と聞こえた。
「いつもお前はそうやって！誰かのためにって！自分のことを考えずに人助けばっかで！誰にも助けを求めずに突っ走って、自分を大切にしないんだ!?」
「自分の気持ちを押さえて！だから、そんな危なっかしいお前を守りたいって思ったのに、俺はまだお前に守られてばっかだ!!」
　氷川のとこで自分を磨いて。大切な人を守りたいって。
「命にかえても守りたいっていう決意も、言葉だけの戯れ言になって！」
「自分の無力さに絶望して！」
　でもプリキュアになっためぐみは誠司なんかより強くて。男としてそれは、辛かった。

「結晶の力を借りてでも、どんな手段を使ってでもめぐみを幸せにしたいって思って！」
「周りの邪魔な奴は削除して！戦場になったこの街を捨てて新しい、理想の世界で暮らそうって！」
「他の奴なんてどうだっていい！それぞれの想いも、それぞれが存在する意味も、俺には知ったことか！」
「めぐみさえいれば、それでいいんだよ！」
「いつもお前はそうやって！誰かのためにって！自分のことを考えずに人助けばっかで！誰にも助けを求めずに突っ走って、自分を大切にしないんだ!?」
「自分の気持ちを押さえて！だから、そんな危なっかしいお前を守りたいって思ったのに、俺はまだお前に守られてばっかだ!!」
「命にかえても守りたいっていう決意も、言葉だけの戯れ言になって！」
「自分の無力さに絶望して！」
「結晶の力を借りてでも、どんな手段を使ってでもめぐみを幸せにしたいって思って！」
「周りの邪魔な奴は削除して！戦場になったこの街を捨てて新しい、理想の世界で暮らそうって！」
「他の奴なんてどうだっていい！それぞれの想いも、それぞれが存在する意味も、俺には知ったことか！」

「めぐみさえいれば、それでいいんだよ！」
「いや、これはもう…めぐみのためとか言って理由作ってるだけだ…。本当は俺は…っ」
「俺は…俺は…っ！お前が好きだ！お前が、愛乃めぐみが大好きだ！」
「お前は俺のことをそうは思ってないだろうけど！俺は、幼なじみとして、友達としてっていう以上に、お前が異性として大好きだ！ずっと前から好きだ！」
　ずっと、言えなかったこと。
「ブルーなんていなければよかった！あいつがいなければプリキュアも幻影帝国もなかった！めぐみがあいつに恋することも、失恋することもなかった。プリキュアにだってなってほしくなかった！」
「俺はお前を守りたいって、そう思ったから空手もずっと続けてこれたのに！」
「でも、凡人の俺には何も出来なかった！女の子よりも弱かった！チョイアークくらいしか相手に出来ないほどに！力が欲しかった！こんなに努力したのに、なんで敵わないのか分からなかった！」
「悔しかった！格好よくて優しいとこもすっげー好きだけど、男の俺がめぐみに守られるのは辛かった！努力は、無駄だったんだよ!!努力なんてしたところで何も変わらない!!力も、関係も!!」
「結果が出ないなら努力とは言わないとか、結果が全てじゃないとか、そんな矛盾した言

葉でさらに訳がわからなくなった!!」

悩む人に対して、無責任な大人は訳の分からない言葉をかけてきて。

「めぐみが幸せになるという結果を求めた!求め続けてずっと努力してきたつもりだったのに、それを否定された気がした!」

「結局俺はめぐみの為じゃなく自分のために努力してただけだった!」

「めぐみのためにと頑張ってる自分に酔ってただけだったんだよ…!」

「そんなの自分でも分かってる!俺はどんなに最低で最悪な人間で、自己中で、承認欲求の強いやつなんだよ!」

「…なぁ、言ってただろ、元の誠司に戻って、って。俺はもともとこういうやつだ!!」

「必死に隠して包んできた、俺の本性がこれだ!!失望しろよ!!」

「愛なんて微塵もないんだよ!!自分の望みの望むまま、欲望のまま動くだけだ。!!」

「俺は誰も他にいないこの世界で、邪魔者も誰もいない世界に作り替えて、そこでめぐみと暮らしたいんだ!!」

「二人でずっと暮らしたい!!ブルーとミラージュも、ひめ達も含めたプリキュアのいない新しい世界で!!」

「邪魔者なんて絶対こないんだ!!理想の世界なんだ!!思うがままに設定できるんだ!!欲しいものも全部手に入れられるんだ!!」

「俺だけが戦士そのものになって、侵略しようとする敵と戦えるんだ!!」
「女の子が俺より強くなる世界なんて、冗談じゃない!!」
「めぐみ、俺を、選んでくれ!!」
無茶苦茶だと、分かっていた。めぐみはこんな事しても喜ばないと分かっていた。でも。それでも。目的を達成させたい。その想いは、思いは、変わらない。最近の記憶の混濁の中でもずっとしがみついているただ一つの大きな願い。
大切な人を守りたいというものが歪んだ願い。
「誠司……」
一体どこで踏み外してしまったのか。
彼の心は戻って来ない。だが、今度はひめ達が苦しみながら振り絞って喉を鳴らす。
「誠司！私はあんたを許さないけど、信じてる！」
「誰よりも優しいって知ってるから！めぐみのことも！もやもやが溜まってたんだよね…。」
「そりゃあ誰でも嫌なことくらいあるわよ！どれだけ自分を責めても過去は変えられない！」
アクシアを開けてしまった自分と重ねて。

「だから誠司、もっと大きな後悔をする前に元に戻って！」
「こんなの間違ってる！理由なんてもう関係ないよ！」
「誰かを傷つけてまでの幸せって何!?それは本当に幸せだと思うの!?全力で止めてやるんだからあああああああああっ!!」
　勇気を出して。世界を元に戻そう？
「私も相楽くんを止めるわ。友達が間違ってるときはちゃんと間違ってる、って止めるのが本当の友達だと思うの。」
　友達として。幼なじみとして。
「ちゃんと止めて、みんなを守って、世界を守って、想いも伝えて…、そしたらまた、みんなでご飯、食べよう…？」
　こんなすれ違い終わらせてさ、元の生活に戻れないのかな。命を奪い合うなんて……間違ってる。
「相楽くん！あなたはいつも正義感に溢れていたわ！」
　覚えてるはずでしょう？あなたが道場に来た日のこと。
「空手でもいいライバルだと思ってた。でも、今のあなたは間違った方向に行ってしまってるわ！」
「私が正しい道へ導くわ！」

「お願い、あの頃の…道場に来たときのことを思い出して…！」
「めぐみを守るんでしょ!?めぐみの幸せを！」
「そりゃあ人生大変なことはあるに決まってる！それを一緒に乗り越えてこそなんじゃないの!?」
　誰よりもめぐみを理解してるはずのあなたが何故めぐみを1番悲しませているの？
「めぐみが悲しむって分からなかったの!?世界が平和になることがめぐみの夢なのに、何でそれを、しかも一番そばで見てきたあなたが壊そうとするのよ!?目、覚ましなさいっ!!」
　道場の先輩として。友達として。希望を離さない。

「誠司さん…！めぐみさんのこと…そう。本当に大事に思っていたのよね…！」
「分かる気がするわ。自分の気持ちを押し殺し続けてきたのに、我慢してきたのに、その我慢は無駄だったのかもしれないと知ってしまって、今までこんなに我慢に我慢を重ねてきたのに、って。どうして、って。」
「どうして自分は大切な人の側に、一番いたいポジションで一緒にいられないのかなって。」
「私がブルーにふられた時も。今までずっと、身分が違いすぎる、仕事に影響が出てしま

う、って我慢してて、自分の思いだけは伝えたいと思って伝えたら、案の定。」
「ずっと私はブルーの隣に『プリキュアの一人』という立場でしかいられない。」
プリキュアと力を与えた人。人間と守護者（神）。乗り越えられない隔たりがあって。
「実は今も少し、思うの。私がブルーの隣に恋人としていられるのは、かつて私が悪に堕ちてしまったから、二度と同じことにさせないためのある種の保護手段でしかないんじゃないか、って。」
「確かに私にあなたのことをどうこういう権利はないかもしれないけど、このままいくと誠司さん、あなたは絶望に支配されて破滅に向かっていってしまうわ！」
「この世界ごとあなた自身も巻き込んだ破壊になってしまう！私も全力で止めるわ！」
かつて同じ立場だった身として。苦しみを知っている身として。
めぐみに続けてずっと秘めてきた想いを吐露するハピネスチャージプリキュアとミラージュ。彼女たちの想いは本物だ。
自身の痛みなんてそっちのけで紡いだ言葉だった。
精一杯考えた上での言葉だった。
友達が友達を心配する言葉だった。それでも。
「戯れ言をごちゃごちゃと……今更何言ってる……ッ!?」
「今まで正しくあろうとした相楽誠司を壊したのはお前らだろ!?」

「傷つけて釘を打って破壊して粉々に砕いて引き裂いて破ったのはお前らだ!!」
「どれだけ苦しんでいても、誰一人気づこうとしなかった!気づいても何もしなかった!!」
「相楽誠司は正しくあろうとしたのに!俺を――負の感情の塊の憎しみよって作られてるこの俺を、アビスを、押さえて、押さえつけて、なんとかしようとしてたのに、一番の支えが崩れ去った!!絶望しかなかった!!」
「そりゃあそんなボロボロの心じゃ俺には抵抗出来ない訳だよ!!むしろ受け入れるほどになってたさ!!今更無くしてから気づくなんて、遅すぎるんだよ!!」
誠司の悲鳴が、叫びが、視線が、胸に突き刺さる。
特にブルーへの睨みつけは今にも追撃せんというほどの鋭さだった。
やがて、そのブルーが沈黙を破った。
「誠司くん…。やはり君はめぐみのことを…!僕は、特にめぐみだけを意識していた訳じゃない…けど、僕が彼女に思わせ振りな態度をとってしまったのが原因なんだ…」
「思い返してみれば、この、ハピネスチャージプリキュアはいつも気にかけていた…。かつてミラージュのいたぴかりが丘のプリキュア、とかヒメがいるとかもあったかもしれないけれど、いつの間にか特別視していたのかもしれない。」
「とても不安定で危なっかしかったし、慣れていない子もいたし…。でもそれは屁理屈

になるのかもしれない。」
　彼も自分で分かっていた。これはただの屁理屈に過ぎない。たとえ本当の気持ちでも、相手を傷つけてしまったという事実は消えないのだから。
「あの時、僕とミラージュのことを言っていたら変わっていたのだろうか。言った上で恋愛禁止を勧めていたら」
「しかし、誠司くんの気持ちはめぐみを大切に想い続けるのだからそんなに変わりはないのだろうか。あるいは、恋愛禁止を勧めたことよりも別に原因が…？」
　時々ボソボソと独り言のように呟きながらさらに言葉を繋げる。ふと、何かに納得したかのように目を開いて俯き、浅い呼吸で再び上を見上げる。
「僕がめぐみを断ってミラージュと一緒にいることにしたからなのか…。そうか。僕がめぐみ達には恋愛禁止と言っていたのに僕自身はミラージュと…だからか。」
「本当に、僕は無力だよ…。昔からいつも駄目なやつだ…。何でこんなに気づくのが遅すぎたんだろうか…？」
　頭が痛い。額や首元を伝う汗を凍える空気が容赦なく冷やす。
「たった一人の少女も救えず、結果堕としてしまった。兄さんの星がクレーターだらけになっていたことにも気づけなかった…」
　出血を抑えた手で頭を抱え、1部が紅く染まっている弟の姿にレッドは多少の戸惑い

を感じながら、時はそのまま流れる。
「気づかないうちにめぐみに気持ちを寄せていたのかもしれない。気づかないうちに少年を憎しみに染められてしまった。知らなかった、じゃあ済まされない…」
　ブルーが自分を追い詰め、思い詰め、並べた言葉に誠司は更に怒りを露わにし、想いを吐く。
「お前がめぐみと互いに呼び捨てで呼び合ったり、抱き合ったり、お姫様抱っこしたり、めぐみを看病したり、ハロウィンのケーキを半分こにしてるペアを組んだりなどした時点で、恋仲と思われてもおかしくないし、俺からめぐみを奪ったとしか考えられないんだよ!!」
「どんなにお前達が否定しても、めぐみを俺から奪い、俺の人生を踏み躙った事に変わりはないんだ!!この女たらしのクソ悪魔めが!!」
　どんどんパラメータは上昇し続ける。精神が耐えられないほどに。身体が耐えられないほどに。
　熱く。熱く。熱く。
　心の底から怒りが込み上げ、絶望が塗りたくられ、憎しみが全てを支配する。誠司が誠司を見失うほどに深淵へ誘われて。
「めぐみの笑顔が俺の心を照らしてくれる!!」

「めぐみの声が俺の心を癒してくれる!!」
「めぐみの優しさが俺に希望をくれる!!」
「めぐみの瞳が俺に輝きを見せてくれる!!」
「めぐみの仕草が。めぐみの性格が。めぐみの全てが!!」
「好きだ。大好きだ。溢れるほどに!!」
「エゴかもしれないが、俺を、俺だけを見てほしい!!」
「みんなの相楽誠司じゃなく、めぐみの相楽誠司になりたい!!」
「めぐみを返せ!!」
「めぐみのそばにいるな!!」
「めぐみをこれ以上悲しませるな!!」
「めぐみに触れるな!!」
「めぐみに関わるな!!」
「めぐみと話すな!!」
「めぐみと笑うな!!」
「めぐみを奪うな!!」
「嫌だ!!みんな嫌いだ!!」
「嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い!!」

「邪魔するブルーが嫌いだ!!偽善者のブルーが嫌いだ!!俺からめぐみを奪ったブルーが大嫌いだ!!」
「俺より強くなる女が大嫌いだ!!俺よりカッコ良い男が大嫌いだ!!」
「幸せになってるこの世界が大嫌いだ!!」
「何も知らない癖に!!何もしてないくせに!!笑ってるこの世界が大嫌いだ!!理不尽で矛盾したこの世界が大嫌いだ!!めぐみの幸せが犠牲になったこの世界が大嫌いだ!!」
「俺だけ不憫に扱われるこの世界と歴史が大嫌いだ!!」
「憎い!!笑い声を聞くだけでも吐き気がするんだ!!何で邪魔するんだよ!?何でだよ!?何でまた守れなかったんだよ!?何で分かってくれないんだ!?」
愛を語り愛を壊す狂人。鎌を持った世界の死神。
そんな姿になった大切な男の子1人救えずに愛のプリキュアを名乗るのが恥ずかしいほどに無力だという結果だけがのこされて。
涙がポロポロ流れるのを、拭いもせず震えた声でめぐみが口を開く。
「今までいつも一緒だったの。小さい時からずっと。いつの間にか、隣にいるのが当たり前みたいに思ってたんだ。まさか、突然いなくなるなんて思ってもみなかった」
「誠司はいつも私の相談を聞いてくれたり、励ましてくれたり、守ってくれたりしてくれたのに、私は何も出来なかった…!今はそれがすっごく悔しくて、情けないよ…。私、誠

司に頼ってばっかでっ…！何か、してあげられてたら、って…」
「気付いてなかった…誠司の、気持ち…。私、誠司の目の前で…ブルーと一緒にいてばかりで…。相談もブルーにしちゃってたし…ごめんね、誠司…っ！辛かったよね…っ！」
「ブルーに失恋したとき、私、これ以上無いってくらい辛くて、苦しかった…。でも、誠司がいなくなって。部屋が凄く寒くなった気がして。誠司があんなに叫んでるのを見て、聞いて、胸がはち切れそうになった…。寂しくて、とっても寒かったんだ…。冬の寒さじゃない…芯から寒くなっていったのを感じたんだ…。もう何もかもが嫌になっちゃって。もういいや、って思うようになっちゃって。どうせ誠司がいないんだから、って全部無意味に思えてきたの。白黒の色の無い世界で、味の無い食べ物を無理やり少しずつ流し込んでいって、帰ったらベッドで横になってるだけの毎日で。」
「最近ずっと考えてたんだ。私はいつも誠司と何をしてたのか。相談も恋愛もプリキュアのことも誠司に頼ってた。逆に私が誠司の相談を聞いたことなんて全然なくて。誠司が弱音を吐くところも、泣くところも、あんなに叫ぶところも、見たことなんてなくって。最初は誠司が操られてるのかな、とかどうしてこんなことするの、おかしい！って思ってた。でも、あれは正真正銘本物の誠司で、今まで私が隠させてきちゃった誠司の本当の気持ちなんだよね…ねぇ誠司、私はどうすればよかった？どうすればいい……？どうすれば誠司を…」

助けられるのが難しくても、苦しみを分け合ったり肩代わりしてあげたいんだ、と。
アビスの肯定を、誠司の肯定をする。
今の誠司が引き起こしていることは良くないことだけど、誠司の気持ちは本物だってやっと見つめ会えためぐみが語った言葉は、誰よりも優しく、誰よりも彼を考えたものだった。
風が髪を仰ぎ冷ややかな肌の傷をさらに痛めつける。
ゆらゆらと揺れ続ける焔のように、さらに不安定に、ボロボロになる誠司に再び主導権が戻る。
「めぐみを抱き締めるのも、めぐみが風邪を引いた時に看病するのも、めぐみをお姫様抱っこするのも、ハロウィンのケーキを半分こにして食べるめぐみと組むペアも、相談する相手も、そして、めぐみの初恋の相手は、全てこの俺、相楽誠司でなければならない!!」
「だが、めぐみがブルーを初恋の相手と認識したばかりか、この俺が永久に雑魚扱いであるというその歴史が貫き通されてしまった以上、最早俺は永遠に幸せになれない!!」
「めぐみの体と心はブルーだらけで汚れてしまって、最早触れる事すらも出来ない!!」
「めぐみがプリキュアになった時点で、もうこの俺には破滅が確定していたんだよ!!」
「本当に罪悪感があるなら、今まで奪ってしまった人生を返しやがれ!!」

「出来る事なら、時間を巻き戻して、記憶も全部消去されて、過去からやり直したい!!」
「こういう風にな!!」
そう言って、空間にモニターのようなものを出す。２０１４年のロゴが刻まれ、誠司も戦士そのものになって戦っているばかりか、ブルめぐや誠ひめの部分を誠めぐに変換している映像が流されている。
「これが誠司の理想の世界……」
そう呟いてうんうんと1人で頷き、リボンに目をみやって、誠司の暗い目を見つめる。
「誠司、あなたを一人の異性として愛している。生まれた時からずっと」
「今まで誠司の気持ちに気付いてあげられなくて、きちんと向き合わなくて、あなたを傷付けまくってしまって、不幸に追いやってしまって、本当にごめんね」
「もう、ブルーとはお互いに名前で呼び合わないし、ブルーにも近付かない！」
「あたしの初恋の相手は、誠司　！」
「あたしを抱き締めて、お姫様抱っこして、あたしを看病してくれたのも、ハロウィンのカボチャケーキを一緒に半分こしたペアも、みんな誠司！」
「あたしは人助けはしないし、ずっとあなただけ見てる！」
「誠司に対して出来なかった事をいっぱい、何でもするわ！」
「そして、私はプリキュアにならない！」

「あなたよりもっと弱くなって、あたしが見ている事しか出来ない立場になる！」
「必要以上に誠司の傍に居るから！」
「なるべく他の人とは居ないようにするから！」
「もうゆうゆうやひめ、いおなちゃんや神様にも永久に近付かないから！」
「もう、誠司を離さない！」
「絶対に!!」
「お願い！目を覚まして、誠司！」

耐えきれなくなった心の最初で最後のラインを超えて、心の鏡が大きな音を立てて砕け散った。粉々に。世界だけでなく自身を崩壊させてしまい、半狂乱になりながら、暗い顔で鋭い眼で見下ろす誠司が静かに、かつ激しい感情をぶつけて告げる。
「もう謝って和解したら、お前達の罪がチャラになって、スッキリすると思ってるのか!?」
「お前等はそんなに偉いのか!?」
「どうかな？どうせ、自分のことで精一杯で、俺のことなんか微塵も思ってなかったんだろ!?」
「思ってなくても無自覚で心の中で思ってたんだろ!?」

俺を笑ってたんだろう？
「ブルー、お前もそうだ！」
「どうせ俺からめぐみを奪って、俺が不幸に追いやられる姿を楽しんでたんだろ!?」
「思ってなくても、めぐみと二人掛かりでこの俺をボロボロにして幸せだったんだろ!?」
「口ではどうとでも言えるさ！よくそんな減らず口が叩けた!!」
「そんなことを言えば許してもらえるとでも思ってたのか!?」
「――――じゃあ、あの時俺はどうすればよかったんだ!?教えろよ!!」
嘆きと怒りがぐちゃぐちゃに混じりあって溶け合った感情をコントロール出来ずに、言葉を吐きすて、既に赤く染まりつつある白い服と青い髪を抉り赤い花弁を散らす。
少女は自分が力になれなかったことを思い知りズキズキと痛む胸を抑え、過呼吸になりそうになる体を必死に落ち着こうと抗う。
男性は深く刺さった鎌の傷跡を力の抜けた手で撫でながら歯をぎゅうと固く閉じる。
――めぐみは周りを見回した。
荒れた大地、傷だらけで立ち上がることも言葉を発することも出来ないほど力尽きて倒れたままのひめ、ゆうこ、いおな、ミラージュ。ただ漠然と見ることしか出来なかったぐらさんとファンファン。プリカードファイルを見つめるリボン。
そして青を染める赤。赤。赤。

ブルーから滴り続ける血潮が、空から迫る赤い星が、誠司に宿る憎しみが、空気ごと染めていて。
もうめぐみには贈れる言葉も戦う力も無い。皮肉にもただの少女になってしまった。
それでも決意だけは一丁前で。
「リボン……」
希望を呼び。
「ラブリー……いや、めぐみ、もう決めましたのね……後戻りは――」
「うん。分かってる……ありがとう」
プリカードを掲げて。
「プリカード……!?一体今更何を願うつもりだというんだ…!?」
レッドが思わず驚きを口に出し、汗を伝わせる。
「プリカード…お願い……誠司を助けたいの……誠司の理想の世界に――!」
瞬間、眩い光が放たれ、めぐみの『時間』が崩壊していく。
ごめんね、みんな。
ごめんね、ひめ。いおな。ブルー。ミラージュさん。
光の中で誰かの優しい声が聞こえた。
「ごめんね、がんばって」

と。

――ズルしちゃってごめんね、誠司。

☆☆☆

「なんだこれ…」

「誠司……さん!この世界を救って!」

突如現れた怪物に対峙した誠司がめぐみやみんなを助けたいと願うと、目の前に謎のベルトが出てきて、空からそんな声が聞こえてきた。

青い髪の男の人が鏡越しで説明してきた通りにしてみると、みるみる身体がスーツに包まれていき、光とともに変身してしまった。

＊＊＊

「めぐみ……」

林間学校で体調が悪くなった私を支え、看病してくれたのは誠司!良くなりますよーに、ってぴかりが丘神社のお守りをくれたの!

誠司の手、あったかかったな…!

そそそそれに私、おっおおおお姫様抱っこまでされちゃった……。

「そういえば、通りすがりの歌の女神様?だっけ、どうなったんだろう」

「上手くいってんじゃねーの？……って、それよりお前が早く体調治さねーとだろ？病人は休んだ休んだ」
「へーい……」
＊＊＊
「ぴかりが丘のハロウィンパーティーは大切な人と半分こするんだぜ」
「そう、なんだね……ちょっとミラージュ探してくるよ」
女神様の協力もあり、かいどうと共に無事クイーンミラージュを倒し、浄化に成功してからは、ずっと自責の念を感じてきたブルーの顔色も大分良くなっていた。
宿敵であり兄であるレッドを倒すことが今の目的となっている。
「おう」
嬉しそうにカップケーキを持って去ったブルーを見送り、かいどうのほうをチラリと見やると氷川とあたふたしているのが見えた。
さて、俺は……
「オッス誠司ー!!今年も!!」
「半分こ、な!!」
「幸せハピネスおっすそーわけ!!」
守りたいこの笑顔。

＊＊＊

「ねえ誠司」

「なんだよ改まって。その顔……何か悩み事か？」

「まあね……。友達の話なんだけど、男友達のことを友達として見れなくなっちゃった、異性として意識しちゃうって悩んでて」

友達って誰のことだろうか、なんて考えながら、あわあわとして視線を逸らすめぐみにココアを渡して、

「その人の気持ち次第だろ。ほんとに好きなら付き合っちゃえばいいんじゃね、意外とお互いそーかもしれないんだし」

「そう……かな」

普通の人なら気づきそうなバレバレな相談の仕方だったが鈍感な2人にはそんなこと気づくよしもなく。

＊＊＊

「私……誠司の力になりたいな…」

か細い声で独り言をぽつりと呟く。

幼なじみは文字通りヒーローになった。

私のヒーローは、世界のヒーローになった。

それがちょっぴり寂しくて。
何も出来ない私が悔しくて。
大切な人のために何かしたいって、何が出来るんだろうって考えてしまって。
さらさらと揺れる河川敷の草を眺め、蒼穹を仰ぐ。
何気なく天に手をかざしてみると、ひょこっと誠司が顔を覗かせた。
「なーに思い詰めた顔してんだよ。俺は……その……めぐみが傍に居てくれるだけで……すっげー力が湧くし、めぐみのためなら頑張ろーって思えるんだぜ……っ」
なんて顔を赤くしながら言ってきたりして。
思わず目を逸らしてしまった。
心臓の鼓動が世界中に響いちゃうんじゃないかってくらいに早く、大きかった。
＊＊＊
「……来たか、愛を名乗るヒーローとこざかしい小僧。それと愚かな我が弟よ」
「兄さん……！」
「――幸せは一瞬。愛は幻。お前達に見せてやる。身も心も焼き尽くすような不幸を…！」
『……！』
鏡越しに見守るミラージュが苦しそうな顔で反応する。

「どうしてこんなことを!!!」
「憎しみは誰もが持っているのに誰もが否定したがる。だから教えてやってるんだよ、全てを憎めと。お前が愛を説くように、俺は憎しみを、怒りを、嘆きを、不幸を語る。例えばそうだな…」
そう言って玉座から3人を見下ろしたまま、レッドは目線を上方に向けた。突如出現した大きな鏡に映し出されたのは……
「めぐみ!!!」「愛乃!!」
黙って置いてきたのが裏目に出てしまったようだ。1人にするべきじゃなかった!!!
「やめろおおおおおおお!!!」
ヤバい。それだけは感じ取った誠司が拳に力を込めてレッドに向ける。それを鼻で笑って跳ね返されて戸惑いながらも空中で回転して着地。すかさず次の攻撃へシフトする。海藤も続く。2人で連携し、今までの秘密の特訓の成果を実感していた。
……が、煙が晴れ、レッドのすまし顔が見えた。華奢な体も、纏うマントも無傷。
「くそっ……全然歯が立たねぇ!!」
すかさず轟速で飛んできた光線が2人に直撃、変身が溶けてしまった。あっという間。圧倒的なまでな力。圧巻だった。まだ奴は玉座から1歩も動いていないというのに。

「愛乃めぐみ……お前は…俺が憎いだろう?さあ憎め。感情を沈ませて身を任せろ。地球に星を落とそうとしている俺を、世界を不幸にさせている俺を、貴様の大切な奴を戦わせる羽目になった俺を!」

鏡に映る、うなされているめぐみを見つめる誠司。

「めぐみぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!!!」

『にく、、、い、、、?』

駄目だ。誠司のためにも踏ん張らなければ。でも考えてしまう。声が心にしみ込んで。

この人が愛の神様のお兄さんで

誠司を戦いに巻き込んだ敵のボスで

世界を苦しめる原因で

誠司を苦しめる原因で

ミラージュさんとブルーさんの間に悲しみを振りまいた元凶で

みんなを不幸にする最厄なんだ。

誠司をあんなに苦しめるなんて

「ゆる、、さない、、!!!」

許さない。大切な人を守れない私も、大切な人を傷つける人達も、みんなみんな憎い。

たった一つの綻びから流れ込むレッドの結晶の憎しみ。それは少女の優しい心を傷つけ、優しい故の憎しみを植え付けようと根を巡らせようとしてきて。そんな時、鈴のようなあたたかな柔らかい声が聴こえた。

（あなたには沢山の愛がある。今までの日々を思い出して。気づいて）

――オッスめぐみ！

――みんなで食べるご飯はいつもよりずーーーーっと美味しいのよ？

――愛乃さん！その、、、今度いろいろ、お話しましょう？

――愛乃！誠司のこと、幸せにしてやれよ？

――俺は……その……めぐみが傍に居てくれるだけで……すっげー力が湧くし、めぐみのためなら頑張ろーって思えるんだぜ……っ

（――この胸に愛がある限り……）

『この……愛乃めぐみは――無敵なんだからあああああああああああ!!!!!!』

「……なんだと!?」

赤く輝く結晶が粉々に砕けた。

『私も、頑張るから！戦力にはなれなくても、少しでもみんなを支えたい！助けに…力になりたい！憎しみだって受け入れる！どんな辛い感情も私だから！――誠司!!海藤くん!!ブルーさん!!お願い――!!』

強烈な誘いを振りほどき、力に溺れることを拒んだめぐみ。

「かっこ悪ぃとこみせちまった……」

「だな……」

フラフラになりながら立ちあがる2人と、生き生きとしているめぐみに驚きを隠せないレッド。

ボロボロになっても戦意を取り戻した少年らの心の底から沸きあがる希望。

「この力は……」

助けたい。どうしてここまで憎しみに囚われてしまうようになったかは分からないし、彼のことを何も知らないがそう思った。

「理由があるはずだ。みんなまとめて俺たちが助ける！」

「めぐみを洗脳しようとした時、自分を責めるみたいな、嘲笑っているような言い方をした。俺が想像するよりずっと苦しかったんだろ!!?だから、、倒すんじゃない。暗く膿の

溜まった気持ちを浄化して心を解放する。それが愛の戦士の役目だ!!辛いことがあったって諦めてやらねぇ!!」

海藤と目を見合わせて、深く頷き、心を込めて技をぶつける。

「「スーパーハピネスインパクト!!!!!」」

直後、眩い光がレッドに直撃し、包み込んだ。

「なんだ、、、この光は、、、!!……あたたかい、、お前たちは……憎しみすらも不幸すらも受け入れるというのか!?」

「そりゃ投げ出したくなることも憎しみに身を任せちゃいそうになったり自分に負けることもあるだろうさ、でも―

仲間が、大切な人が、いるから。頑張れる。諦めたら始まらない。終わったまま、変わらない。むしろ悪くなるかもしれない。でも諦めなければきっと上手くいくことだってある。その可能性がたった1パーセントでもあるならさ、賭けてみたっていいんじゃねぇの」

ぽかん、と呆気に取られた顔をしてから、焼け焦げた服の1部の灰を払い、呟く。

「――――それで、いいのか?」

「?なにがだ?」

「俺は!地球を無に帰そうとした!お前たちを倒そうとした!利用出来るやつは利用し

た！何故憎まない!!?」
「俺がもし、めぐみやみんなを自分の力不足で助けられなかったら。今頃レッドと一緒に地球を壊してたかもしれない。自分に負けていたかもしれない。誰にだって認めたくない負の感情はあるけど、認めて前を向かなきゃいけないこともあるからさ」
「兄さんの根幹には愛が宿っている……自分でも分かってるはずだよ……民をあんなにも愛していたんだ、守ろうと必死だったんだ、だから――」
「――俺は、憎い」
「……」
「俺は！あの隕石もあいつも地球もブルーも幸せそうで憎かった！だが1番憎いのは自分に負けた奴だ。嫉妬した奴だ。全てを無くせばいいと本気で思ってた奴だ。星を隕石から守れなかった無力な奴だ。大切なやつらを目の前で失った哀れな奴だ。俺は、、、俺が、、、憎い、、。もしも諦めなくてもいいのなら、少しでも希望があるのなら醜く縋ってみるのも……悪く、ないかもな……」
　レッドが誠司の手を取り、惑星レッドは地球への衝突をやめ、地球の平和は取り戻された。
　レッドは、元幹部やブルー、ミラージュと共に地球及び惑星レッドの復興を決意した。彼らの瞳には光ある未来が宿っていて――。

☆☆☆

あの地球は今どうなっているかな。

みんな元気だろうか

【今】っていうのがどこを表すのか、この私にはもう分かりづらいのだけれど。

青く澄んだ美しい星、地球。

あんなことあったな、懐かしいなぁ、なんて思い出を噛みしめて、広い星を一人歩く。

あれだけ求めた、圧倒的な力が今の私にはある。でもそれは誠司を助けるための力で、誠司を助けられない力だ。

時間を巻き戻して、プリキュアという存在を改変した。宇宙からの使者、女神様なんて名乗っちゃって……はは。

誰かを助けたいと強く思った人の心に反応して私が見極めて、力を授ける。そんなことを数えるのも諦めるくらい長い間続けて。歴史の強制力というか、ミラージュさんはいろんな運命が絡み合って敵対してしまったけれど…。誠司はみんなを救ってくれた。新しい世界の私も、みんなも、世界も。それだけで満足だった。だったのに。こちらへ向かう彼らの姿が見えた。それだけでもう目が潤んで、気持ちが溢れてしまった。

「――ずるいよ」

宇宙の彼方の小さな星、ラブリー。

その守護者たる存在は力を真に求める者に力を与えた。
その女神の誕生秘話は、今となっては誰も知らない。
世界線を越えて。それでも運命は繋がっている。
深淵を見た世界のめぐみの姿は変わっていても、彼が力を求めてここに訪れたのだと分かっていても、涙があふれて。
――――大好きだよ、誠司。